
魔法戦士リリカルなのは Wind ~ A requiem to gods ~

マグロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦士リリカルなのは Wind ｝ A requiem
o gods ｝

【Nコード】

N1094L

【作者名】

マグロン

【あらすじ】

JS事件から二年・・・高町なのはは最近の自分に違和感を感じながらも、教官官として忙しい日々を過ごしていた。そんなある日、彼女は死んだと思っていた幼馴染と再会し、彼からある協力を申し込まれた。

オリジナルキャラクターと既存のリリカルなのはのキャラクター達が織り成す、新たななのはの物語。それは、神々の宿命さえも覆す・

・・純粹な愛の奇跡・・・

魔法戦士リリカルなのは Wind 宿命と共に・・・始まります。

始まりの日（前書き）

この小説は作者の初作品であると同時に初投稿作品でもあります。

非常に至らない作品だとは思いますが、ぜひ読んでみてください。
そして感想なり注意点なりをコメントお願いします。

始まりの日

「ん・んうーん」

静寂な闇の中に一人の声が響き渡った。腰まで伸びるサイドアップの長い髪に、凛々しくも優しい表情をした若い女性だった。彼女は目の前の電子モニターを見つめながら、別の電子モニターに慣れた手つきでデータを打ち込んでいた。

「ふう・・・まさか、初等科の子達に教える基礎魔法学の講義が、こんなに大変だなんて思わなかったな」

小さな溜息をこぼしつつ、彼女はまたモニターに向かい合った。

「高町一尉、そろそろお休みになられたほうが、宜しいのではないですか？」

まだ、隊舎に残っていた私は彼女のいる資料室の中に入ってきてそう告げた。

「ありがとう。でも、もう少しで終わりそうだから、心配しないでいいよ。それから、私の事はな的是んって呼んでって、何度も言うてるのに・・・」

「申し訳ありません。つい、いつもの癖で」

彼女は階級で呼ばれるのを嫌うので、私も気をつけて名前で呼ぶようにしている。

「真面目なのは良い事だけど、今からそんなのだと後から苦労するよ」

「以後、気を付けます」

私は彼女の微笑む顔を見つめながら頷いた。

「ですが、なのはさんも本当に気を付けてください。このところ、よく遅くまで隊舎に残っておられるお姿を、他の者も見ておりますので」

「にははは・・・その事に関してはご迷惑をお掛けしています。」

まるで、あどけない少女のような顔で、彼女は私に謝った。

私が高なのはさんと親しくなって早半年が過ぎた。教導隊の隊長秘書として赴任してきた私は、憧れのエースオブエースとよく接触する事が多く、その都度この人の優しさや心配りに触れ、今では当初の緊張感が嘘のようになくなっていった。そんな私に彼女は、一人娘のヴィヴィオちゃんの事や、大親友であるフェイト・T・ハラオウン執務官・八神はやて二佐の事を話してくれたりもした。

「しかし、なのはさんも大変ですね。ただでさえ掛け持ちの教導が多いのに、こんな催し事にも参加しなくてはいけないなんて」

私が微笑みながら言うと、彼女は心底根を詰めた様子で言った。

「もう、笑い事じゃないよ。本当に大変なんだから」

その言葉が私に先程の光景を思い出させた。事の発端は、サンクトセヒルデ魔法学院からの些細な頼み事であった。その内容は初等科の生徒に同の魔導師が二日間に渡り、基本魔法学の講義を行って貰いたいというものであった。それに抜擢されたのがなのはさんであったが、彼女はその申し出に対し……。

『私が教える生徒とは、魔法の基礎は十分に理解した上で、より高度な魔法運用を行いたいと思っっている魔導師達です。残念ですが、今回の任務に私は向いていないと思います』

と告げて断った。しかし後日、私は隊長から再び彼女を呼んでほしいと頼まれた。

「高町君。私も君の志の高さは重々承知しているつもりだ。そして、君が非常に優秀な魔導師であるという事も……。だからこそ！私は君しか適任者はいないと思っっている。魔法の事を誰よりも理解し、それを教えられるのは、君しかない……。とね。」

「……」

「それに、この件に関しては上層部からも是非君をとの申し出があった。高町君・・・考え直してはくれないだろうか。」

「・・・」

「確か・・・君の娘さんもあの学園の生徒だったな。」

「ええ・・・今年で二年生になります。」

「子供の成長を直接見る事ができるというのは、親としては嬉しい限りだ。逆に、親の働いている姿を見せる事も子供の成長に必要な事だと思っただが・・・」

彼女は無言のままです。その場に直立し微動だにしなかったが、大きく深呼吸をした後、ようやく口を開き始めた。

「わかりました。この件はお引き受けします。詳細な日時や講義の内容等は、私が直接^{サント}ステヒル魔法学院にご連絡します」

彼女はそのまま一礼して、きつと踵を反すとそのまま隊長室を後にした。

それが約八時間前の話であり、今彼女がしているのがその講義の内容のまとめや日時の調整等である。

「ふふっ・・・すみません。お詫びになんでもお手伝いしますよ」

「ああっ！そういう意味で言った訳じゃないから気にしないで、ほらクレアも明日は早いんだから、今日はもう帰ってゆっくり寝たほうが良いよ」

こういう時の彼女は特に頑固というのが最近になって分かってきたので、私もそれ以上は何も言わず邪魔になる前に帰ることにした。

「では、お言葉に甘えさせてもらって、お先に失礼します。お疲れ様です」

「お疲れ様。気をつけてね」

なのはさんに一礼して隊舎を出ると、そこにはヴィータ二尉が神妙な顔つきで佇んでいた。

「ヴィータ二尉お疲れ様です。まだ、お帰りにならなかつたんですか？」

私が尋ねるとヴィータ二尉は隊舎のほうを見つめながら・・・。

「高町一尉は・・・まだ中か？」

「はい。まだ中で例の件に関する資料を作っておられます。」

「そうか・・・」

ヴィータ二尉が何かに苛立っているような感じがしているのは、見ていけば私にも分かった。だからこそ、私はこの場を早く一刻も早く立ち去ろうとしたのだが・・・。

「なあ。今のなのを見て、おまえはどう思う」

「どう・・・っと言いますと？」

「おまえが最初にここに入ってきた時と比べて、なのはが何か変わってないかって聞いてんだ!!」

「それは・・・その」

「おまえも薄々気付いてるんだろう？最近のなのはの仕事の内容を」
確かに、最近のなのはさんの仕事はおかしい。本来教導隊の仕事とは訓練部隊の仮想敵や開発中の新装備の運用試験等だが、最近の彼女は式典や行事に局の代表として参加したりするような事が殆んどだ。こんな見え透いた事実が気が付かないほうがおかしいというものだ。

「あんなの・・・宣伝だよ」

「JS事件で管理局地上本部の司令官が、その首謀者の仲間だったんだからな。ミッド住民の管理局に対する不信任は相当高い・・・」

「その悪いイメージを払拭する為に、なのはは利用されてるだけなんだよ!!あんなの・・・あいつの望んでる事じゃねえよ!!」

「・・・」

「それでも、あいつはみんなの為にって、笑ってやがるんだぜ。あたしは情けねえよ!!」

涙混じりの叫びと嗚咽。友人に対して何も出来ない自分の弱さを嘆いている姿が、私には見ていられなかった。

「悪い。おまえに愚痴を言ってもしょうがないよな。おまえはもう帰れ。あたしは高町一尉が終わるまで待ってるから」

「はい。お疲れ様です」

「おう！お疲れ、気をつけるよ」

(私は・・・なのはさんの為に何ができるんだろう?)

考えても何も浮かばずに夜道を歩いていると、私のデバイスに連絡がはいってきた。音声通話のみの表示だったが、本局からの連絡だったので私はすぐに応じた。

「はい。クレア・レッドフィールドです。」

「あゝ、あなたが教導隊の隊長秘書のレッドフィールド三尉か？」

初めて聞く声だが、私はそこから相手が二十台前半の男性であると予想をたてた。

「失礼ですが、どなたですか？出来れば所属部署も教えて頂けると助かります」

「悪いが、それは言えん。だが局の人間である事に間違いない」

この男は何を言っているのか？所属は言えないが、局の人間である事に間違いない、と言っても怪しんでくれと言っているようなものだ。まさか！！JS事件の関係者が局員を装っているのかもしれない。そう思った私は今まで緩んでいた気持ちに鞭を打って、再び相手との会話を始めた。

「あなたがどこに所属し、誰であるのかの確認が取れなければ、こちらとしましても対応できかねますが？」

今までと違い声のトーンを低くし、相手の出方を伺うように私は尋ねた。

「警戒するのはわかるが、俺は別に不審者でも犯罪者でもない、ましてやJS事件の関係者でもない。ただ、教導隊のある人物に会いたいののでアポを取りただけだ」

男は淡々と自分の目的を話したが、私はその話を鵜呑みにする事なく今ここで会話を切るか、それとも相手から情報を聞き出そうかと考えていた。

「・・・」

「・・・管理局番号C09708 “風間 冬弥”」

「!!--」

男がそう言つと私のモニターにデータが表示された。

余談ではあるが、管理局番号とは局に在職している者達の身分証明書を閲覧する為の暗証コードであり、これは声紋と本人の名前が一緒に登録され、変更や改竄を行うのも人事部の立会いの下、正当な理由であると判断された場合のみ行われる。そして、最後に指紋認証をしてようやく全てを閲覧する事ができるのだ。つまり、電話先の人物の暗証番号・声紋・指紋が登録されている人物と一致しないと、閲覧が出来ないのである。

そこには確かに私の見知らぬ男性の在職データが登録されているが、殆どの項目が閲覧不能になっている。しかし、電話越しの男が言った名前と、データ上の名前が一致している事から局員である事は認めなければならない。だが・・・。

「信じてくれたところで話を戻そうか。俺が会いたいの、あんたがよく知っている人物だ。」

「私が・・・、よく知っている人？」

「ああそうだ！馬鹿正直で、自分の事は考えず相手の事しか考えない。不器用なバカ女」

「・・・」

「高町なのはだ」

「・・・」

「まあ、俺は世間一般で言うあいつの幼馴染だな」

「えっ!？」

その瞬間風が吹いた。とても強い風が。これからの私たちの運命を示唆するような、そんな風だった。

管理局の秘密（前書き）

初心者ながらもなんとか頑張って2話目を書く事ができました。

今回からフェイトが出てクロノが出て、新しいオリジナルキャラの登場します（名前だけです）。

ここからは管理局との繋がりも含めて登場人物達がかっこよく見えるように書いていきたいと思っています。前書きが長くなりましたが、これからも全力全開で頑張ります。

管理局の秘密

今の私は、とても幸せだと思う。自分のやりたい仕事に就いて、信頼できる部下と仲間達、とても大切な親友、そして・・・かけがえのない存在を持ち、何も不満に思う事はない人生を送っているのに・・・何故・・・こんなに気持ちが沈んでいるのだろうか？

「・・・」

「駄目だな～こんなんじゃ」

最近はずがタイプな考え事ばかりするのが、彼女の一番の悩みになっていた。

「悩んでもしょうがない！明日も子供達に魔法の授業をしなきゃいけないんだから、今日はもう寝よう」

彼女はそのまま布団に入り、明日の事を考えながら眠りについた。

「私に捜査協力の依頼？」

「ああ。僕も詳しい事は聞かされていないので、具体的な内容を今説明する事は出来ないんだが・・・引き受けてくれるか？」

時空管理局本局のある一室で、一人の女性が突然言い渡された任務

について、上官らしき人物に尋ねていた。

「協力を要請してきた部隊は、何処？」

「・・・評議会の直属部隊からの要請、という事以外は何も聞かされてはいないんだ」

彼女の端正な顔立ちが少しづつ歪み、目付きが鋭くなっていくのを上官の男性は見逃さなかった。

「ちなみに、この件は評議会から直接僕に連絡が来たので、何かの陰謀・・・という線はないと思うが・・・」

「・・・いいよ。この要請、引き受ける」

「・・・いいのか？」

上官の男性は突然の彼女の申し出に少々戸惑っていた。

「何ていうのかな・・・直感的に引き受けていいと思ったの」

「そうか。君がそう決めたのなら、僕もあれこれと言うつもりはない」

「ありがとう。じゃあ確認なんだけど、私はその人達に捜査協力すればいいんだね？」

「そうだ。ただ、先方から君と行動を共にするのは二人だけだとの連絡を受けているが、もう一人は別の用件があるので先にそちらを済ませてから合流するそうだ」

「わかりました」

「すまないな、フェイト。いつも苦勞ばかりかけて……」

「そんな事気にしなくてもいいですよ。“お兄ちゃん”」

上官の男性は彼女に謝罪の言葉を述べると、心底申し訳ないような表情になっていた。彼女はそれに気付き微笑みながら、いつも彼をからかう時に使う決まり文句を言った。

「……それは止せと、前にも言っただろう。それに、今は仕事からだぞ」

「ふふ、了解です。クロノ提督」

二人が兄妹きょうだい関係になってからも、クロノはフェイトから“お兄ちゃん”と呼ばれる事に気恥ずかしさを感じていた。フェイトもそれに気付いたので普段は“クロノ”と呼んでいるが、彼をからかう時は必ずこの決まり文句を使うのが彼女の癖になっていた。

「まったく、そうやって人をからかうところが、エイミィに似てきたなあ」

「なんですって?」

「いや、何でもない」

フェイトはクロノの態度に微笑み、クロノはそんなフェイトを見て溜息をこぼした。

「さて、話が半分それってしまったが、今回の件よろしく頼む」

「大丈夫だよ。私の方は問題ないし。ティアナも今は落ち着いているから、補佐として十分に頑張ってくれると思う。それに話を聞く限りだと、一緒に行動する人達は只者じゃないんだよね？」

「おそらくそうだろうな？僕も今回の件で初めて知った位だ。その証拠に、本局でも一部の上層部以外は公には公開されていないらしい」

「じゃあ、クロノも評議会から信頼されてるって事だね」

「それは違うじゃないかな？単に今後の、君達元六課とのパイプ役として教えて頂けたんだろうと思ってる。あの方達は、君達を非常に高く買っておられるからな。だから、わかっているとは思うがフイトもこの事に関しては、くれぐれも内密に頼む！」

「わかってる。誰にも言うつもりはないよ。たとえ・・・なのはでもね」

なのはの名前を口にしたとたん彼女の表情が曇ったのが彼にはわかった。最近のなのはの近況を知っているからこそ、彼女が心配していないはずがないと思ったのだ。

「それと聞いておきたいんだけど、私と会う人物の個人情報ってそつちでも分かるかな？」

彼女はその場の空気を払うように、仕事の話に戻った。彼もその事に触れず、彼女の質問に淡々と答えた。

「ああ、それはこっちでも把握している。今情報を送る」

そう言うと彼は、タッチパネルを操作して情報を彼女の魔導端末デバイスに送った。彼から送られてきた情報を彼女は自分の魔導端末デバイスですぐに確認した。

「レオン・スウィンフォード、年齢二十一歳、身長一八七センチ、体重八八キロ、魔導師ランク・・・空戦トリプルエスSSSランク!？」

彼女が驚愕するのも無理はない。管理局においてSSSランクの魔導師等聞いた事がないし、存在した事すらないのだから。それも！自分と同じ年の青年が、それ程の使い手なのかという事にも彼女は困惑していた。

「これ・・・間違いじゃないのクロノ？」

「僕も始めはそう思ったので評議会に問い直したが、間違いなく真実との事だ」

「・・・」

「こればかりは、実際に会ってみないと確認のしようがないと思う」

「そうだね。会ってみないと分からない事もあるし」

「それでは、話が長くなってしまったが、今日はこの辺で失礼するよ」

「うん。ごめんねクロノ。忙しいのにつき合わせて」

「じゃあな」

「うん。おやすみなさい」

二人の会話はそれで終わったが、彼女の脳裏にはある実験の事がよぎっていた。

（人造魔導師計画・・・）

先のJS事件において、彼女は人造魔導師の被検体である二人の魔導師の事を思い出していた。会ってはいないが戦闘記録を見る限り、シグナムやヴィータを圧倒していたゼストと呼ばれるオーバーソラック魔導師。そして今や、自分にとっても掛替えのない存在であるヴィヴィオ。これもなのはとの戦闘記録を見た限り、その能力は量りきれぬ物ではない事がわかった。

（もし、この人が人造魔導師であって、幼少時から魔力運用の訓練を受けていたのだとしたら）

可能性はなくてもないだろうと彼女は思った。なにせ前評議会とスカリエッティは常にコンタクトをしていたのだから、存在してもおかしくはない。また、それならば今まで公の場にその魔導師達を出せなかった訳も頷ける。

（今回の件は、評議会からの直接要請だったクロノは言ってたけど・

・・・やっぱり、用心しといたほうがいいかもしれない)

彼女は近くの内線に手を伸ばし、補佐のシャリオ・フィニーノの部屋に連絡を入れた。

「はい。シャリオ・フィニーノです。」

通信モニターのコールを二回程鳴らすと、彼女自慢の元気で明るい声が響いた。

「シャーリー、ごめんね。こんな夜遅くに」

フェイトが彼女を呼ぶ時は愛称の“シャーリー”で呼ぶのが決まっている。だが、いつもとは違いその時のフェイトは何か焦っているように彼女は感じた。

「いえ、気にしないでください。それより、どうしたんですか、フェイトさん？」

「シャーリー。悪いんだけど、今からレオン・スウィンフォードっていう人物に明日会えるようアポをとってほしいんだ。待ち合わせ場所はミッドの中央区にあるセブン・オーシャンってレストラン」

「あつ明日ですか！？ちょっと、待つてくださいいフェイトさん。明日は早朝から会議と臨検が入っていますし、午後からもスケジュールが詰まっていますよ！それに相手の予定も分からないですし・・・」

彼女の答えはもったもである。普通相手の予定も分からないのに、明日絶対に会いたいというのは少し図々しい話である・・・が。

「多分大丈夫、私の名前を出せば向こうも会ってくれと思うんだ。こっちの予定は何とかするから！」

「え？」

ここまで確信的な事を言うフェイトは珍しいと彼女は思った。普段のフェイトは、相手の都合に合わせて自分のスケジュールを調整するのにも、今日のフェイトは何故か積極的だった。

「わかりました。とりあえず、この人にアポはとってみます」

「ごめんね。ありがとうシャーリー。それじゃおやすみ」

「おやすみなさい。フェイトさん」

フェイトとの通信が切れると、彼女はすぐにその人物に連絡を入れてみた。フェイトもシャーリーとの通信を切ると、すぐに何かを調べ始めた。その夜、フェイト・T・ハラオウン執務官の部屋の明かりが消える事はなかった。

管理局の特務部隊（前書き）

初の連続投稿ですが、今回は今までよりも若干短めになっています。

さてこの話は完全オリジナルキャラの話です。作者がこれから書いていきたいなのは世界の設定の一部を曝け出した話でもあります。

そしてこの話の後からいよいよ、オリジナルキャラやなのは達の会合が始まります。みなさまに楽しんでもらうために、頭に冷えピタを張りつつ頑張っていきます（古いネタ）。では第三話をどうぞ

管理局の特務部隊

次元の海に浮かぶ時空管理局本局。その中でも上部に位置する場所にその部隊の隊舎があり、殆どの管理局員はその存在を知らなかった……。

「彼女の方から接触してきたのか？」

その隊舎のブリーフィングルームにて、二人の男が話をしていた。二人とも百八十センチを超える長身に加え、がっしりとした体つきをしているので、屈強という言葉がいかにも似合いそうである。

「ああ。まあ、連絡をしてきたのは補佐の姉ちゃんだったかな」

「補佐つつつと……ティアナ・ランスターって嬢ちゃんか？」

「おめえ馬鹿かぁ……さつき俺何だった！！姉ちゃんつたる姉ちゃんって！！シヤリオ・フィニーノって奴だよ」

「いや、俺知ってたし。てか、おまえをからかっただけだし」

「……」

「上等だぜこの野郎……。今すぐに決着^{ケリ}つけてやる」

「ところでなレオン。今日彼女に会う約束をしたって事は、その場である話もするの？」

今までおちゃらけた話をしていたのに、突然真面目な話に入るのが

この男の悪い癖だった。レオンもそれを熟知していたので、もはやあえて何も言わず返答した。

「元々はそれが最優先事項じゃねえか？能力的にも全く問題ないんだからよ。俺は今日、その場で言うつもりだ」

「そうか・・・」

「何だよ？おまえの方は何か問題でもあるのか？」

「別に問題って事はねえよ」

珍しく何かに悩んでいる相棒を見てレオンは思った。自分の相棒は昔からどんな困難な任務や政策も完璧に遂行してきた。だからこそ、この男の悩み事とはこれしかない・・・と。

「ハッ！どうせ、おまえの事だ。高町なのはを危険な目に会わせたくねえとか思ってたんだろっ！だがな、冬弥よ。彼女は局内でも『エース・オブ・エース』と言われる程の使い手だぜ？そうそう危険な目に会う事なんざねえよ」

レオンの言う事は正しい意見だと思う。確かに、普通S+の魔導師なら大抵の任務はこなしてしまっただろう。だが、彼は幼馴染だったからこそその不安があったのだ。自分と離れ離れになって十年以上の月日が流れても、その不安ともいえる性格がまったく直っていないからである。

「客観的に見たらおまえの言う事は至極御尤だ。ただ、あいつの性格が問題なんだ」

「何がだよ？性格に問題があるようには見えねえけどな？」

「だからそれは客観的に見た場合なんだよ！！まあ、今は部下がいるお陰で、自制してるみたいだけどな」

それは彼女が管理局に入局してからの戦闘記録を見た結論だった。指揮官としては隊員の安全と任務を円滑に遂行出来る有能な人物ではあるが、単独行動の場場合はかなりな無茶をしているように見えた。

「今回の任務は、単独行動が多いからな。あいつの欠点が爆発する機会のオンパレードってわけだ」

「成る程なあ。大変だな、嫁さんの心配するのモ」

「嫁じゃねえよ！てか、あいつ今子持ちだ！！」

この事は彼が一番驚いた。データを見た限り結婚はしておらず、先のJSS事件の時に保護した聖王のクローンの少女を養子にしているとの事だった。

「まあ、あいつの事はもういい俺の方でどうにかする。それより、「月の涙」の所在地はもう分かったのか？」

今までとは比較にならないほどの真剣な眼差しをレオンに向けると、彼も大型投影スクリーンのスイッチを入れ説明に入った。

「現状では百までの管理外及び観測指定、無人世界の調査は終了してるが、発見はされてねえな」

「次元航行部隊の方はどうだ？あちらさんの網に引っかかった可能

性はないか？もし次元移動中なら出くわしてる事もあるしな」

「それこそねえな。これ見ろ」

レオンはタッチパネルを操作してスクリーンに次元海図を映し出した。

「現状の次元航行部隊の巡回ルートはミッドを中心にして、主に管理世界を監視するルートを通ってる。・・・つまりだ・・・」

「管理外世界や無人・観測指定世界は全く監視されてない・・・か」

「1」名答」

こういう時に自分達の部隊員の少なさは致命的である。次元航行部隊程の隊員がいれば独自に巡回ルートを作り、各世界の監視を行う事が出来るからである。

(しかし、どこまでいっても俺たちの任務は古代遺失物の管理及び搜索。もしくは破壊だからな、特に“アルハザード”から生まれた^{ロストロギア}古代遺失物のみに限定してんだから、これ以上人員は増やせないな)

冬弥は苦虫を噛み潰したような顔をして、じつとスクリーンを見つめた。ここで愚痴を言ってもしょうがない。自分達は現状の部隊員で最大の成果を得なければならぬのだから、今一番重要なのは“月の涙”の所在地を突き止めることにある。

「レオン、全中隊長に連絡してくれ。第一から第二中隊は百一から百二十世界を、第三から第五中隊は百二十一から百五十世界を搜索、各世界での搜索期限は二週間。期日を過ぎれば速やかに次の世界に

赴く事、尚第一から第二中隊は担当世界の搜索が終了、もしくは対象の古代遺失物^{ロストロギア}を発見できなかった場合は第三から第五中隊に合流する事、定時連絡はミッド標準時で行う事、以上だ」

「了解。すぐに連絡する。後、俺も約束の時間までもう余りねえから、このまま行って来るぜ」

「おう。わかった。そっちの方は頼む」

「ああ」

レオンはそのまま部屋を後にした。冬弥は椅子に座り、局に登録されているなのはの公開個人情報を見つめた。

「今の仕事にあいつは絶対満足はしてねえだろうな。だとすると、今回の事が良い切っ掛けになるかもしれないんだが・・・」

「・・・まつ。俺が最大のフォローをしてやれば良いだけの話か。そこは惚れた弱みで何とかしてやるう」

不安は拭い切れないが彼は結局悩むのに疲れてしまい結論をだした。

「・・・つと、そういう言うてる内に俺も時間が迫ってきたな。そろそろ行くか」

彼はそういうと部屋を出て行き、ミッド地上へと行くための転送ゲートのある部屋まで向かった。

再会（前書き）

遂に主人公となのはを再開させる所まできました。

ここまで来るのに心が折れなかったのはこの作品をみてくださっている読者の方々のお陰と思っています。

これからはシリアスな展開とコミカルな展開の両方を使って飽きのこないストーリー展開をしていきたいと思っております。では第4話をどうぞ

再会

「それでは、二日間に渡つての魔法の基礎知識と運用法の講義を終了します。みんな、真剣に聞いてくれて、本当にありがとうございます。ありがとうございました」

サンクト
Sセヒルデ魔法学院の大聖堂でなのはは子供達の前でお辞儀をし、感謝の言葉を述べた。彼女が二日間に渡つて教えた事は、きつと今後の子供達に大きな影響を残す事になるだろう。自分の守りたい者を守る為の力・・・その為の魔法。しかし、その力も使い方を誤れば大切な者を守るどころか、全てを失う事さえある。・・・そんな事を彼女は実際に消滅した世界の映像を見せたり、自己の体験談を聞かせる事で子供達に分かりやすく講義したのだ。

「高町一尉。本日はお忙しいにも関わらず、私共の無理なお願いを聞いて頂きまして、誠にありがとうございました。高町一尉の講義は、子供達や私共にとっても大変実りのある内容でした。」

学院の教師がなのはに対して感謝と労いの言葉をかけた。

「いえ、今回の事は私にとっても良い勉強になりました。ありがとうございます。うございまして」

そんなやり取りをしながら、なのはは理事長室に招かれ、そこで学院の責任者達と一緒に、今後の魔法の教え方についての話を小一時間程して学院を後にした。

「高町一等空尉！只今戻りました！」

隊舎に戻ったのははすぐに隊長室に向かい、今回の任務の概要と簡単な報告を済ませた。その足で自分が班長を務める五番隊の部屋に行こうとしたが、そこでクレアに呼び止められた。

「なのはさんお疲れ様です。すみませんが、少々お時間よろしいですか？」

「うん。大丈夫だよ。じゃあ、ちょっと休憩室に行こうか？」

「分かりました」

二人はそのまま並んで休憩室まで歩き出した。

クレアはなのはと歩く時は対等には並ばずに、一步後ろを歩くようにしている。それは、上官に対する敬意を表する行為でもあり、もう一つは自分の事を目立たせない様にする為だ。なのはの人気の高さは人柄もさる事ながら、その容姿も大いに影響しているといえよう。現に下手なアイドルや女優よりも、世間では人気がある。そんな彼女と自分が肩を並べて歩けば必ず比較の対象になり、中には心無い事を考える人もいるかも知れないからだ。

（こんな美人を馬鹿女とか埴輪顔はにわがおとか、よくあの男は言えたものだ。

美的感覚が狂っているとしか思えん。やはり、簡単に信用するべきではなかったのかも・・・)

彼女はカップに口を付けて中のコーヒーを一口飲んだ。結局あの後、『風間 冬弥』と二十分程話し、彼が局の人間であるという事が証明できたので一応は信用したが、未だに彼女はあの時の自分の判断が正しかったのであろうか・・・っと、そんな葛藤を抱いていた。

「クレア。もしかして・・・体調が悪いの？」

なのはが心配そうに尋ねてきたので、彼女は思わず“ハッ”となつて我に返った。

「いえ、何でもありません。はははっ」

「？」

「えゝこほん。本題に入りましょう」

クレアはわざと咳払いをして気持ちを落ち着かせると、真剣な表情で語り始めた。

「実はですね。なのはさんにお会いしたいという人物から連絡を頂いたのでです」

「私に！？誰が？」

「それが、局の関係者だという事までは確認したんですが、所属部署までは言えないと申されまして」

話を聞いていく内に、なのはも連絡を入れてきた男に対して不信感を抱き始め、表情が険しくなっていた。クレアもそれを感じたので口を閉ざしたが、なのはが話の続きを促してきた。

「それで、その人は他になんて？」

「出来るだけ早くお会いしたいとの事でしたが、連絡を受けたのが一昨日の帰り際だったので、隊舎でなのはさんの日程を確認しないと日取りは決められないとお伝えしました。すると、先方が自分の日程データを直接こちらに持つてくると言われましたので、それを承諾しました」

クレアの対応は普通の面会の対応となんら大差はない。ある一定の責任者の立場にあたる隊員の日程は、隊のコンピューターに記入されているのだ。またそのデータは外部への持ち出しを厳禁しているので、一度隊舎を出してしまうと、次の日にはないと確認が出来ないのだ。

「その人は・・・、もう来た？」

なのははすぐにクレアに尋ねた。もしそれが爆発物だとしたら、隊に甚大な被害が出てしまうからである。

「いえ。まだ、お見えになられていません。ただ・・・」

「・・・ただ？」

「・・・その人はですね・・・。自分でなのはさんの“幼馴染”だとも言うっておられました」

「……」

「私の“幼馴染”！？」

彼女は今まで一番疑問に感じていた事を正直に伝えたが、その事には流石のなのも驚いたらしく、今までの緊張していた空気が一瞬でなくなってしまった。

「はい。お名前は風間 冬弥と申していました」

「え……？」

「……風間 冬弥……」

「ご存知なんですか？なのはその……」

「……知ってるよ……でも……」

「……？なのはその……」

(そんな事あるはずない！冬弥君が、ここにいる訳ない！冬弥君はこの世界の事を知らないし、……何よりも……冬弥君は……)

「あの、なのはその……」

なのはが突然凍りついた様に動かなくなってしまったので、心配したクレアがなのには話しかけようとした瞬間。

「隊員呼び出しです。クレア・レッドフィールド二等空尉、至急口

ビーにお越しく下さい。ご面会者様がお見えになられています。繰
り返します・・・」

その放送にクレアよりも先に反応したのはなのはだった。彼女は全
速力でロビーまで走り、受付にいる長身の男性を見つけた。

「冬・・・弥・・・君」

なのはの声に男性は気付き、彼女の方にゆっくりと振り向きながら
・・・。

「んっ・・・よお。久しぶりだな。なのは」

「・・・」

「どうした、そんなところに突っ立って？それになんだよ、鳩が豆鉄
砲食らったみたいな顔。おまえには似合わねえぞ」

「・・・」

「おまえはこういう時は、はにわがお埴輪顔で“ふえええええ”って言ってな
かったか？」

間違いなく彼だ。私の事を埴輪顔はにわがおと呼んだのは彼だけだった。この
“あだ名”は彼しか使わない。

「冬・・・弥君」

「冬弥君！！」

なのはは思わず飛び出し、泣きながら冬弥に抱きついた。その光景に周りの隊員達はみな呆気にとられていた。もちろんクレアも例外ではない。当の本人は感情が暴発してしまっていて自分が今、どれだけ恥ずかしい行動をしているのかに気付いていない。

「おい、なのは。幼馴染の再会に相応しい行動だとは思っけどな。少しは場所を考えろ」

「えっひぐっ……うわーん!!」

なのははまだ、感情の制御が出来ないようだった。冬弥はしかたなく最終手段をとる事にした。古今東西女性に正気を取り戻してもらう方法に違いはない。冬弥自身もその行為をする事に余り罪悪感はなく、むしろ幼馴染の成長を確かめられる事に淡い喜びを感じていた。

(では)

“もにゅん”

なのはの胸の脹らみを冬弥は鷲掴みにした。

「なのは……でかくなつたな」

「……」

直後、隊舎内に第一種警戒態勢の警報が鳴り響き、一人の哀れな犠牲者が出たが、誰も同情する事はなかった。

語り〜前編〜（前書き）

主人公となのはを再開させてから早く続きを書きたくてうずうずしています。

そんな少し暴走気味の作者が書いたこの第五話は内容も少し暴走しています。

これ、なのはの世界に合わないんじゃないのか？と思いつつも書きました。それでは第五話をどうぞ

語らい〜前編〜

前回の惨劇から約三十分後・・・

「なのはさん・・・大丈夫ですか？」

クレアは意気消沈としているのには対して、優しく声をかけた。

「うん。ありがとう。もう、大丈夫だよ」

なのはが顔を上げて、クレアにっこりと微笑んだ。

「ごめんね。取り乱したりして」

「いえ、別にたいした事がなくてなりよりです」

二人はお互いの顔を見て、微笑みあった。その和やかな光景を部屋の隅で見つめていた男が、不満顔で尋ねてきた。

「なあ、ところでこのバインドは、いつ外してくれるんだ・・・」

冬弥の体には幾重ものバインドがかけられていたが、それは拘束等という生易しいものではなく、『スマキ型バインド』と呼ぶに相応しい状態であった。

「あなたは今！！御自分の立場を理解しておられますか？」

「とりあえず記憶にあるのは、なのはの成長した証を確かめた所までだ」

冬弥は陸に打ち上げられた魚の様にビチビチと体を動かしながら、
なのはとクレアの近くまで這って来た。

「成る程。では、とりあえず今のあなたの現状について説明してお
きます」

簡単に言うと今の冬弥の姿は“嫉妬”“怒り”“憎悪”といった、
負の感情のオンパレードの集大成と言ったところである。憧れのエ
ースオブエース“高町なのは”に“抱きつかれ”そして“泣かし”
さらには“胸を揉む”という快拳を成し遂げた冬弥は、あの後なの
はに吹き飛ばされて半死状態の時に、隊舎の魔導士全員によってバ
インドをかけられたのである。

・・・ご丁寧に最大出力というおまけ付きで・・・。

「ですので、私一人のバインドを解いても他の方達が解かない限り、
あなたは一生そのままです！！」

クレアは冬弥にキツパリとそう伝えた。

「あの俺の弁護士は？」

「いません！」

「……」

「執務官以外の局員には司法権はないから、勝手に刑を執行する」とは出来ないんじゃない？」

「今は関係ありません！」

「……」

「なのはさん、お願い。僕を助けて」

冬弥はなのはに瞳をウルウルとさせて懇願した。だが、なのはも頬を赤くして顔を横に背き……

「知らない！」

「!!!!!!」

最高裁判官からの判決を言い渡された冬弥は再び部屋の隅に戻り、自らを部屋のオブジェと化した……。

「だーーーー！！違っ違っ違っーーーーっ！！」

突然隅にいる謎の生命体が大声を上げたので二人は一瞬驚いた。

「どうしたの、冬弥君？」

「遂に本性を現しましたか」

全く違う二人の反応が、冬弥に対する信用の表れかもしれない。しかし、冬弥はそんな事を気にする素振りもなく語りだした。

「俺は今日、自分の日程データを渡す為にここまで来たのに、何でこんな目に遭わなきゃならないんだよ！！これじゃデータを渡せねえし、今後の事についても話が出来ねえだろ！！まあ・・・なのはがちょうど居てくれたのが不幸中の幸いってやつだが」

「ちょうどよかったって、どういう事？」

「出来れば早めに会っておきたいって言ったろ。今日話が出るんだったら、それにこした事はない」

今までのふざけた態度とは違い、真面目な顔で語りかけてくる冬弥を見て、なのはは彼の話の聞く事にした。

「わかりました。それじゃ、私の部屋に行きましょうか？」

しかし、冬弥は首を横に振り、申し訳なさそうに言った。

「悪いんだが、ここでは出来ねえんだよ。だから別の場所で食事でもしながらと思ってるんだが・・・」

「私以外の人に聞かれるとまずい・・・と？」

「そういう事だ。で、どうする?」

冬弥はあえてなのはに決定権を持たせた。ここで彼女が拒めばこの話をこれ以上する気は無いし、彼女に二度と会うつもりもない。

「いいよ。別の場所で話そう」

なのはは冬弥の提案を素直に受け入れたが、ここで今まで黙って話を聞いていたクレアが反対した。

「な!なのはさん!!危険ですよ!!こんな男と二人きりでなんて」

「どうして?」

「さっきの事をもう忘れたんですか!?二人きりになったら、もっと変な事をされるかもしれませんよ!!」

クレアは本気でなのはを心配していた。いくら幼馴染とはいえ、久しぶりの再会で平気で女性の胸を触るような男の事を彼女はどうしても信用できなかった。

「それに、このバインドを解かないと外出も何もないではないですか?言っときますけど、私は解く気はありませんから」

「クレア・・・さすがにそれは可哀想だよ。冬弥君もお仕事で来てるんだから、もうそれくらいで許してあげよう」

「ならば、自力で解いたらいいのです!!それで職務に対する誠実さが伝わります!!」

「それは・・・さすがに」

なのはがそれは無理だと言おうとした瞬間。

「そうだな。俺も、いつまでもスマキでいる気はないしな。よつ・・と」

「え!？」

「そんな!？」

二人は我が目を疑った。あれ程のバインドが一瞬にして壊されたのだ。幾重にも重なったバインドをまるで紙切れを引き千切るように・・。この光景にクリアはただ啞然とするだけだった。普通あれ程のバインドは、オーバーSランク魔導師であっても破壊は不可能であるのに、それを目の前の男は事も無げにやってのけたのだから・・。そして、冬弥がゆっくりと立ち上がっていくにつれて、周囲が寒くなつていくような感覚を彼女は感じた。

「一つだけ教えてやる。俺は管理局の非公開の部隊の所属だ」

今までとは違い、鋭い眼に老練の魔導師が放つような威厳のある風格が漂っていた。

「今回なのはにする話も、その類に属する極秘事項だ。だから、おまえらには聞かせる事は出来ない。理解したか？」

クリアはただ頷く事しか出来なかった。今の冬弥を目の前にしているだけで呼吸が苦しくなり、今にも失神してしましそうだったので

ある。しかしこの重圧プレッシャーを感じていたのは彼女だけではなく、隊舎の
局員全員も感じていたし、もちろんそれはなのはも例外ではなかつ
た。

「冬弥・君」

なのはは今、目の前にいる男が自分の知っている“幼馴染”である
かを確かめるように、その名を口にした。

「ん？ああ・・・悪い・・・恐がらせたか？」

冬弥はなのはの言葉に気付き、今まで放っていた気を消した。

「ーーーーツ！！ふうー！！」

クレアは膝から崩れ落ちると地面に四つん這いになり、肩を上下に
振って息を整えた。

「そこまで苦しませるつもりはなかったんだ・・・悪かった」

冬弥は膝を曲げ、自分の視線をクレアと同じにしてから謝罪の言葉
を述べた。

「おまえみたいな頑固者には力押しが手っ取り早いと思ったんだが、
まさかここまでの症状が出るとは・・・、俺もまだまだだな」

冬弥は自分の未熟さゆえに、クレアをここまで苦しませた事に強い
罪悪感を感じていた。むろんそれは、なのはや他の隊員に対しても
同じであった。

(「じりゃ、なのはに断られるかもしれねえな)

冬弥は今回の自分の行動が、最初から今に至るまで失敗してばかりだと感じていた。普段はこんな事はないのに今日はどうかしている・・・と。

(なのはに会えて、俺も少し浮かれてるのかもしれない)

しかし、ここまでの事をしでかしてしまった後では、最早取り返しのつきようがない。冬弥は意を決してなのはに話しかけた。

「なのは。これが今の俺だ。ガキの頃におまえと遊んだ俺とは違う」

「・・・」

「それでも、おまえが俺を信じて話を聞いてくれるのなら、今夜七時にミッド中央区にあるセブン・オーシャンというレストランに来てくれ」

「・・・」

なのはは何も答えない。冬弥もその場を後にしようと身を翻した瞬間。

「食事まで、少し時間あるから、・・・ちょっと・・・お散歩でもしようか？」

冬弥はなのはの提案を受け入れ、二人は隊舎を後にした。

語らい〜中篇〜(前書き)

早いものでWindもこれで六話目に突入してしまいました!!

作者が早く続きを書きたいせいもあって一週間の内に三話も書いてしまいました。

この話は純粹になのはの見せ場の話です。なのはは喋りまくりますが、主人公は殆ど喋ってないんじゃないのかな?ともかく第六話どうぞ

語らいの中篇

「着いたぞ。ここでいいのか？」

冬弥は車を駐車場に止めると、助手席に座っているのはに尋ねた。

「うん。お散歩するなら、ここが一番だからね」

二人が訪れたのは、ミッド郊外に新しく作られた臨海公園だった。そこは、目の前には広大な海が広がり、公園の中にも娯楽施設があるアミューズメントパークであった。その為に、休日になるとカッブルや家族連れで大変賑わいを見せるのだが、今日は平日だからか人もそこまで多くはなく、散歩をするにはちょうど良い場所だ。

「ここね。よくヴィヴィオを連れて来るの。お休みの日にお弁当を持って、遊園地で遊んだ後、芝生の上に座って二人でお弁当を食べ、ヴィヴィオの学校での話しを聞いたりして、のんびり過ごすんだ」

なのははその時の事を思い出しているのだろう。とても楽しそうに話をしている。

「時々、お友達とも一緒に来るんだよ。私の大親友でフェイトちゃんって言うの！知ってるかな？本局の次元航行部隊に所属している、フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官の事だよ」

「ああ、彼女の事は俺も知ってる。後、八神はやて二佐の事もな。おまえと二人合わせて管理局の“雪月花”って呼ばれてるらしいな？」

この通り名は管理局でも有名な美人である三人が、親友だからとの理由である局員が考え出した“あだ名”である。以来管理局ではなのは達三人を現す時にはこの“あだ名”が良くも悪くも使われている。

「うー！それは恥ずかしいから言わないで！」

「なんでだよ？美人だって言ってくれてんだ、素直に喜んできやいだろ？」

「だって、私達はアイドルとかじゃないんだよ！？それなのに、そんなあだ名は恥ずかしいに決まってるじゃない！」

なのはは至極真面目に反論しているのだが、冬弥からすれば既にブロマイドを出したり、CMにも出演している時点でアイドルと何の違いがあるのだと思っていた。しかし、それを口にすればなのはの有無も言わせぬ反撃が来るのが、眼に見えて分かっていたので心の中に押し止めた。

「まっ。それだけおまえ達は有名人だって事で、諦めるしかねえな」

「そんなに目立ちたい訳じゃないんだけどな」

「んじゃ、変身魔法でも使ってブスになりゃいいじゃねえか？そうすりゃ、誰も見やしないだろ？」

「・・・冬弥君。絶対からかってるよね？」

「当然だろ！おまえ程からかいがいのある奴はそうはいねえよ」

「酷いよ!」

「はははっ」

冬弥となのはは暫く公園を歩き続け、見晴らしのいい高台まで来ると、そこにはミッドの広大な海が目の前に広がり、気持ちいいの良風が吹いていた。なのははそのまま体を海の方に向けると、潮風で髪がなびくのを手で押さえながら呟いた。

「・・・風・・・気持ちいいね・・・」

「・・・そうだな・・・」

冬弥はそんな何気無いなのはとのやり取りを、懐かしく感じていた。昔はこんな風に二人で冗談を言ったり、からかったりして遊んでいたが、いつまでも子供の頃の思い出に浸っている訳にもいかない。このままでは、自分達の時間は永久にそこで止まったままになってしまう。今のお互いを知る為には、その壁を踏み越えねばならないだろう。しかし、なのははその一歩をまだ踏み出せずにいる。だからこそ、彼はきっかけを作る為にあえて自分から踏み出した。

「そおいや、何で急に散歩しようなんて言い出したんだ?」

「・・・」

「何か、俺に聞きたい事があるんだろう？」

「……」

「遠慮するな！幼馴染のよしみだ。答えられる質問には答えてやる」

「……」

なのは口を開こうとはせずに、ただずっと海を眺めていた。

「なのは。黙ってたなら何も……」

すると冬弥の言葉を遮る様に、なのはが語りだした。

「あの時も……そう、毎日海を見てた」

「……」

「冬弥君が引越したあの日から、そして、冬弥君が事故で亡くなっ
たって知ってから……ずっと」

「……」

「私ね。最初は信じられなかったんだよ。と言うか、訳が分からな
くなくなったのかな？またすぐに会えると思ってた、冬弥君は今まで
一度も約束を破った事がないから、絶対！……絶対！会えるって思
ってたから……」

なのはの言葉に少し涙声混ざり始めたが、彼女は話を止める事な
く続けた。

「だけど・・・それは一瞬で消えちゃった。それからの私は家にずつと閉じこもって、何をする訳でもなく、ただ一人でいただけ。そんな時だったかな？アリサちゃんとすずかちゃんに出会ったのは・・・」

「・・・」

「最初は喧嘩から始まった仲だけど、今では二人とも私の大親友だよ。もちろん、フェイトちゃんやはやてちゃんも含めてね」

なのは体を翻すと笑顔を浮かべて冬弥に告げた。

「だから、私は今とても幸せだよ！友達もいるし、仲間もいる！ヴィイオもいる！今が・・・本当に幸せなの・・・」

冬弥は彼女の表情からそれが偽りではないと感じた。なのはが幸せならそれで良いと、やはり今回の話は止めておこうと彼は思った。

「おまえの気持ちは良くわかった。もう・・・これ以上は何も言わん」

冬弥はなのはを気持ちを汲んで会話を終わらせようとしたが、彼女は首を横に振り話を続けた。

「違うよ。私が聞きたいのは冬弥君が今幸せなのかって事だよ！」

「・・・」

「冬弥君の死んだ事故に管理局が関わってた・・・って考えるのは私

の思いすごしかな？」

「……」

「もし、そうだとしたら冬弥君が生きてて、今社員であるということ事にも納得できる」

冬弥は一言も喋らずになのはの言葉を聞き続けた。

「だからもし、私の考えが正しいのなら、冬弥君のご両親を奪ったのは管理局って事になるから、そんな組織で働いている冬弥君は、幸せなのかなって思ったの」

「何でそう思うんだ。俺はまだ、何も話してねえのに」

「さっき……冬弥君がまるで別人みたいになったでしょ。あの時に思ったの……この人は……普通じゃない……」って……」

なのはは最大限の配慮をもって、あの時自分が冬弥に対して恐怖を感じた事を告げた。しかし、今のなのはの表情からは恐怖心よりも、哀れみに近い感情が見てとれた。

「あんな事、普通の人はもちろん、私達にも出来ないよ……。つまり……あんな事が出来るようになる人生を送ってきたって事だよね？……そんな人生って……幸せなのかな……？」

「……」

「ねえ冬弥君！！私は今、目の前にいる君が偽者だなんて思ってな

い！！あの時海鳴の町で一緒に遊んだ冬弥君だって信じてる！！だから聞かせて！！何があったのか？どうしてここに居るのかを！！」

「・・・」

「お願い。私冬弥君の力になりたい！あの時の恩返しをしたいの！」

なのはは冬弥の体を掴み、真剣な眼差しでその顔を見つめ続けた。

「私は君の“幼馴染”でいたいの！！」

(おまえ、やっぱ変わってねえな)

冬弥は心底、なのはは全然変わってないと思った。一つの事に集中してしまうと周りが見えなくなってしまう直情型な傾向といい、相手の心の奥底を見据えてしまう感受性といい。別に冬弥はなのはは“どうして生きてたの？”と聞かれたらある程度の経緯いきさつは話してもいいと思っていたのに、この幼馴染はそんな冬弥の考えの遙上をいく質問を投げかけてきたのだ。正直ここまで見透かされては、もはや冬弥の完敗だった。

「もうすぐ陽が沈む。そしたら冷えてくるから一旦車に戻ろう。店までここからだと一時間程かかるから、着くまでその話をしてやるよ。それでいいか？」

「うん！！うん！！」

なのはは笑顔で何回も頷いた。

二人は駐車場まで戻ると車に乗り公園を後にした。

語らいく後編く（前書き）

今回のお話は今までで一番シリアスな展開となっております。

後なのはさんが色々な所で怒ったり、騒いだりと大忙しです。こんなのはさんじゃない！！なのはさんはもつと落ち着いていて、奥深い人だと思っ方には最初に謝罪をしておきます。

ですが、なのはさんも人の子であり、女の子です。魔王の子でも悪魔の子でもありませんので、時には悩み苦しむ事もあるはずです。今回はそんななのはさんを主人公が救うお話でもあります。

それはフェイトの役目だという方にも先に謝罪しておきます。

さて、今回は前書きも長ければ本編も長いです。気合を入れて読んでください。すみません。読んでください。お願いします。では第七話をどうぞ。

語らい〜後編〜

夕暮れに照らされた湾外沿いのハイウェイを、冬弥となのはを乗せた車が颯爽と走っている。

「うん、ごめんねノーヴェ、ナカジマ三佐には後で私からもお礼を言っておくから。それじゃ、ヴィヴィオの事お願いね。あっ！後ヴィヴィオに代わって貰えるかな」

「・・・」

「もしもし、ヴィヴィオ？」

「ママ、今日帰ってこれないの？」

「そうなの、ごめんね」

「ううん。私は大丈夫だから、お仕事頑張つて！！」

「ありがとね、ヴィヴィオ。それと、アイナさんにはママが連絡しておいたから、今日はナカジマ家のみんなと仲良くするんだよ。後、余りご迷惑をかけないようにね」

「うん！分かった！」

「それじゃ、おやすみ、ヴィヴィオ」

「おやすみなさいー！」

なのは娘との会話を切ると、今度は別の人物に連絡をとる為にモニターを操作していた。相手はどうやらナカジマ家の人物で映像を見る限り二十代前半の若い女性だったが、非常に物腰が柔らかく丁寧な対応をしていた。全ての連絡が一段落つくと、ようやくなのは手を膝の上に置き、大きな溜息をついた。

「お疲れ。もう、いいのか？」

「うん。お陰様で、こっちの用件は全部終わったよ」

「そうか」

冬弥は話をする為に気分を落ち着かせようと、ポケットに入れているタバコに手を伸ばし口にくわえた。

「冬弥君、タバコ吸うんだ？」

突然のなのはの質問に冬弥は火を点けるのを止めて尋ねた。

「ん・・・ああ。おまえ、タバコ苦手か？」

「ううん。大丈夫だよ」

「そうか」

そう聞くと冬弥はタバコに火を点けて、煙を胸一杯まで吸い込んだ。

「ただ、今まで周りにタバコを吸う人がいなかったから、ちょっと珍しかっただけ」

なのはがそう言うと、冬弥はくわえていたタバコを灰皿へと押し当てて火を消したが、なのははその行為に戸惑いだした。

「と・・・冬弥君！なんでもう消しちゃったの!？」

「吸う奴が周りにいないんだったら、おまえにはきついだろ？」

「・・・ありがとう」

冬弥にとっては何気ない気遣いのつもりだったが、なのははそんな彼の優しさが余程嬉しかったのかかなりご機嫌だった。

「さて、俺の話をする前にまず今の俺の所属をおまえには言っておく、そうしとかねえと、後で説明するのが面倒くさいからな」

冬弥は車を運転しながら、必要なデータを取り出しなのはに見せた。余談ではあるが、管理局で取り扱うデータ等は殆どがデバイス魔導端末を通して、空中にパネルが浮かび上がるように出現するのが基本である。

「時空管理局 評議会直属 特定遺失物管理部 機動零課 ブリュ
ーナク大隊」

「それが、俺の所属だ。階級は一佐、不本意だが部隊長も務めてる。まっ、簡単に言えば遺失物管理部の先駆け部隊だ」

「この特定遺失物って、第一級搜索指定のロストロギア古代遺物の事？」

「いや、アルハザードから生まれた古代遺物ロストロキアのみを搜索・発掘もしくは破壊する事が俺達の任務だ。それ以外の古代遺物ロストロキアに関しては一切関与しない。他の古代遺物ロストロキアだったら、一課から五課までが担当だからな。だから、俺達の部隊は存在しない零課なんだよ。」

冬弥は自分の所属部隊の簡単な説明をなのはに済ますと、自身の事について語りだした。

「話を戻すが俺が死んだ事になった事故というのは、おまえの予想通り管理局が絡んでいる。」

「・・・」

「日々拡大し続ける管理世界の治安維持をするには、魔法の力のみでは限界があると悟った一部の魔導師と技術者達が、古代遺物ロストロキアを武器として使用する事を提案したのが切っ掛けだ」

「・・・」

「そして、一つの実験機を開発したが、当然違法とされる武器を教導隊で実地試験してもらおう訳にはいかない。そこで連中が目を付けたのが、ある管理外世界での実地試験だった」

「・・・」

「そこが俺とおまえの生ませた世界である。第九十七管理外世界“地球”だ。まあ、連中も人的被害を出さないように山中で実験を行っていたんだが、そこに俺達が来たわけだ。そして、その実験機の暴走事故に巻き込まれた」

冬弥は話に一段落つけると隣にいるなのはの様子を伺ったが、予想通り表情は暗くずっと俯いている。JS事件以降に次々と暴かれる管理局の暗部、それを払拭する為のプロパガンダとして利用されているのは自身にしてみれば、この話が追い討ちをかけている状態なのだから無理もない。

「後、事故の原因なんだが、実験機に搭載されていた古代遺物ロストロキアが、何らかの強大な魔力量に反応して、暴走を起こしたと当時の報告書には記されてあった。あの時、あの場でそれだけの強大な魔力を持った人物は一人しかいない」

「・・・」

「暴走事故が起きた直接の原因は俺だったって事だ。・・・俺が・・・親父とお袋を殺したんだ」

「そんなの絶対に違う!!」

それまで冬弥の話を黙って聞いていたなのはが、鬼気迫る表情で詰りめ寄ってきた。

「悪いのは、古代遺物ロストロキアを不法利用しようとした人達でしょ!!冬弥君達はただ、巻き込まれた被害者じゃない」

普段のなのはからは信じられない位に怒気の強い言葉が車内に響い

た。

「おまえの言っている事は正論だ。実際俺は局からこの件で罰せられてはいないし、俺が直接の原因だと証明する証拠もない」

冬弥がそこまで話すとなのはは落ち着き、姿勢を正した。

「ただ、連中からしたらロストロギア古代遺物に影響を与える程の魔力量を持つ俺が大層気にいっただらしくてな、目覚めた時にはベッドの上に磔にされてた」

「え？」

「詳しい事は言わないが、色々と弄り回されたお陰で、廃人寸前にはなったな」

「・・・」

「だが、結局連中の実験は評議会にばれて、当時の部隊長だったアロン・クラウザーっておっさんが俺を救出した。でっ！俺はそのおっさんに弟子入りして今に至るって訳だ」

冬弥は自分の今までの生い立ちをなのはに簡単に説明した事で満足していたが、なのはの胸中は穏やかではなかった。管理局に対する様々な疑問が浮かび上がり、何よりそれだけの目に遭わされているにも係わらず、管理局に身を置いている冬弥の考えが彼女にはわからなかった。

「冬弥君は・・・それでいいの？」

「なにが？」

再びなのはが鬼気迫る表情で冬弥に詰め寄った。

「家族を奪われて、人体実験までさせられて、そのまま自分の意思でも何でもないのに管理局に入らされて、それでいいの!？」

なのはには分からなかった。自分のように周りに助けしてくれる親友も無ければ、掛け替えの無い存在もない。それどころか局内においてもその存在を殆ど知られていないのに、何故彼はここにいるのだと。

「・・・おまえと同じだ。守る者がいる。ただそれだけだ」

「守る者って・・・誰? 全ての人々？」

「いや。そこまで俺は強くない。ただ俺が守りたい奴を守る事が、次元世界を守る事につながっているだけだ。だから、俺はここにいる! それだけだ」

「・・・その人は、冬弥君の彼女？」

それ程の目に遭わされた彼がそこまで守りたいと言ってる人物なら、当然彼の最愛の人なのだろうと彼女は考えた。

「いや、俺は一人身だ。ちなみに、おまえのように養子を引き取っ

でもない」

「じゃあ。誰なの、もしかして嘘？」

なのはは少し苛立ちを感じていた。自分は正直に聞いているのに、彼の返答はいい加減な回答ばかりだからだ。

「俺が嘘をつかない事は、おまえが一番よく知っているんじゃないのか。まあ・・・前科持ちのいう事は信用できないか？」

「じゃあ、本当の事を言って!!！」

「ーッ。おまえもしつこいな。わかった、言っただけでやるから、まず落ち着け。・・・そいつは、俺が振られちまった女の事だよ。後名前を言うのは勘弁してくれ」

「冬弥君を・・・振った女ひと？」

「失恋の経緯は聞くなよ。話していると情けなくなる」

「ふざけないで!!！」

なのははこの後に及んでも真実をいわない冬弥に対して、ついに堪忍袋の緒が切れてしまい怒声を上げた。

「それだけの目に遭ってるのに、自分を振った女ひとの為に命を懸けてまで戦えるわけないでしょ!!！」

なのはは冬弥を睨みつけていたが、彼は微動だにせず ゆっくりと口を開いた。

「なのは。・・・その言い方だと、おまえは親友の人生も否定する事になるぞ」

「・・・どづい事？」

「ハラウン執務官は、本当の母親からどんな仕打ちを受けていた？それでも、彼女は最後に実の母親になんて言った？」

「！！！！！」

なのはの中で衝撃が走った。フェイトは実の母親、いや生みの母親であるプレシア・テスタロツサから“失敗作”として扱われ続け、最後には信じていた母親に裏切られたのだ。それでも彼女は自分を生み出し、育ててくれた母を恨みもせず感謝の言葉を述べた。そして今なお、彼女の心の中には母プレシアが生き続けている。

「俺の場合もハラウン執務官と似たようなもんだ・・・。俺が彼女を守りきる事が出来なかったから、俺が彼女を悲しませ過ぎたから、こんな結果になった。だが、俺も彼女もお互いを恨んだりはしていない。いや、違うな・・・彼女は俺を恨む事すら出来なかった」

「ごめんなさい冬弥君。私・・・何も知らないのに勝手な事ばかり」

「その事についてはもういい。おまえは今の自分の状況と、昔の俺の状況を重ねて見ていたんだろ。だから感情的になっちまったんだ。簡単に言えば今おまえは俺に対して怒ったけどな、今のおまえがさっきの俺だ」

「??????」

なのは冬弥の言う事がまた理解できなかったが、今度は逆上したりせずに真剣に冬弥の言葉に耳を傾けた。

「周りから見てたら心配でしようがないって事だ！家族や親友、周りの奴らの為だけに自分を殺して生きてるように見えるんだよ！今のおまえは！」

「……やっぱり。そう見えてるんだ」

自覚が無かった訳ではないが、それでも元気で気丈に振る舞っていたら、周りのみんなは安心するのではないか……と彼女は思っていた。しかし、結局それが逆に周りを心配させてしまった原因だということ指摘され、再び頂垂れてしまった。

「だから、今のおまえがする事は見せ掛けの自分じゃない、本当の自分をみんなに見せて安心させてやれ。おまえが今幸せを感じているのは、おまえを心配してくれる人達のお陰でもあるんだ。逆におまえの存在が、周りの人達の幸せにも繋がっている事を忘れるなよ」

「……うん。わかった」

「後、一番最初の質問の答えだが、俺も今は幸せだ。悪友とは言え親友と呼べる奴もいるし、部下もいるしな」

その屈託のない笑顔を見てなのはは全てを悟った。今の冬弥は嘘偽り無く、本当に幸せを感じているのだ……。それが分かれば自分がこれ以上言う事は何もない、彼は自分が思っている以上に逞しく成長した……。と、今日一日を通してそれを十分に理解したからであった。

「さて、ちょうど店が見えてきたな。俺の生い立ち話はこれ位にして、後は飯でも食いながら仕事の話に入ろうか？高町一尉？」

冬弥のわざとらしい物言いになのはも僅かに口元を歪め……。

「ええ。そうしましょうか。風間一佐」

二人はお互いの顔を見て笑いだした。

月の涙（前書き）

今回の話を書いている時にとっても不幸な事が起こりました。

後、少しで書き終わるといふ所で作者の手がマウスに触れてタグを閉じてしまい、今までの苦勞が全て水の泡と消え、最初からまた書き直しました。

さて、そんなハプニングにめぐらずに書いたこの話では物語に大きく関わってくる古代遺物^{ロストロギア}“月の涙”の事について説明しています。

“月の涙”とは如何なる古代遺物^{ロストロギア}なのか、その正体の一部分がわかる第八話をご覧ください

月の涙

『セブン・オーシャン』そこはミッドでも有名な高級レストランだ。地上五十階建ての最上階にあるこの店は、ミッド中央区にありながら湾岸沖まで一望できる景観と、空中庭園にいるかのような店内のレイアウトも相まって、連日予約が絶えない人気店だ。もちろん料理の味のほうも絶品との事である。以上の事からも分かるように、このレストランのお客の殆どは富裕層である、財界や政界の著名人や芸能人等で占められている。

「ふう」

フェイトは大きな溜息をついた。彼女がこのレストランに到着してまだ十五分と経っていないのに、周りから男性の視線が痛いほど飛び交ってくるのだから無理もない。

「こんな事なら、個室を予約しておけばよかつたかな？」

そこまで言つてフェイトは『ハッ』と気付き、頭を抱えた。

（そもそも、今日は機密に関する話をする為に来てるのに個室を用意してないなんて。まあ、私のバカ！）

普段は冷静沈着で優秀な彼女であるが、時々こうゆうミスを犯すのだった。シャーリー曰く『そこが可愛いです』との事だが、本人からしたら恥ずべき欠点であるといえる。

「どうしよう。今更個室への変更なんて出来ないだろうし、かと言つてここで話をするわけには・・・」

彼女が一人で悩んでいると、そこへ店のウェ이터が近づいてきた。

「失礼いたします。お客様はフェイト・Ｔ・ハラオウン様でお間違いないでしょうか？」

「ええ。そうです」

「お連れのお客様がお見えになられましたので、そちらまでご案内いたします」

「え？あの、私は個室の予約はとっていませんが？」

彼女はウェ이터が何か感違いをしているのではないかと思い、正直に自分が個室を予約していない事を告げた。

「はい。ですが、お連れのお客様から、ハラオウン様をこちらにお招きするように申せつかりましたので」

「・・・わかりました」

彼女はそういうと席を立ち、先導するウェ이터の後に付いて行った。

“コンコン”

ウェイターが個室の扉の戸を叩き、入室の許可を求めた。

「ハラオウン様をお連れしました」

「どうぞ。入ってくれ」

部屋の中に入ったフェイトは、そこに一番見知った人物がいる事に驚いた。

「なのは！！どうしてここに！！？」

「それはこっちの台詞だよ！！どうしてフェイトちゃんがここに！！？」

なのはも驚いたらしく、隣に座っている冬弥に視線を落とした。

「まあ、この事については後で説明するとして……だ。先に飯にしないか？」

二人とも朝から働き詰めで空腹だったので、冬弥の提案に反対する事はせず席に着いた。するとレオンがウェイターを呼び何やら話している、なのはとフェイトに問いかけてきた。

「二人は酒は大丈夫か？もし駄目なら、飲み物は別の物を用意させるが？」

「余り強いのはダメですけど……ワイン位なら大丈夫です」

「私は気を遣っていたただかなくて結構ですよ」

なのはとフェイトが答えると、レオンがウェイターに料理を注文した。しばらくして料理が運び込まれ、食事の準備が整った。

「では、乾杯の前に一言挨拶をさせてもらおう。高町一尉そしてハラオウン執務官、本日はお忙しい中、俺達の為に貴重な時間を割いていただき感謝する。しかし、これから話す事は、二人にとつても未だ経験した事がない事件であり、次元世界の歴史の転換点になるかもしれない事だと最初に伝えておく。いささか舌足らずな話になったが、乾杯の前の挨拶としたい」

「では、乾杯」

四人は同時にグラスに口をつけて喉を潤し、食事に取り掛かった。しかし、今回は食事をする為に来たわけではない。フェイトは楽しい食卓に水をさすのを承知で口を開いた。

「お食事中に申し訳ありませんが、そろそろ“私達”をお呼びになられた理由をお聞かせ願えませんか？」

フェイトは真剣な表情で、今自分が知りたい事を簡潔に述べた。それを見ていた三人も食事の手を止め、なのはも冬弥とレオンを真剣な表情で見つめた。主催者の二人はお互いに視線を交わし、何やら念話で相談しているように見えたが、フェイトもなのはも内容を聞く事は出来ないの、二人の話が終わるのを待つ事しかできなかった。そして、長い沈黙を破り冬弥が口を開いた。

「待たせて悪かった。今レオンと相談していたんだが、二人には現状開示できる全てのデータを転送する。これからの話はそのデータを見ながら聞いてほしい」

彼はそう言つたのはとフェイトにデータを転送し、二人もそれを確認した。

「なのはにはさっきも言ったが、ハラOWN執務官は何処まで俺達の事を知ってる？」

「評議会直属の部隊であるという事、・・・それ以外は存していません」

「OK!じゃあ、これからの話をよく聞いておいてくれ」

「俺達の部隊の正式名称は 評議会直属 特定遺失物管理部 機動零課 ブリユーナク大隊。隊長は俺『風間 冬弥』、副隊長はこいつ『レオン・スウィンフォード』、術式はお互い近代ベルカ式で、魔導師ランクは俺がEXランク、レオンがSSSランクだ。部隊員は約五百名、内魔導師が五十名でSランクが十人、残りがA〜AAランク。他は全て一般隊員だ」

冬弥は部隊の内容と構成を大まかに説明したが、二人が一番気になったのは冬弥の魔導師ランクだった。

「冬弥君・・・EXランクって何？」
エクストラ

「そのままの意味だよ。“特別”それ以上でも以下でもない」

二人はそんな冬弥の説明に納得できなかったが、彼がそのまま話を

再開したのでこの話題には触れないようにした。

「俺達の任務はアルハザードから流出した古代遺物ロストロギアの発掘及び破壊。そして、それに伴う捜査活動だ。逆に他の古代遺物ロストロギアに関しては一切関与しない」

先程なのはにした説明と全く同じ事を、冬弥はフェイトに話した。

「で、今俺達の部隊で第一級搜索指定にされている古代遺物ロストロギアが、この“月の涙”だ」

二人は“月の涙”に関する項目を閲覧し始めた。読み続けていく内に二人の表情からは血の気が失われ、体が小刻みに振るえだした。そこには“月の涙”が一つの世界を消滅させるほどの破壊力を持っている古代遺物ロストロギアである事が記され、能力に関しても不可解な言葉があった。

「冬弥君・・・この多次元空間同時攻撃って何？」

「簡単に言えば、ミッドにいなから地球も同時に攻撃出来るって事だ。俺達はその気になれば、管理局が把握している全ての世界を一瞬で消滅する事が出来ると推測を立てている」

なのはの頭に、昔テレビで見た終末の世界の光景がよぎった。冬弥はそんな呆然としているなのはの頭をやさしく撫でた。

「この形状の項目の欄に、コアの形は不明と書いてありますが。これはどういう事なんですか？」

それまで冬弥が説明しているのを黙って聞いていたレオンが、フェ

イトの質問に対し答えた。

「今から二十一年前“月の涙”が発動した事が確認されてる。その時は俺達の先々代の爺達おじいちゃんが命を賭して停止させたそうだが、それでも管理局が把握していない世界が一つ消滅した」

「.....」

「その時、当時たった一人の生き残りが“月が泣いている様だった”って、報告書に書いた事から“月の涙”つつう名称が付いた訳だ」

“月が泣いている様子”とはどのような光景なのだろうか？なのはそれが幻想的な姿に見えたのではないかと、不謹慎だと思いながらも想像していた。

「話を戻すが、“月の涙”はその名の通り月のように丸い球状をしているが、その球状の部分は全てエネルギー体ってえ事だ。そのエネルギー体を制御しているコアがあるってのが俺等の推測だ」

レオンはそこまで話すと一息ついて、グラスに注がれているワインを飲み干した。だが、フェイトは今までの話を聞いてある疑問が浮かび上がった。

「あの、お話を聞く限りでは“月の涙”は一度活動を停止したんですよね？その時に、そのコアも破壊されたと言う可能性はないんですか？」

「それはねえな。“俺達”がまだ、“月の涙”の存在を感知してるんだからコアもどこかにあるはずだ！」

「“俺達”って・・・どういふ事ですか？あなた達は“月の涙”の存在を感知できるんですか？」

「そうだ。けど、それはまだ秘密だぜ。そこまでは教える事はできねえ」

なのはとフェイトはその事が気にはなつたが、ここまで言われると絶対に教えてくれないだろうと思ひ、それ以上追求はしなかつた。

「さて、ここからが二人に関係してくる内容でな。さつきも言つた通り俺達の任務はかなり危険だ。その為に、オーバーSランク以外の魔導師は基本前線ではFBのポジションフルバックにいる。だが、そうなつてくるとやはり、人数的にキツイ時がある」

冬弥はそこまで話すと一呼吸置いて話を続けた。

「そこで実戦経験豊富で且つ強力な魔導師と俺達が組んで、戦力不足を補う戦法を考案してな。単刀直入に言えば、おまえ達二人に臨時の出向任務に来てほしいんだ」

「.....」

「もちろん、断るのもおまえ達の自由だ。俺達もそこまでは強制はしない。たとえ出向に来ても、おまえ達二人を死なせるような任務には行かせないし、休暇も取らせる」

なのはの心の中ではもう決まっていた。今日一日冬弥と行動を共にしていた彼女は、“月の涙”の事よりも冬弥の事をもっと知りたいと思っていたのだ。そして、フェイトも事前にクロノから捜査協力の事は聞いていたので、冬弥からの申し出を断る理由は無かった。また、彼らが人造魔導師で有るか無いかも一緒に行動していれば、その内に分かるのではないかと思っていた。

「返事はまた、後日聞きに来る。そうだな・・・一週間位は時間をやるから、その間に考えといてくれ」

「冬弥君、その申し出お引き受けします」

「私もお受けします」

「はっ？」

彼女達の予想外の早い回答に、冬弥もレオンも啞然としていた。

「いつからそつちに合流していいのか、予定表を貰えると助かるかな。こつちも色々準備があるから」

「そうだね。私もシャーリーやティアナに連絡しなくちゃいけないし」

未だに啞然としている二人の男を尻目に、なのはとフェイトはちやくちやくと準備を進めていた。

(なんか、ここまで簡単に事が進むと、俺達があんだけ大掛かりな話をしたのが馬鹿みてえじゃねえか)

レオンが念話で冬弥に悪態をついた。

（まあ、それだけあいつ等も危機感を持ってくれたって事で良しとしようや。こっちとしては願ったり叶ったりだ）

（そりゃ、そうだけどよお）

二人は念話での会話を終えると、改めてなのはとフェイトに向き直り、協力の件について感謝をした。

「では、高町一尉、ハラOWN執務官、これから色々大変になるが、改めて協力を頼む」

「非才の身ですが、全力にて」

「承りました」

四人はその後、まるで年来の友のように打ち解け、楽しい食時の時間を過ごしていった。

戦闘〜前哨戦〜（前書き）

遂に戦闘シーンを書き始めました。そしてはやても登場です。

この話では得になんか秘密が明らかになる事はありませんが作者の戦闘シーンの書き方はこんななんだなと思ってもらえれば幸いです。

では、第九話をどうぞ

戦闘〜前哨戦〜

「あゝ美味しかった」

なのはは最後のデザートを食べ終わると、スプーンをテーブルの上に置き、口を拭いた。

「うん。美味しかったね。なのは」

フェイトも満足したようで、全ての料理を綺麗に完食していた。

「喜んで頂けたのなら、なによりだ」

冬弥は満足している二人に告げると、突然何かに気付いた様に窓の方に視線を向けた。それはレオンも同様であった。

「冬弥君。どうしたの？」

「ああ、わりい。何でもない。俺は先に会計を済ませてくるから、おまえ達はここにいてくれ」

「あつ！それは私が払うよ」

「いえ、こちらで払います」

二人は会計をしようと身を乗り出したが……。

「今日二人を招待したのは俺達だからな。ここは任せろ。その代わり、仕事の時に今日の借りを返してくれればいい」

「了解」

「分かりました」

ここは素直に彼のご馳走になろうと二人が席に着こうとした時、突然なのはに緊急連絡が入った。

「なのはさん！！こんな時間にすみません！！」

「クレア。一体どうしたの？」

「実は先程、ミッドの海岸沖に未確認の生命体が多数出現しまして、現在近隣の部隊が応戦しています」

「！！！！！！」

その場にいる全員が、その報告を固唾を呑んで聞いていた。

「ただ、敵の数が余りにも多すぎて近隣の部隊では対処出来ないとの事なので、我々はおるかミッド周辺の空戦魔導師に援護要請が出されています。先程ヴィータ二尉が要請に応じて先行されました。こちら準備が出来次第、出発します」

なのはは現状を理解すると、彼女に部下達への伝言を頼んだ。

「クレア。悪いけど、私の班の隊員には小隊長の指示に従って行動するよう伝えておいて。後、私はここから現地に直接急行する！」

「わかりました。それでは後程」

なのはは手短に話を終わらせると、すぐに準備に取り掛かった。

「冬弥君、フェイトちゃん、レオンさん、ごめんなさい。そういう事なので私はこれから現地に向かいます。今日は本当に楽しかった」

なのははそのままお辞儀をし、部屋を飛び出そうとしたところで冬弥に髪の毛を思いつきり引っ張られた。

「あい待った」

「ひぎー!!」

なのはの首がゴキリとなり、その場に崩れ落ちた。

「なっ！何するの〜!!」

「あのなあ。ここにオーバーランク魔導師が三人もいるのに、それを放置して行くおまえが何なんだよ。緊急事態で人手が足りないんだろう？俺達も行ってやる」

「でも、これはアルハザードに関係している事じゃないよ？」

なのはからの質問に、冬弥は顔をしかめた。

「その事なんだがな。多分その未確認生命体は俺達に関係している

と思う。なあレオン」

「そうだな。てめえも勘付いてたからな」

「????」

「とり合えず、その件については道すがら説明する。とにかく急いだ方がいい。飛行許可の申請はもう出してあるんだらう?」

「大丈夫です、ミッド周辺の空戦魔導師全員に飛行許可は下りてますから」

フェイトがモニターでミッド周辺の情報を確認し、冬弥の質問に答えた。

「それじゃ、行くか!」

四人はビルの一階まで降りると飛行状態に入り、全速で現場に向かった。

「長距離狙撃魔導師部隊は防衛線を構築!!前線部隊は各自受け持ちの担当空域の各個撃破を最優先!!逃がした獲物は追わんでええ、後方の広域殲滅魔導師部隊に対処させればええんやからな!!みんな落ち着いて対処してな!」

「「「はい!」」」

(とはいえ、さすがにきつついなあ)

臨時の編成魔導師部隊を指揮している八神はやては、現状の戦力では防衛線が持ち堪える事が出来ないだろうと予想を立てた。

「あかんなあ、このままやったら後方部隊がやられてまう」

モニターに表示されている敵味方識別コードを見る限りでは、敵が後方部隊に側面からの包囲殲滅戦をしかけてきているのがわかった。

(シグナム！ヴィータ！側面から後方部隊に攻撃を仕掛けてる奴らをたたけへんか？)

はやてはこの戦闘にいち早く駆けつけてきてくれた守護騎士ヴォルゲンリッターのシグナムとヴィータに、最大の脅威を排除できるかを尋ねた。

(申し訳ありませんあ主はやて。こちらも担当空域の敵を倒すのが精一杯なのです)

(はやて！悪い。あたしも他の奴らの援護をするので手一杯だ)

二人の騎士は主である、はやての頼みを聞いてやる事が出来ない己の無力さに嘆いた。そんな二人の胸中を察するようにはやてが言った。

(そんな事あらへんよ。二人がそこで頑張ってくれてるから、まだこの程度の被害ですんでるんや！！こつちの事は私が何とかするか、二人はそこを絶対に守ってや！！)

(はい!!)

(おう!了解だはやて!!)

主からの激励を受けて、二人の騎士は高揚した。シグナムは愛機レヴァンティンを連結刃に変形させ、周りの敵を薙ぎ払った。ヴィータもグラーフ・アイゼンをギガントフォームに変形させ、近場の敵を粉碎していった。

「後方の右翼に展開中の部隊は左翼の援護をしたってな。右翼の敵は・・・全て私が引き受ける!!」

はやては魔方陣を展開すると呪文の詠唱を始めた。こんな時にリインを手元から離れさせているのは辛いと思ったが、今はそんな事を言っている場合ではない。詠唱を完了し、彼女はありったけの出力で放った。

「フレーズ・・・ヴェルグ!!」

はやての雄叫びと共に、前方に展開していた五つの魔方陣から巨大な光の矢が放たれた。それらは着弾すると超巨大な光のドームを作り大閃光と轟音を響かせながら、周囲の敵を一掃した!!

「さすが!!はやて!!」

「お見事です」

二人の騎士は、主の圧倒的な力を見せられ感極まっていた。しかし、それでも敵は減るところか、むしろ増えているのだ。ここまで来るにすぎないが、魔導師全員に落胆の色が出てきた。はやて自身もこのまま部隊を危険に晒すのなら一時撤退をして、態勢を整えた方が得策なのではないかと考えていた瞬間。遙か後方から一本の超巨大な魔力砲の一撃が飛んで来て前方に展開していた敵を一掃、続けて三本の金色の色をした魔力砲が左翼の敵を一掃した。

「まさか!？」

はやては期待に胸を膨らませていた。この二つの魔法はあの二人の得意技であり、自分が一番頼りにできる魔導師達でもある。

「はやてちゃん！」

「はやて！」

そこに現れたのは、はやての予想通りの人物だった。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、来てくれておおきにな」

はやては二人が来てくれた事に本当に感謝していた。『これで勝てる!!』そう確信が持てたのだ。

「群^{レギオン}集体だな。やっぱり」

「ああ。間違いない」

そこには見知らぬ人物が二人いた。いかにも軍隊のゴツイ兄ちゃん

と思わせる様な体格の持ち主だ。ただでさえ身長の高いはやてからしたら、その二人は大男に見えたことだろう。

「ところで、なのはちゃん、フェイトちゃん、こちらの方達はどちらさん？」

「話すと長くなるから、後で纏めて説明するよ」

「そやね、今はそない悠長な話をしとる場合やないからな。この人達の事は後で説明してな」

「了解!!」

「ところで・・・、さっきの話ぶりやと、何やお二人はあの化け物共の事を知ってはるみたいですね？」

「まあな。八神二佐。ここは俺に任せてもらえないか？」

「「「はあ!?!」」」

冬弥からの突然の申し出になのは・フェイト・はやての三人は耳を疑った。

「冬弥君。それはいくら何でも無理だよ」

「危険すぎます」

「あなたが何者かは知りませんが、私も自分の部下を危険な目に遭わせる訳にはいきません!」

皆それぞれの思いを冬弥に向けてキツパリと言い切った。特にはやては部下に対して責任のある立場にいる為か、冬弥の提案に真っ向から反対したが、そんな彼女に対して冬弥は不敵な笑みを浮かべた。

「だが、俺はあいつらの名称を知っている？二佐は知らない。この事が大きな違いであると思うけどな？」

「確かにその通りですが、それであなたを信用するかは別問題やと思います」

「・・・」

「・・・」

「はやてちゃん。確かに、いきなり初めて会った人にこんな事を言われても信用できないのは分かるけど、冬弥君は絶対にみんなを守るから！！だから・・・彼を信じてあげて！！」

「なのはちゃん・・・」

はやてはなのはがこれ程信頼を寄せている人物が、いい加減な人間ではないだろうと思い、冬弥を信じる事にした。

「分かりました。これからの部隊指揮はあなたにお任せします」

「いや、戦うのは俺一人だ。前線の部隊も全て陸地に退避させてくれ」

この冬弥の申し出には流石になのはも驚愕していた。

「冬弥君それは・・・」

なのはの言葉が冬弥に遮られた。

「なのは。おまえは俺がこんな時に、嘘や冗談を言わないって知ってるだろ？」

冬弥の問いかけになのはは口籠もった。確かにそれは知っている。だが、なのはの心の奥にはいつもと違う感情が芽生えていた。それは不安という分類に属する感情であると思うのだが、彼女はその答えを見つける事が出来ず意を決して言った。

「分かりました。あなたを信じます」

なのはははやてに顔を向けると小さく首を縦に振った。それに頷いたはやては全部隊に陸地までの退避を命令した。

「レオン。俺の力が少しでも増えたと感じたら、すぐに陸地にバリアを展開しろよ」

「おう。暴れてこい。幸い俺の方は、今日は手助けしてくれる奴らが腐る程いるからな」

冬弥はタバコに火を付けると、口にくわえたまま群集レギオン体の元へ飛翔していった。この日この場に居合わせた魔導師達は自分達の“王”の力をまざまざと知るのだった。

戦闘〜風の手〜（前書き）

冬弥チート過ぎー！！

そう思つて戴きたく今回は冬弥の力を惜しみなく書きました。

それでは第十話をどうぞ

御詫び：データが消えてしまい、今まで小説を読んできていた方々には大変ご迷惑をお掛けしました。今後はこのような事が起きないように気をつけますので、応援宜しくお願いいたします。また、それに伴いエアのカートリッジシステムの出力も変更しましたのでご了承ください

戦闘く風の王

「主はやってっ！！こちらの退避は、全て滞りなく完了しました」

「はやってっ！！こつちも全部OKだ。言われた通り全部隊、陸地まで退避完了だ！！」

二人の騎士がはやてに近づき、現状の報告を行った。

「うんっ、ご苦労さん。二人ともご免な。色々面倒な事を押し付けてもうてえ」

「いえっ！お気になさらず」

「そうそう。何たってあたし達は、はやてを守る騎士なんだから、これ位当然だよ」

「そんな事言つて、ヴィータちゃん本当は、はやてちゃんから色々お願い事をされるのが嬉しいんだよね」

「うるせえぞっ！！なのはっ！！」

今なのは達は陸地から数百メートルの海上に待機しており、冬弥はそこから、さらに一キロ程離れた場所にて、彼女達からの連絡を静かに待ち続けていた。既に魔導師達は陸地に退避し、近隣の部隊も突然の退避命令に最初は困惑していたが、今は落ち着きを取り戻し、事の成り行きを静かに見守っていた。

(これで、あなたのご要望通り、全ての部隊の退避は完了しました。

・・・後は・・・お任せします)

「了解!!」

冬弥はくわえていたタバコを海に投げ捨てる、一瞬の内に数キロ離れたレギオンの群れの中心に移動した。彼は敵の真っ只中にいながら不敵な笑みを浮かべつつ、体中に魔力を集中させると一気にそれを開放した。

「ハアアアアツ!!」

刹那。その余波だけで、近場にいた大半のレギオンが消滅した。

「オオオオオラアアア!!」

彼がそのまま前方の群れに雄叫びと共に突進し、鋭い蹴りを放つと・・・。

『ギユイエエエエツ!!!!!!』

周辺のレギオンが断末魔と共に、強力な砲撃魔法で薙ぎ払われた様に消えていった。

「セエラアアア!!」

冬弥が攻撃の手を緩めず、目の前の群れに突きを放つと、巨大な光

の渦が天空へと舞い上がった。彼の体から溢れ出ている魔力は、それだけで並の魔導師の必殺の一撃に近い威力を誇っていた。それに突きや蹴りの威力を加える事で、なのはのディバイン・バスター並の威力を出していたのだ。彼の前ではレギオンの存在は余りにも脆弱だった。

「うそ．．．やろう．．．」

「こんな事って．．．」

「．．．」

皆、余りにも凄絶な光景に愕然としていた。彼が移動する度に巨大な光の渦が空中に現れ、それがレギオンを簡単に霧散しているのだから。

「あの未確認生物を素手で撃破する等、我々でも不可能だというのに．．．」

「むしろ．．．あの兄ちゃんの方が化け物だな．．．」

先程直接レギオン達と戦っていたシグナムとヴィータだからこそ、冬弥の圧倒的な戦闘力が理解出来たのだろう。その言葉の中には、尊敬と畏怖の念が込められていた。

なのは達が茫然自失としていた中でも、レギオンの数は確実に減少していた。冬弥は巧みな空戦軌道でレギオン達を数箇所を集めると、そこに強力な砲撃魔法数発を同時に撃ちこみ纏めて撃破した。そして、追い討ちをかける様に上空に巨大な魔方陣を出現させると・・・

「滅びを求むる物よ、汝が望み叶えたくば、我にその力を示せ・・・我望むわ凍土の牢獄に囚われし、汝が罪、汝が罰、汝を永久に縛る業・・・

汝許しを請うならば、我が言葉こゝろはに応え、その懺悔を示せ!!」

「ユダジューダスの・・・涙ティアーズ!!!」

刹那、周囲が凄まじい轟音で満たされた。空が割れ、天から光が満ち溢れ、彗星の如き魔力球が、海上に雨の様に降り注いだのだ。そしてそれは、地表を阿鼻叫喚の地獄と化し、レギオンの半数以上を激滅させた。

「・・・規格外もええとこやなあ。なのはちゃんのエクセリオン・バスター並の砲撃魔法を、予備動作も詠唱も無しに数発同時に撃つやなんて・・・、それに・・・何やの・・・最後のあの広域殲滅魔法は・・・」

「スターライトブレイカー以上の威力だったし・・・あの人・・・私よりも断然速い・・・」

フェイトはなのはを超える砲撃力と自身を超える機動力を持つ冬弥に、ただ驚愕する事しか出来なかった。

（でも、あの人は、自分達の術式は近代ベルカ式だって言った。だとしたら、今も全力じゃなくて、手を抜いて戦っているっていうの？」

武器に対する魔力付加や身体能力向上化のベルカ式に、ミッド式の汎用性をもった術式を組み込んだ物が近代ベルカ式である。・・・が、その主眼となる力はやはり近接戦闘能力向上化なのだ。冬弥は確かに、近接戦闘もしているが、それは魔導端末デバイスも持たず、防護服バリアジャケットも装着していない状態なのだから、彼が手を抜いていると思うのも無理からぬ事である。

「冬弥君・・・一体・・・君に何が・・・」

なのは冬弥の超絶的な戦闘能力に圧倒されながらも、何故、彼はこれ程の力を得るに至ったのか。そして、彼をここまで強くした守るべき人とは誰なのか“それを知りたい！！”・・・という思いを胸に抱き始めた。

「大分数が減ってきたな・・・。なら、このまま一気にいか・・・」

冬弥が一気に片をつけようと、再び魔方陣を展開しようとしたその時。

「んっ・・・？」

突如レギオン達が一斉に密集し始め、一体の巨大なレギオンが姿を現した。

「こりゃ・・・、ちよつと余裕きすぎたな・・・」

巨大レギオンはその巨躯をもって冬弥に肉薄し、今までのお返しとばかりに口から巨大な砲撃を放った。むろん、その光景はなのは達をも震撼させていた。今まで劣勢だったレギオンが突然融合して巨大化する等、誰が予想していようか。しかも、このような生物は未だかつて確認されておらず、エリオやキャロの影響で生物学や生態学を勉強し、今やちよつとした学者並の知識を持つフェイトでさえ、見たことも聞いた事もないのだ。

「な・・・何あれ・・・？」

「融合して巨大化した！？そんな生物見たことも聞いた事もない！」

「昔・・・あたし等が闇の書の蒐集くわいしゅうで倒たふしてた奴等よりもでかいな・・・」

「ああ・・・それと・・・戦闘力もな！」

皆が思い思いの言葉を口に出している中、後ろからはやての叱責の聲が上がった！！

「皆！！今はそんな事どうでもええ。私等がやるんわ、この状況を打破する作戦を考えるだけや！！」

はやての言葉に皆が頷き、現状を打開する為の策を出し合っていると、レオンが横から口を挟んだ。

「あのよお。盛り上がってるとこ悪いんだが、あの位なら、あいつ一人で余裕だぞ」

「余裕・・・なんですか!?!?!..あれが」

レオンの気の抜けた様な口調とは異なり、なのは、その一言を聞いて呆気にとられていた。

「まあ、そろそろ俺達も、陸地で待機してたほうがいいかもしれねえけどな」

「「「??.??.」」」

「ドリヤアアア!!」

冬弥は巨大レギオンに素早い連続技を叩き込み、相手が怯んでいる内に呪文を唱えた。

「これで消えるよ・・・ヴァジュラ!!」

直後、海上一帯が昼間のように明るくなり、超巨大な魔力砲が轟音と共に巨大レギオンに突進していき、大爆発が起きた。レギオンがいた爆心地は噴火した火山のように赤々と燃えており、そこからは

黒煙が勢いよく吹き出していた。しかし、冬弥は爆心地を鋭い目付きで睨みつけ、舌打ちをした。

「ちっ！消し損ねたか・・・」

黒煙の中からボロボロに傷ついたレギオンが出てきたが、大気中の魔力素を吸収し始めると、一瞬でその体を復元させた。

「・・・飽きたな」

(レオン、もう終わらせる・・・。そっちも準備頼む)

(O)K。いっちょ派手にやってくれ」

「レオンさん・・・、どうしたんですか？」

「いよいよ俺達の出番が来たんだよ。あんた達も準備してくれ」

「準備って・・・何の？」

皆訳が分からないといった顔でいると・・・。

「陸地にいる全員で、しこたま強力なバリアを展開するだけだ」

レオンの物言いに言い知れぬ不安を感じたのは、冬弥が命を削る程の大魔法を使うのではないかと心配し、彼に鬼気迫る表情で詰め寄った。

「レオンさん！！冬弥君は何をするつもりなんです！？」

「・・・魔導^{デハイス}端末を使うだけだ。ただ、あいつのは“特別性”でな
あ。まあ、見てりゃ分かる」

レオンはそう言うつと海上の冬弥の方を見つめていた。

冬弥は巨大レギオンと距離を置き、先程なのは達が待機していた場
所まで後退していた。

「起きろ【エア】」

『イエス、マイ、マスター』

重低音の金属音声が夜空に響き渡り、主の呼びかけに応じて【エア】
がその姿を現した。冬弥の身の丈を超える刀身を持ち、重剣や長剣
といった名称が似合いそうな武器だ。

「時間をかける気はない。一気に潰す」

『イエス、マイ、マスター』

同じ言葉を繰り返し使うところから、このAIの愛嬌の無さが分か
る事だろう。しかし、冬弥も愛機にそんな事を求めてはいないので、
このような淡白なやり取りはいつもの事だった。

「行くぞ！エア！」

『イエス、ロード、カートリッジ』

“ガシャシャン”

冬弥が出陣を告げるとエアはカートリッジシステムを起動させ、“二つのカートリッジ”を同時にロードさせた。その瞬間、海上一帯に淡いライトグリーン色の魔力が大洪水の如く溢れ出し、勢い余った魔力は空を貫き、天へと昇り続けた。

「……………」

皆魂を抜かれたように微動だにしなかった。それはまるで、神の降臨を具現化したかの様な……そんな光景であった。

「冬弥の魔導^{デバイス}端末には“ツインカートリッジシステム”ってえ新技術を導入していてなあ。カートリッジ自体も特別性で、通常の約三倍の魔力を圧縮して詰め込んでんだ。で、その特性カートリッジを同時にロードする事で、飛躍的に魔力を上昇させる事が出来るって訳だ。今ここら辺に満ちてる魔力はその副産物だな」

「具体的に……どれ位なんですか？」

「そっだなあ。ざつと十倍ってところか？」

「じゅ……!?!?」

その数値に驚いたのは質問したフェイトだけではなく、その場にいる全員だった。それだけの出力に普通の魔導師が耐えられる訳がない。だが、彼はそれに耐えているという現実が、冬弥の異常性をさらに高めてしまった。

「だから、あれはあいつ自身が設計・調整を行ったんだよ。普通の魔導端末だと簡単におしゃだからなあ。AIもあいつの馬鹿みたいな魔力量を制御する為に、インテリジェントデバイス並の知能を持つてる。正に冬弥による、冬弥の為の、冬弥にしか使う事が出来ない、究極魔導端末……って訳だ」

彼にしか扱う事が出来ない究極魔導端末エアは、皆の興味の眼差しを一身に浴びながら、その秘めたる力を解放しようとしていた。

「……ッ!!」

冬弥がエアを両手に構え、右斜めに振り下ろすと、巨大な魔力刃がレギオン共々海と空を真っ二つに切り裂いた。皆その光景に茫然自失とし、ここまで来ると彼は自分達とは“格”が違うのではなく、“存在”そのものが違うのではないかと思いついていた。

「もう……、勝負はついたな……」

レオンがそう呟くと、巨大レギオンは、自らの体を復元させながら逃走の準備に入っていた。しかし、この異形の生物の哀れな末路は、彼がこの剣を抜いた時点で既に決まっていたのだ。

「仕上げにかかるぞ。エア、選択を始める」

『イエス、マイ、マスター』

“ガシャシャン”

エアがカートリッジをロードすると冬弥は愛機を両手で掲げ、天をも覆いつくさんとする魔力を一気に刀身に収縮し始めた。すると、エアの切っ先に集まった魔力が巨大な渦の塊となって、世界が轟音と暴風で満たされていった。

「なっ何なのっ！！これっ！！」

「体が・・・吸い込まれてまっ」

「ッ！！バリアジャケット防護服がっ！！？」

何とフェイトのバリアジャケット防護服の一部が金色の魔力に戻り、冬弥の下に吸い込まれていった。

「ありえねえだろっ！！バリアジャケット防護服の構成を分解するなんてっ！！あっ！！」

ヴィータがその光景に驚いた瞬間、彼女の体が宙に浮いてしまった。

(やべえ！！！)

彼女は自身の体が急速に加速していくのを感じ、死を覚悟した・・・が。

「しっかりしろヴィータっ！！死にたいのかっ！！」

「すつすまねえ。シグナム」

シグナムが彼女を寸での所で救助した。その光景を見ていたレオンが、皆を叱咤激励した。

「てめえ等っ！！踏ん張れよっ！！気い抜いてっつと死ぬぞっ！！」

世界を一瞬で飲み尽くさんとする程の力の前に、なのは達は全力で耐えていた。

『マスター、チヨイス コンプリート』

エアの選択が終了し、冬弥が滅びの言葉を紡ぎ始めた。

「全ての者に罪を、全ての者に救いを、破壊と救済の申し子である
汝に我が血肉を捧げ

我が守るべき者には生を、我が滅する者には死を、汝の哀れみに救
われし全ての選ばれし者に

永久に尽きない栄光と祝福を！！」

「ラスト最後の・・・ジャッジメント審判————！！！！！！」

冬弥が暴力を前方に撃ち出すと、光も音もない世界が訪れた。そこに太陽の如く赤々と燃えている黄泉路の門が現れた瞬間、轟音と共に森羅万象全てが飲み込まれていった。

「なつ何やねんっこれっ!!??さっきまでの暴風はどないしたんっ!!!??」

「……ッ!!皆あれを見てっ!!」

なのはが叫んだ方向を皆が振り向くと、そこは一切の生を許さない、赤と黒で彩られた死の空間が渦巻いていた。

「せやけど、この状況も分からへんわ。一体何が……」

「エターナル ガーデン
永遠の箱庭だ」

狼狽しているはやてに対して、レオンが答えた。

「ラスト ジャッジメント
最後の審判と同時発動するこの魔法が、神^{エア}によって選ばれた者にとつての“約束の地”って訳だ」

「約束の地……」

そこには光が満ち溢れ、栄光と祝福が訪れていた。海上^{じく}にいる巨大レギオンは死を免れようと抵抗を試みたが、神^{エア}の裁きの前にそれは何の意味も成さなかった。

「冬弥の魔力変換資質は“風”だ……。それは放出すれば“あらゆる物を吹き飛ばし”収縮すれば“あらゆる物を消滅させる”……。誰も……。あいつからは逃げられやしねえよ」

『ギャゴオオオオオオ!!!!』

哀れな怪物は最後に一際大きな咆哮を残し、この世から消え去った。

“風の王”の圧倒的勝利に終わった戦いの後には、ただの静寂する残らない無の空間が広がっていた。

冬弥は戦闘を終えると現状の被害を確認する為に、レオンの元を訪れた。

「でっ？今回の被害はどれ位だ」

「俺も含めオーバーSランクが五人もいたようなもんだ！被害はねえよ。おまえの“守り”も完璧だったからな」

「まっ、そうだよな」

二人は取り留めもない話をしていたが、管理局の雪月花は先程の戦闘の余韻がまだ抜けておらず、呆然としていた。

（なあ、あれ、どうした？）

（ああ、ほっとけば良いだろ。さっきからずっとここだからよお）

（・・・なあレオン。俺なのはと関西弁やるから、あっちおまえ宜しく）

（・・・ああ？・・・おおっ！！分かった、分かった。んじゃ、行くか）

二人は念話で意見を確認しあうと、同時に雪月花の“胸”目掛けて・
・・!!

“モニユニユニユン”

「あっ!?!ちっさ」

はやての胸を揉んだ冬弥が呟くと

「な・・・な・・・な・・・何さらすんじゃボケ—————
—————!!!!」

「iiiiiiやああああ—————!!!!」

「ゴブラボオ!!!!!!」

冬弥の体はそのまま音速の壁を超え、綺麗に地面に突き刺さった。

「おっ——!飛んだっ、飛んだっ!!いやっすげえなあ〜おい!!」

「・・・あなたも・・・いつまで人の胸を触っているんですか・・・
」

「ん?・・・触るのが嫌なら、吸ってもいいんだぜ」(この鬼畜
!!!!)

「バルデッシユ」

「イエス、ザンバーフォーム」

「へ？」

「死になさい」

そのままレオンは光速の壁を超え、超特大ホームランボールとなつて生涯を閉じた・・・嘘です！！

ここで一句“乳揉みし 兵どもが 死地の後”・・・お粗末。

戦闘〜風の王〜（後書き）

戦闘〜風の王〜は如何でしたでしょうか？冬弥のチート感が滲み出ていると感じていただければ幸いです。

ちなみにエアのモデルは『Fate/stay night』の某俺様の武器をそのままイメージしていますが、形状は全くの別物を作者は考えております。

さて、ここまでシリアスな話が続いたので次からは、楽しいお話を書きたいと思っております。

では、次回でまたお会いしましょう

ひと時の安らぎ（前書き）

今回は真面目ながらもギャグ満載です。作者の頭の中では全てがギャグなのですが。

今回は今までのお話の中で一番短い話となっております。

では第十一話をどうぞ！

ひと時の安らぎ

「ふう〜、ようやくひと息つけるな〜」

はやては椅子に腰掛けると溜息をつき、目の前のコーヒーに口をつけた。

「お疲れ様、はやてちゃん。フェイトちゃん。」

「うん。二人共おつかれ」

今三人は近隣の部隊の応接室にて、疲れた体を休めていた。昨夜のレギオン襲撃事件の後、彼女達はいく先程まで事後調査やそれに関する報告書を纏めていたのだから、溜息の一つや二つ出てもおかしくはない。

「そういえば、はやてちゃんは如何してあの現場にいたの？」

「ああ、そやったね。説明しとくの忘れてたわ」

はやてはそう言うともモニターを出現させ、なのはとフェイトに説明を始めた。

「最近、魔導師の大量失踪事件が多発しててな〜、その失踪の仕方が変なんよ?」

「変・・・というと?」

「存在そのものが消えるっちゅうか、周りの人達がその失踪した魔

導師の事を全く憶えてへんのよ。かといって嘘をついてる風にも見えへんからな。それで、ちょうど行方のわからなかった魔導師の居場所を突き止めて現場に急行したら・・・」

「あの、レギオンって未確認生物がいたんだ」

なのはが話の続きを答えると、はやては無言で頷いた。

「あの生物は失踪した魔導師達となんらかの接点がある思てるんや。そやから、最初は捕獲でもしたるかなって考えとつたんやけど。あそこまで多くなったのは想定外やった」

はやてはそこで一段落つけると、脇に置いてあったコーヒーに口をつけた。

「さて、今度はそっちの番や。あの人達の事と、知つとる事を話してな」

はやてはチラツと隣にいる冬弥やレオンを見て、なのはとフェイトに視線を戻した。

「ちなみに“変態”っちゅう事は十分にわかったから、出来ればそれ以外の事を話してほしいな」

それまで黙って話を聞いていた二人が、“変態”という単語に過敏に反応し反論した。

「おいおい、俺達は変態でも何でもないぞ！あれは、あんだ達の正気を取り戻させる為にした行為だけ。なあ、レオン」

「全くもってその通りだ。いいか！！俺達は卑怯な事はしねえ！！例えば、パンツを見たいからといってわざと飛ぶスピードを落とすして後ろから見るとか、胸を揉みたいから、戦闘中さりげなく尻うふりをして揉むとか、どこぞの誰かみたいにフェレットになって、着替えや一緒に風呂に入るなんて事はしねえーーーー！！！！！！」

「ああ！！おまえの言う通りだ！！俺達はやる時は正々堂々正面から逝く！！例えその先に“死”が待ち受けていようと、それを乗り越えるのが“漢”《おとこ》だーーーー！！！！！！」

「じゃあ、冬弥君、レオンさん・・・少し・・・頭冷やそうか・・・」

なのはの虫ケラを見るような瞳に、背筋も血も凍る感覚を感じた二人の哀れな末路は語るまでもない。

なので、これからの話には二人は存在はしているが、隅の方で陸に打ち上げられた魚の如く跳ねているだけなので、“完全”に二人の事は割愛して話を進めさせてもらう。

「それじゃ、今度は私達の番だね」

なのはは昨日の出来事を、はやてが分かるように簡単に説明をした。正直なところ、彼女自身もまだ完全に理解できてはいないので殆ど自分なりの解釈を話したただけなのだ・・・。

「状況はよう分かったわ。つまりや、その“月の涙”が全ての元凶つちゅうこつちゃね。ほんなら、必然的に私もなのはちゃんやフェイトちゃんの手伝いをせなあかんちゅうことや」

「え！？はやてちゃんも一緒に手伝ってくれるの？」

「うん。私の追ってる事件と“月の涙”が関係している事は、今の話聞く限りやと間違いなさそうや。ほんなら、私も一緒に手伝った方が一石二鳥やろ」

はやてからの協力の申し出はなののはにとって素直に嬉しかった。また三人一緒に戦える。それだけでなのはの気力は充実したが、そんなのはとは対象的にフェイトは何かを思案していた。

「でも、はやて。私となのはは、正式な出向依頼で今回の事件を担当するから大丈夫だけど。個人的に協力となると色々と問題がない？」

「それなら心配無用や！私等の任務は完全に個人行動やから、私の勝手な行動で周りに迷惑が掛かるような事はあらへんよ」

「私は周りよりも、はやて個人に迷惑が掛からないか心配なんだけど……」

フェイトは“超”がつくほど心配性の性格である。これは彼女の出生が大きく関わっている為に皆も余り注意する事はないのだが、今回のような場合はその性格が周りにとって障害となる事もある。こうなってしまうた彼女を無理矢理説得するのは至難の技なので、はやては正攻法をとることにした。

「ほんなら、そつちから私に事件捜査にあたって協力の申請をしてくれへんかな。そうすれば問題ないと思うんよ」

「わかった。それなら私のほうでやっておくよ」

フェイトははやての提案に納得し、満面の笑みをほころばしていた。

「それじゃ、フェイトちゃん、はやてちゃん、改めて宜しくお願いします」

「こちらこそ宜しくな、なのはちゃん、フェイトちゃん」

「一緒に頑張ろうね。なのは、はやて」

三人の最強女性魔導師達はお互いに激励し、部屋を後にした。この後彼女達は、この事件を解決後に管理局の雪月花から管理局の五大魔導師と呼ばれるのだが、それはもう少し後の話である。

ちなみにスマキにされていた、哀れな二人は翌日清掃作業で部屋に

入ってきた隊員に無事救出された。

ひと時の安らぎ（後書き）

第十一話『ひと時の安らぎ』はいかがだったでしょうか？冬弥とレオンの変態っぷりが強調されましたが、この二人真面目な時は真面目です。

ちなみに作者はけして“変態”ではございません！！

さて、前書きで作者がこの話は全てギャグだと書きましたが、これはデフォルメされた冬弥とレオンが真面目に話しをしているのは達の後ろで常に跳ねている絵を想像しているからです。

読んでくださっている方も、私のように絵を想像して読んでいただく、また違った面白さが出てくると思いますので、お試しください。

地球く・iロ翠屋く（前書き）

今回の話は高町家のみなさんに会いに行こう！！

それだけの話です。バトったり、ラブったりする事は一切ありません。

それでは第十二話をどうぞ

地球くinn翠屋く

レギオン襲撃事件から十日後、なのは、フェイト、はやて、シャーリー、ティアナ、リインの六人は、本局の居住区の公園である人物を待っていた。

「うっん。遅いね」

「そうだね」

「レディを待たせるなんて最低ですう」

「まあ、そう言いなやリイン。向こうかて事情はあるんやろうし」

「でも！もう約束の時間から三十分も遅れてますよ！！いくらなんでも」

「シャーリーさんの言う通りです。時間を正確に守る事は社会人として常識です」

各々の不満を洩らしながら待っていると、ようやく目的の人物が現れた。

「悪い！ずいぶん待たせちゃったみてえだな」

冬弥は素直に遅れて来た事を謝罪した。

「冬弥君遅いよ」

「悪かったって、御詫びといつちやあ何だが、全員立ちっぱなしで疲れたる？近くに俺達の使ってる喫茶店があるから、そこで話をしよう」

冬弥は一人先を歩き出し、目当ての店に向けて彼女達をエスコートした。

「ここでなら、俺達の事について話しても大丈夫だからな。まあ、とりあえず好きな物を注文してくれ」

女性陣はその御言葉に甘えて遠慮なく注文をした。

「それはそうと、はやてちゃん。今回はザフィーラも借りる事になって本当にごめんね」

「あゝそんなんにせんでもええよ！それに、ザフィーラもヴィヴィオのお守りなら慣れてるやろしなあ、私も全然心配してへんから」

なのは今回の任務を正式に受ける前に、お世話係であるアイナ・トライトンにしばらく家に帰る事が出来ないかもしれないのでヴィヴィオの事を頼んでおいたのだが、それでも不安だったので急遽お守りとしてザフィーラが抜擢されたのだ。

「そういえば、ティアナとシャーリーとリンは冬弥と顔を会わすのは初めてなんだよね」

この十日間のうちに、冬弥達はお互いをファーストネームで呼び合う仲になっていた。発端はなのはの「これから一緒に仕事をしていくんだから、みんなお互いに名前で呼ぼう」の一言でこうなってしまった。皆それに抵抗を感じる事は無かったので、今では本当に友達のように話している。

「はふいでふう〜」

リインは既に運ばれてきたケーキを口一杯に頬張って、フェイトからの質問に答えた。

「ええ、資料では拝見しましたがけど、直接お会いするのは今日が初めてですね」

「私もシャーリーさんと同じです。ただ、私の場合はスバルからも風間一佐の事は聞いていましたので、お会い出来るのを楽しみにしていました」

ティアナはスバルからレギオン襲撃事件の冬弥の戦闘状況を詳しく聞いていたのだ。なぜなら、あの時の記録映像は個人記録から部隊記録において全てが抹消され、今では何処にも存在していないからである。

「でっ、本物を見たら時間は守らねえわ、何処にでもいる普通の兄ちゃん、さらにはデリカシーのない男って話を聞いて幻滅したか？」

「いえ、そんな事はな・・・いです」

「非常に正直な性格だな、おまえさんは」

ティアナは口籠もり苦笑いを始めた。

「冬弥君。私の元生徒を苛めるのはそれ位にして、どうして遅れてきたのかを説明してほしいんだけど」

「おう、それ言うの忘れてたぜ。実はな急で申し訳ないんだが、いきなり出張に行く事が決まった」

「「「「」」」」」

「まあ、私等は今日からこっちの宿舎にお世話になるつもりやっただから別にすぐ出れん事は無いけど、場所は何処なん？ほんで出来ればその理由も」

はやてが悩みながら尋ねると、冬弥はしばらくしてから話した。

「今回の事はこっちとしても異例の事態だな。もう調査し終わった世界からの反応だから、あんまし信憑性は無えんだが、規模がでかいんで再調査をする事になった。んで・・・その場所は・・・」

「地球だ」

『第九十七管理外世界 現地惑星名称地球、その中の極東の島国日

本に存在する“海鳴市”は、海沿いで潮風が気持ちいいとても過ごしやすい街だ。その駅前商店街の一角にある『喫茶 翠屋』は、ケーキとシュークリーム、自家焙煎コーヒーが自慢の名の知れた店である。と同時に高町なのはの実家でもあった。

「今日は思いの他、お客さんが多かつたな」

「そうねえ。でも、ランチタイムを過ぎたから、もう、あそこまで多くなる事はないと思うわよ」

「じゃあ、今のうちに私は、銀行に小銭の両替に行ってくるね」

「ああ、すまないが、頼むな美由希」

「良いつて良いつて。お父さんも来年にはもう五十歳なんだから、そろそろ自分を労らないと。じゃあ、行ってくるね」

“プルルルル” “プルルルル”

美由希が店から出ようとした瞬間に電話が鳴った。最初は桃子がとろうとしたが、それを美由希がジェスチャーで静止した。

「はい。喫茶 翠屋でございます」

「・・・」

「なのは！！久しぶり」

久しぶりの高町家の末っ子からの電話に、翠屋の店内が活気づいた。

「お父さん、お母さん、お姉ちゃん、ただいまー！ー！」

「なのは！ー！おかえり！ー！」

「おかえりー！ー！なのは」

「おお、なのは。おかえり」

そこにはなのはの帰りを心待ちにしていた、高町家の面々が揃っていた。その光景を後ろで見ていたフェイト達は店の中に入るタイミングを逃がしてしまい、しばらく外で会話が終わるのを待っていた。それに気がついたなのはがみんなを店の中へと招き入れた。

「みんな、ごめんね。すっかり待たせちゃって」

「何言ってるのよ！久しぶりに帰ってきたんだから、私達の事なんて気にする事ないのに」

「そうだよ、なのはちゃん。こっちは気にしなくても大丈夫だから」

そこにはなのは、フェイト、はやての大親友である月村すずかとアリサ・バニングスがいた。実は先だって、はやてが連絡を入れていたので二人とも翠屋で待ち構えていたのだ。すずかとアリサはフェイトはやてと外で談笑をしていたので、なのはがもう少し家族と話をしてもいっこうに構わないと思っていたのだが・・・。

「でも、ティアナやシャーリーもいるし・・・」

「そうだね。私達はよくてもシャーリー達がいるしね」

「いえいえ。私達の事はお気になさらず」

「大丈夫ですよ」

シャーリーとティアナも上官達が年相応の女性になっている姿を見ているのが楽しいので、外にいる事を別に苦とを感じる事はなかった。

「でも、お父さんも早くみんなを中へ入れてあげなさいって言うてるし」

「そやね、せつかくの御厚意を無駄にするのもあれやから、みんな、そろそろ中にお邪魔しよか。ん・・・あっ!!」

はやてが視線を向けた先には、翠屋に向かって歩いてくる一人の女性の姿があった。

「母さん!」

「フェイト!!久しぶりね」

それはフェイトの養母、リンディ・ハラオウンだった。彼女もフェイトから連絡を受けていたのでみんなに会いに来たのだ。ちなみに、外見は恐ろしいほど若い、それでも二人の孫を持つ真正正銘の“おばあちゃん”である。

「母さん。エイミィやアルフは?」

「二人とも来たがってたんだけどね。カレルとリエラのお相手で・
・ちよつと無理そうだからって」

「そうなんだ」

二人がにこやかに談笑しているのを横で見ていたはやてが。

「お二人共、外でばつか話したらんと、そろそろ中に入ったらどないです？もう、みんな入ってますよ」

はやてに促され二人は店の中に入っていった。

翠屋の店内は久しぶりに再会した家族や、親友達との話し声でとても賑わっていた。そんな時、なのはにある人物から連絡がはいつた。

「うん。・・・そう、お疲れ様。じゃあ、今からこっちに来るんだよね。場所は大丈夫？」

なのはが誰かと連絡を取り合っている姿を見ていた美由希は、話し終わったなのはに対し尋ねた。

「なのは。他にも誰が来るの？」

「うん！！正確には二人だけど、一人はお父さん達も会ったらびつくりするよ」

「「「???」」」

三人はなのはの言葉に疑問を感じていたが、当のなのはは笑顔でその誰かを待っていた。

やがて店の扉が開き二人の大柄な男が入ってきた。

「始めまして。レオン・スウィンフォードといいます。今回は大勢で押し掛けましてご迷惑をおかけしています」

先頭の男性が丁寧な挨拶をし、軽く会釈をした。そして後ろから現れた男に高町家の一同は驚愕した。

「土郎さん、桃子さん、美由希さんお久しぶりです……。風間冬弥です」

地球〜in翠屋〜（後書き）

第十二話いかがでしたでしょうか？

と言つか本当に会いに行くだけですから、感想の仕様もないですね。さて、次回以降に原作『とらいあんぐるハート3』の登場人物が一人出てきますが。先にここで注意事項です。

これはあくまで『魔法戦士リリカルなのは Wind』の世界観を元に原作シリーズの登場人物を出しますので、設定が原作と異なる事をお伝えしておきます。

具体的には能力者や人ならざる者達は全て普通の人間です。後、恭也と美由希は少なからず裏の世界に関わっている。それに伴う御神流の設定は原作通りとします。

以上の事を踏まえた上で次回からの話を読んでいただければ幸いです。

では、まだ次回にお会いしましょう

地球く in 翠屋 真実？く (前書き)

今回は色々な人に冬弥の秘密が知られるお話となっております。

何か前回と同じで殆ど進展してないなと思う方にはすみません。

では、第十三話をどうぞ。

風間家と高町家は父親が親友だった事もあり、昔から交流があったので桃子も美由希も冬弥の事をよく知っていた。それ故・・・、あの日、交通事故で風間一家が帰らぬ人になった事は、高町家にとっても大きな悲しみとして記憶に残っていた・・・が！！

「「「・・・」」」

「ねえ、お父さん・・・。びっくりしたとは思っけど、そろそろ何か言っしてほしいな。ほら、冬弥君も困ってるよ。お母さんもお姉ちゃんも・・・ねっ!」

今まで微動だにしなかった三人がなのは声で我に返り、ようやく口を開いた。

「あ・・・ああ、すまない、なのは。しかし・・・、本当に冬弥君なのか？」

「確かに信じられないですよ。死んだ事になってる人間が、突然生きてたなんて言われても、ですが、これが現実なんで理解してもらえますか？」

冬弥は苦笑いを浮かべながら、自分を指差した。

「でも、なんでまたなのと同じ職場にいるの？」

「それは・・・まあ・・・、色々あったというか・・・」

美由希からの質問に冬弥は口籠もってしまい、それが他の人達の興味を引いてしまった。

「何か訳ありみたいですよ〜」

「そうね、ちよっと興味あるわ」

「管理局の秘密とか・・・そんな事が関係してそうですね〜」

リンとアリサとシャーリーの三人は目を輝かせながら熱い視線を送っていた。冬弥はレオンに意見を求めようと、彼の方を振り返ったが・・・。

「話してやれよ。どうせ、いつかはそうするつもりだったんだろう？それに、今さらおまえの話で機密に触れる事は殆どありやしねえしな」

「・・・おまえも他人事だと思って軽く言いやがって」

「しかし、差し支えなければ冬弥君。できれば聞かせてくれるかな、君の事と・・・和弥かずやや沙織さおりさんの事を・・・」

それは冬弥の両親の名前だった。土郎は冬弥が生きているという事は、親友もことは違う世界で生きているのではないか・・・と淡い希望を持っていた。

「・・・分かりました。お話します」

冬弥は再びかつての物語を語るべく椅子に腰掛、ゆっくりとした口調で話し始めた。

翠屋の店内は先程までの賑やかさとは打って変わって静寂に浸っていた。皆一言も口を開かず、時間だけが虚しく過ぎていったが、その静寂を打ち消すかのようににはやてが口が開いた。

「冬弥君には、ホンマ失礼な事を聞いてまうけど堪忍してな。その実験で・・・どないな事をされたん？」

「基本的には検査が主だったが・・・、薬物投与に高魔力圧空間での耐性実験と、多少頭の中もいじられたな。後は・・・」

「ごめん、・・・もう結構や・・・」

はやては頂垂れたまま、冬弥の話を制止した。

「後、この話を聞いて管理局がヤバイ組織とか、最低な人間の集団だ・・・とか、誤解しないでくれな。現在の管理局では非人道的実験が実施された場合、相応の厳罰が下るし・・・そうそう実行する馬鹿もそんな事を考える輩もない！！」

冬弥は現在の管理局が倫理観を尊重している組織であり、マッドサイエンティストの様な人物はいない事を皆に主張した。それは非管理局員であり、娘や親友の事を心配した、高町家一同とアリサ・すずかに対しての配慮だった。

「それと、これはなのにも言った事だが、俺は局を恨んではいな

いいし、今の人生に不満も無い。周りがどうこう言おうが、これだけは偽りの無い気持ちだ」

「・・・少し、質問しても構いませんか？」

リンデイは姿勢をただし、澄んだ瞳で冬弥を見つめながら尋ねた。

「あなたの目標はなんですか？」

「目標？・・・とは」

「生きる意味と言ったほうがいいかもしれませんね。お話を聞く限り、あなたの今までの人生は管理局によって全てを台無しにされたのですが！管理局を憎む事もしなければ、辞める事もしない。なのはさん達のように、目的があって入局した訳でもない。そんな風間さんが目標もなく、こんな裏の仕事を続けていける訳が無い。何か・・・、あなたの存在そのものを支えている信念が、あるとしか思えないんです」

「・・・」

「これもなのはには話したんですが、守るべき者がいる。只それだけですよ。」

「本当に・・・それだけですか？」

「それだけですよ。そいつを守るには、局にいるのが一番ですから」

リンデイの表情は険しくなり、鋭い眼差しで冬弥を見据えていたが、彼はその視線に顔を背ける事も怯える事も無く、いつもの軽い口調

で返答した

「……」

「……」

「ふう。どうやら、これ以上続けても無駄みたいですね。あなたが本当の事を言ってくれるまで待つ事にします」

リンディは肩で溜息をつく、いつもの優しい表情に戻っていた。

「母さん！一体何を？」

今までのやり取りを心配そうに見ていたフェイトがリンディに対し尋ねた。

「ごめんなさいねフェイト。あなたに心配かけるつもり無かったのよ。ただ……、かわいい娘を預けても信頼に足る人物かどうか……それを確かめただけよ」

「で……。結果は」

「とりあえずは合格です。でも、あなた達には……まだ何か秘密がありそうですからね。もし、娘を危険な目に遭わせたり、泣かしたりするような事があれば、すぐに出向手続きを取り消しますから、そのつもりでいてください」

「肝に銘じておきましょう」

リンディの釈然としない返答に、冬弥とレオンはお互いに鼻を軽く

鳴らした。

（でも、それだけの人生を歩んできているのに、彼の目は凄く澄んでいた。それだけ守ろうとしている女性ひとが大切なのね……。私も一度会ってみたいわ）

「じゃあ、お話も終わったのなら、今夜はみんなでバーベキューでもやりましょうか？」

桃子の提案に皆が賛成し、会場は月村家の庭を使って行う事になった。女性陣は材料の買出しをする為に班を分け、男性人も役割分担を決めようとしていたその時、冬弥が士郎に声をかけた。

「士郎さん、少し・・・時間もらえませんか？士郎さんには伝えたい事があるんです」

「俺にかい？」

「はい」

今までに無い真剣な表情に士郎も何かを感じ取り、冬弥の誘いを受けた。

「わかった。母さん！！悪いが少し冬弥君と話しをしてくる。後を頼んでいいか？」

冬弥の表情を桃子も伺っていたので、彼女もある事を察し夫の頼みを聞き入れた。

「ええ。こっちは大丈夫だから、冬弥君とゆっくりお話しをしてきてね」

「悪いな」

「すみません。桃子さん」

冬弥が会釈をし、土郎が店の玄関を開けると二人は出かけていった。その光景を眺めていたなのは何事かと思い、桃子に尋ねた。

「お母さん。お父さんと冬弥君、何処に行ったの？」

「さあ、お母さんも分からないわね。冬弥君がお父さんにだけ話があるみたいだから」

「そうそう、なのはもそんな事は気にしないで、早く夕飯のお買い物に行くよ!!」

「うああ! ちょっと待ってお姉ちゃん。急に引張らないでよ!!」

母と姉に上手く話を逸らされた様な感じながらも、なのはは夕飯の買い物に出かけて行った。

地球〜in翠屋 真実?〜 (後書き)

第十三話『地球〜in翠屋 真実?〜』如何でしたでしょうか？

今回も冬弥の秘密について書きましたが、本編を読んだ方ならお気づきかも知れませんね（と言っか分かりやすいか）。

さて、次回では冬弥の一家と高町家の繋がりについて書こうと思っ
てます。

では、次回でお会いしましょう

建速宗家 須佐尊皇流（前書き）

主人公のチート能力その二・・・とでも言いましょうか。高町家と風間家の繋がりを描いた第十四話です。

サブタイトルはかなり、ゴツイですが話しの内容はそこまでゴツクないと思います。一部笑いも入れましたし・・・

それでは第十四話をどうぞ

建速宗家 須佐尊皇流

海鳴の街を一望できる小さな丘。そこはかつて、まだ魔法と出会って間もないのが、愛機レイジング・ハートと練習に訪れていた場所だった。二人はそのベンチに腰掛けると、夕暮れで紅く染まっっていく街を眺めながら会話を始めた。

「それで、俺に話したい事ってのは・・・何かな？」

士郎は単刀直入に話の核心に迫った。

「・・・」

「親父の死因について士郎さんには真実を伝えませんが、この話は他言無用に願います」

「・・・わかった。約束しよう」

士郎がその申し出に頷くと、冬弥は順を追って事の真相を語りだした。

「お野菜、お肉、お米と・・・後は飲み物だね」

なのははカートに入っている食材を見ながら、手にしたメモ帳にチェックを入れていた。今、なのは・フェイト・はやて・アリサ・す

ずか・美由希の六人は、夕飯の買い物をしに近くのスーパーに来ていた。

「なのは。子供達も来るから、何かお菓子を買っていきたいんだけど」

「だったら、お店のケーキを少し持っていくよ。後でお母さんに頼んどくね」

「ありがとう。なのは」

「でも、お肉の量はこの位で足りるんかいなあ。何や、冬弥君やレオン君は、馬車馬みたいに食べるイメージがあるんやけど」

はやてはカートに入っている肉に目を向けながら、なのは達に意見を求めた。

「確かに、これ位じゃ足りないかもしれないわね。何か見るからに『食べるぞー！』って感じだし」

「体もすごく大きいもんね。はやてちゃんの言うとおり、もう少し買っておいたほうが良いんじゃないかな。なのはちゃん」

「ダメダメ！！冬弥君って昔からよく食べ過ぎた後に『気持ち悪い』って言うんだから、少しは食時の量を抑えないと、いつか体を壊しちゃうよ」

そんな彼女達のやり取りを横で見ていた美由希は、先程のなのはの発言を聞いて不敵な笑みを浮かべた。

「なのはあく。まるで冬弥君のお嫁さんみたいね」

『お嫁さん』という言葉に、なのはは顔を真っ赤にして反論した。

「なっ！なんでそうなるの！！私は、ただ余り食べ過ぎるのは良くないって言ったただだよ」

「そういうのが夫の健康を気遣う良妻って感じに、お姉ちゃんには見えるんだけどなあ」

「そやね、確かに今のなのはちゃんは冬弥君の奥さんみたいやわ」

「なかなか良い新妻ぶりじゃない」

「二人共、お似合いだと思っよ」

「なのはが冬弥のお嫁さん、なのはが冬弥のお嫁さん、なのはが冬弥のお嫁さん、なのはが冬弥のお嫁さん、なのはが冬弥のお嫁さん、なのはが冬弥のお嫁さん……」

皆でなのはをからかい楽しんでいると（一人違うが）、当の本人は顔を紅く染めたままその場で硬直してしまった。

「さて、それじゃー買う物も決まったし、早くお会計済ませて帰ろうか。みんな、お腹すかして待ってるだろうしね」

「……ですね」「」

美由希の一言にみな頷くと、レジで会計を済ませ車に乗り込み月村邸に向かった。

「なのはが冬弥のお嫁さん、なのはが冬弥のお嫁さん、なのはが冬弥のお嫁さん、なのはが冬弥のお嫁さん、なのはが冬弥のお嫁さん、なのはが冬弥のお嫁さん、なのはが冬弥のお嫁さん、なのはが冬弥のお嫁さん、なのはが冬弥のお嫁さん」

「フエイトちゃん……、ええかげん帰ってきていゃ」

「これが全てです」

冬弥は休みなく話し続けていたのだろう。既に日は傾き、辺りには街灯がともっていた。

「冬弥君……ありがとう」

冬弥は様々な美辞麗句を並べ立てられるよりも、その一言で今までの全てが報われたかの様に感じた。

「俺の勝手な我が儘には、勿体無い言葉ですね」

「そんな事はない」

「……」

「ただ、今の君は自分を守るという考えが欠落しているような、そんな気がするな」

「……」

「俺はそれを気をつけろとだけ言っておこう。自分は良くても、それで周りが悲しむ事になるから」

「経験談ですね」

「その通りだ。それで家族に迷惑を掛けて、今でも生きているんだからな。本当に……桃子や子供達には、頭が上がらない」

二人が微笑みながら街を眺めていると、柔らかな風が丘に吹き、二人の体を優しく包み込んだ。

「しかし、本当に立派になったなあ。和弥も沙織さんも、きっと喜んでくれてるだろう」

「どうでしょうね。親父が生きていたら、軟弱者とか言ってる怒鳴りちらすんじゃないですかね」

「確かに。あいつは自他共に厳しい性格だからな。尊皇流を極め、その理に生きようと常に必死だった」

尊皇流とは御神流みかみりゅうに匹敵する戦闘力を持った古武術である。正式名称は建速宗家たけはやそうけ 須佐尊皇流すさそんおうじゅう。速さと技を極めた御神流、破壊力と殺傷力を極めた尊皇流、この二つの流派はお互いを高める為に切磋琢磨してきた。故に、当主による真剣勝負も行われているが、未だに勝敗はついていない。

「しかし、その息子が尊皇流を継ぐ事は無理でしょう。なにしろ、技を教えるに貰うべき親父が、先に死んでしまったんですからね」

「独学でも無理かい？」

「書物や奥義書に記されている技は自分なりに完成させましたが、それが本来の技であるのかを見定めてくれる人物は・・・もういないですからね。口伝のみで伝わっていた奥儀もある・・・と親父から聞いた事もありましたから、俺が尊皇流の継承者を名乗る事はありません」

「そうか。だが！尊皇流の理を君も受け継いでいるんだろう？それだけでも、立派な継承者だと俺は思うがね」

尊皇流の理、それは『荒ぶる力を持ってして、尊き者達を守るべき皇となれ』。前回のレギオン襲撃事件の時も、冬弥はこの理通りにその力を行使していた。

「そんな事はないですよ。理を受け継ぐだけで継承者になれるのなら苦労はしません。それに俺は未熟ですから、力を行使するだけで何も守れていませんよ」

「それは謙遜し過ぎだと俺は思うね。現に君は、一番尊ぶべき者を守り続けている。それが証拠だよ」

「どうなんでしょうね」

士郎の言葉に少し気恥ずかしさを感じた冬弥は、素気ない返事をする事でその場の空気を変えようとした。士郎もそれに気付いたのか、これ以降はこの話題に触れる事はなかった。

「さて、そろそろ戻ろうか。でないと母さんに怒られるからな」

「桃子さんが怒ったら怖いですからねえ。まあ、その血は間違いなくなのはに受け継がれてますが」

冬弥は先だつてのスマキにされた時と、レオン共々放置された時の事を思い出していた。

「冬弥君・・・何をしたんだ？」

「いえ。この話しは忘れてください」

士郎もものには滅法甘い。おそらく今、この場である時の話をすれば血の雨が降るだろうと予測した冬弥は、強制的に話題を切り替えた。

「そういえば、桃子さんと言えばヴィヴィオの事を可愛がっているんでしょうね」

ヴィヴィオの名を出した途端に士郎の目が輝きだした。

「そうなんだよ！冬弥君！ヴィヴィオが凄く可愛くてな！！本当に目の中に入れても痛くないとはよく言ったもんだ」

「・・・士郎さん？」

「それに凄く礼儀正しいしな！！ちゃんという事も聞くし！！勉強熱心だし！！我が儘も言わないし！！俺たちの事を気遣ってくれるし！！」

「・・・」

「それにな!!」

「土郎さん。先に戻ってますね」

冬弥は丘の上で一人孫自慢をしている土郎を尻目に、月村邸へと向かって行った。

「それかなあ!!あつあれ?冬弥君?何処行つた?冬弥く——
——ん!!」

建速宗家 須佐尊皇流（後書き）

第十四話

たけはやそけ
建速宗家

すなそんあつりゅう
須佐尊皇流

は如何でしたでしょうか？

ご不満な点や気になる事があれば、どんどん感想を書いてください。

今回は作者も結構考えて流派を作りました。題名の風にちなんで作ってもいます。

さて、今回は月村邸でのバーベキューですが。ちゃんと無事に食時
が出来るのでしょうか。では次回にまたお会いしましょう。

地球く in 月村邸 究極の選択く (前書き)

最近バーベキューなんて食ってないなあ〜と思いながらこの回を書いてました。

普通に飯の事考えながら書いていると不思議とお腹が空いてくるから人間の体って不思議ですよ。

さて、この回でも別に何も進展はいたしません。いや、なのはの心境に若干の進展はあったかな？

そんなこんなの第十五話をどうぞ

地球くinn月村邸 究極の選択く

“ジユウ、ジユウ”

肉が焼ける香ばしい匂いが庭全体に拡がり、皆の食欲を掻き立てていた。既に準備は整い、食卓には色鮮やかな料理が並んでいた。

「ほんなら、食時の準備も整ったとこやし、皆さん頂きましょう」

「「「頂ます！！！」「」」

各々が自分の取り皿に好きな料理を盛り、賑やかに談笑しながら食時をしていた。なのはは周りを見渡し、一人黙々と肉を貪り食っている冬弥へ近づいていった。

「冬弥君！少し食べ過ぎだよ！」

「んああ？」

肉を口一杯に含んでいる冬弥は、なのはに振り向くと驚くほどの勢いで咀嚼し、一気に喉の奥へ流し込んだ。

「まあ、固い事言っな。折角のパーティーだ！楽しまないと損だぞ」

「楽しんだ挙句に、それでお腹を壊して任務に支障をきたしたらどうするの？」

「ガキじゃあるまいし、それ位の節度は守るって」

そういつて冬弥は脇にあるスパゲッティを頬張り出した。

「もうお〜」

なのはは溜息をつきつつも、その表情は驚くほどの笑顔だった。冬弥はそんな彼女の事に全く気が付かずに、ひたすら料理を食べ続けていた。

「冬弥君。ちゃんとお野菜も食べてる？」

「ああつ、喰ってる喰ってる！！だから、いちいちお袋みたいな事言うな」

そんなやり取りの中でなのははある出来事を思い出し、不敵な笑みを浮かべながら自分の取り皿にスパゲッティを盛り始めた。それを綺麗にフォークに巻きつけ、おもむろに冬弥へ差し出し……。

「冬弥君、冬弥君」

「ん？」

「はい。あ〜ん」

「……」

「冬弥君。あ〜ん」

「……なのは。これを俺に食べと……」

「うん、そうだよ。はい。あ〜ん」

冬弥は現状を正確に入念に事細かく分析し、一つの結論を出した。
“こいつ馬鹿だ!!!”

子供の頃ならいざ知らず、今や二人共立派に成長した大人である。
おそらく、なのは自分が困っている様子を見て楽しんでいるのだ
ろすが、周りから見たら二人共いい笑い者だ。
しかも……。

(親兄弟のいる前ですんなよ!!!)

と冬弥は心の中でなのはにツッコミを入れたが、それが彼女に届い
ている訳がない。既に周りはこの状況の結末を見守るべく臨戦態勢
に入っており、中にはカメラやビデオをまわしている猛者までいる。

「これは見物やで。冬弥君の男が試されるな」

「なのはさんの一世一代の大舞台。このシャリオ・フィニーノがし
っかり記録に収めます!!!」

「ドキドキするですう」

「なのはったら……大胆」

「なのはちゃん。頑張って」

「こりゃもう、ユーノ君の負けだね」

「エイミィ。ユーノ君が負けってどういう事？」

「あっ!!! なっ何でも無いよ美由希ちゃん!!!」

「ん？」

「いいねえ。俺も好きだぜえ、こういうの見るの。しかも、相手が冬弥とくれば。かっー！！面白れえ！！」

「落ち着いてくださいフェイトさん！！こんな所で広域殲滅魔法なんて使ったら、辺り一面焼け野原ですよ！！」

「離してティアナ！！今なら・・・今ならまだ間に合うから！！！！」

こんなシチュエーションは男にとっては夢であろう。しかも、相手が美人で優しい幼馴染とくれば文句の一つも無い筈だが、それも時と場合による。今の状況は蛇の生殺しといっても過言ではない。なのはがこの状況に気付いて自分から身を引いてくれれば一番良いのだが、困った事にこの鈍感娘はそういった類の視線には全く気付かないのだ！！

（喰うしかないか・・・）

冬弥は意を決してなのはが差し出しているスパゲッティを口に含み、先程とは打って変わってゆっくりと咀嚼して飲み込んだ。その瞬間、後ろの方で歓声が巻き起こっていたが、冬弥はそれを気にしないようにしていた。ちなみに一人だけ木陰にうずくまり、“のの字”を描いているフェイトをティアナが必死に慰めていた。

「冬弥君。美味しい」

「ん。不味くは無い」

「美味しいなら美味しいって素直に言えばいいのに」

なのはは満面の笑みで冬弥を見つめているが、彼は後ろから聞こえてくる冷やかしの念話に羞恥しゅうちの念をかられていた。

（美味しそうやったな。なのはちゃんにあぐんって食べさせてもろて）

（いや。今回ばかりはさすがの俺も引いたぜ。まさか本気マジで食うとは思わなかった）

「やめて!!見ないでーーーー!!」

冬弥の儂くも悲しみに満ちた叫びが、月村邸の庭に響いた。それを土郎、桃子、リンディの三人は端から穏やかに見つめていた。

「あらあら、風間さんも災難ね」

「なのはも少しは冬弥君の事を気にしてあげたら良いのに、しょうのない子ね」

「まあ、仕方ないだろう。何だかんだ言って、なのはが一番嬉しか

「ったんだろつさ」

三人は年長者らしい、落ち着き払った態度で若者達の戯れを眺めていた。まるでその場所の雰囲気だけが周りと違っているような・・・。そんな感じだった。

「士郎さん、桃子さん、リンディさん。お茶をお持ちしました」

三人にお茶を持ってきたのは、すずか専属のメイドであるファリン・K・エアリヒカイトだった。彼女は慣れた手付きで紅茶を淹れると、温めておいたティーカップに注いだ。

「ありがとうございます」

「いえいえ。それでは、どうぞごゆっくり」

ファリンは紅茶を三人に配り終わると一礼して、その場を後にしようとしたのだが・・・。

「ファリンちゃんも、今日は色々と疲れたでしょう？そろそろゆっくりしたらどう？」

「恐縮です。では失礼して」

桃子はファリンに労いの言葉をかけると、テーブルの椅子を一つ引き出した。彼女も桃子の行為に素直に甘え腰を下ろした。

「本当にありがとうございます。ファリンさんには孫達の面倒まで見て頂いて」

リンディはファリンに深深と頭を下げた。

「とんでも御座いませぬ。私も今日は、久しぶりに大勢のお客様を御持て成しいたしましたので、楽しかったです」

「しかし、ファリンちゃんもお姉さんが居なくて寂しくなったりしてないかい？なんだか、恭也が忍ちゃんと一緒に連れて行ったようなもんだからなあ。俺としてもファリンちゃんには申し訳ない気がするんだが」

ファリンの姉であり、月村家のメイド長であるノエル・K・エーアリヒカイトは忍専属のメイドでもある。なので恭也と忍がドイツに渡る時にお世話係として一緒に付いて行ったのだ。

「いえ。おねーさまとはよく電話で話しをしますし、私も恭也さんや忍お嬢様の御様子を聞いたりも出来るので、寂しいと思ったことはありません。それに、私はすずかちゃんの専属メイドですから、主人を放ってお屋敷を出ていく訳にもいきません。おねーさまもそんな私を信用して下さいたからこそ、お屋敷の全ての管理を預けて出て行かれたと思いますので」

「そうかい。それを聞いたら、少しは安心したな」

士郎の言葉に四人は微笑みながら、お茶を飲んだ。

「話は替わりますが、なのはさんもこのままだと、すぐにお嫁に行ってしまうんじゃないですか」

「そうですね。今のあの子の顔を見ると・・・そんな気がします」

「そうなりますと。 土郎さんも桃子さんも寂しくなりますね」

桃子とリンディとファリンはその話題で談笑をしていたが、土郎は一人、顔を引きしめ……。

「ファリンちゃん。 悪いんだが、少し席を外して貰えないかな」

「あっ！はい。 分かりました」

「すまないね」

「いえいえ。 では、何か御用がありましたら、すぐに御呼び下さい」

ファリンはそう言うと深深と頭を下げたその場を後にした。

「何か……重大なお話ですか土郎さん？」

リンディも何かを察して土郎に尋ねた。

「さっき、冬弥君から絶対に誰にも話さないでくれと言われたんですが、リンディさんには話さなければならぬと思ひましてね。 . . .
・それに桃子にもな」

土郎は一呼吸おいてから、先程冬弥から聞いた話を二人に聞かせた。若者達の笑い声も今の三人の耳には全く入ってはこなかった。

そして、今宵月村邸では、笑いの声が絶えない賑やかな夜が続いたが、そんな楽しい食時会に招かれざる客が近づきつつあった。

地球〜in月村邸 究極の選択〜（後書き）

第十五話『地球〜in月村邸 究極の選択〜』は如何でしたでしょうか？

いや〜ああいうノリは現実ではマズ無いですよね。作者も経験ありません（彼女もいない奴がある訳無い！！）。なにやら高町さん家はもはや両親公認なようですが、何か冬弥君はなのはさんに隠している秘密がある模様です。これの真実が明らかにされないと二人の恋に進展はないでしょう。

後、前回からやたらとフェイトが狂っていますが、これは親友としてなのはを心配しているので、決して百合感情はございません！（それを期待している人にはすみません）

さて次回は再びバトルです。今度は地球のバトルですが、はてさて何が出てくるやら。では、次回でお会いしましょう。

地球く戦闘 神聖なる一撃く（前書き）

遂にきました！！なのはさんの“全力全開”！！

やっぱり、これがあつてこそその『リリカルなのは』ですよ。あのなのはさんの全てを破壊する力に作者が取り込まれて早数年・・・。え？話が長くなりそうだから、もう止める？そうですね。これを見る方は十分にわかってますから、これ以上の説明はいらないですね。

では、第十六話をどうぞ！！

地球く戦闘 神聖なる一撃く

「ほんなら、皆さんも明日は早いやるし、食時会もこの辺りでお開きとしましょか？」

時計を見ると、既に夜の十時を回っていた。皆明日も仕事や大学やらで忙しい身なので、余り夜更かしをするべきではないと判断したはやてが解散を促した。

「そうだな。そろそろいい時間だから、今日はここで解散とするか」
「だね」

「それじゃ、皆で後片付けをしようか？その方が早く帰れるだろうから」

「「「はい」」」

女性陣は食器やお皿を片付け、男性人はテーブルや椅子を倉庫に戻し、ある程度の片付けが終わると各々が家に帰る準備を始めた。

「それでは皆さん。今日はホンマにお集まり頂いてありがとうございます。私等はまだ当分こっちにおるんで、また今度・・・」

「「「!!」」」

その時、冬弥とレオンは突如として現れたレギオンの反応に意識を集中した。

(気付いたか)

(ああ。けど、今まで何も感じなかった。妙だな)

(それよりも、この事はこの場の全員に知らせよう。その方が楽だ)

(だな。)

冬弥とレオンはすぐになのは達に現状を説明し、非戦闘員達を屋敷に非難させ強力なバリアを展開させた。なのは達も街の周囲全体に広域結界を展開させると全員武装状態に入った。

「でも、どうして今回は冬弥君もレオン君も今まで気付かなかったの？この前は、相当遠くからでも気付くような素振りを見せていたのに」

「そうだね。あのレストランからレギオンの出現地点までは、相当な距離があったのは間違いないし」

「多分・・・なんかの邪魔が入ってるとしか思えねえんだよね」

「無駄口叩くな！そろそろ来るぞ」

冬弥の一言に全員が臨戦態勢に入り、武器を構えた。今回は冬弥も最初からエアを手にしており、レオンの手にも魔導端末デハイスが握られていた。両端に刃がついている長槍で刀身は中央から四つに割れてお

り、そこから魔力刃が伸びていた。

「みんなっ！、来たよ！！」

なのはが叫んだ方向を全員が振り向くと、空一面をレギオンの群れが覆っていた。まだ距離はかなりあるものの、エリアサーチをなのはがしていたので確認する事ができた。しかし、その姿は先日目撃したものと違い、人の様な姿をしていた……。否！！それは正に人その物だ！！違う所は人間的思考能力がない事だといえよう。

「なっ何、あれ！？」

「人？いや、違う！！あれは、レギオンだ！！でも……。あれじゃ、まるで……」

「人間その物……。って感じだな。まあ、奴等は姿を簡単に変える事が出来るから、不可能じゃないんだろうが……」

「とはいえ、あんなのが街中をふらついたりしたらあかんぞ。『私等』はともかく、一般人や普通の魔導師達にはあれと人間の区別はつきにくんとちゃうか？」

「おまえ等、グダグダ考え過ぎなんだよ！ようは奴等を皆殺しにするやいい話じゃねえか！！」

「確かに……。現状ではそれが一番手っ取り早いな」

冬弥とレオンは意気投合したのか、二人とも恐い位の笑顔だった。それは端で見ていた女性陣は呆れ顔で溜息をついた。

「あんなくそれで猪突猛進した結果、非戦闘員の方々が襲われでもしたらどないするんよ〜」

「何か策を考えないと。市街地にも行かれたら、被害がますます拡がる」

はやてとフェイトが二人を制止し、安全且つ確実に敵を殲滅する方法を考えようとしていた、その時。

「じゃあ、誰かに餌になつてもらおうか・・・」

冬弥の発言に皆が注目した。

「レギオンの行動は本能的だ。基本一番危険と判断した相手から先に倒す。それを利用する。餌は・・・そんだな、なのはにやってもらう」

「私が？どうして？」

「この餌役には、砲撃手が一番相性がいいからな。特におまえ程の破壊力を持つてれば、敵もすぐに喰い付いてくれるだろう」

冬弥の突拍子もない発言は今に始まった事ではないので、なのはも余り気にはしなかったが、彼が愚考な作戦を提案しているのではないか・・・と判断し、具体的な案を聞く事にした。

「冬弥君、私は何をすれば良いの？」

「まず、超長距離砲撃で一気に敵の数を減らし、全ておまえに敵の目を向けさせる。次におまえはそのまま屋敷の敷地内まで全速で後

退、敵を全て敷地内に誘き寄せさせる。そして、はやてにケージ系の魔法で敷地全体を閉鎖してもらい敵の退路を断ち、包囲殲滅する。常套的うごうてきな戦術だが、これが一番いいだろう」

「関門かんもん捉賊そくぞく。門を閉ざして敵を捉う”って作戦だね！すごい、冬弥君。見直したよ！！」

「そういう事だが、何か引つ掛かる言い方だなあ。まあ、いいすぐ準備に入る。ティアナは非戦闘員の護衛をしつつ、俺達の援護だ。出来るな」

「はい！！任せてください！！」

「よし！作戦開始だ！！」

冬弥の合図を機に全員が各々の担当位置に付き、なのはからの合図を待った。

なのはは自分が最大の脅威だと敵に認識させる為に、あえて魔力を放出し上空で待機していた。既に彼女はその“人ならざる者達”を射程距離内に捉えてはいたが、皆の負担を減らす為にも出来るだけ多く撃破しようと考え、奴等が必中距離まで接近して来るのを静かに待ち続けていた。

『マスターッ！！』

「……………!!」

愛機レイジング・ハートからの呼びかけに今まで閉じていた両目を見開き、彼女は杖を構え射撃体勢に入った。

(距離は約一万・・・遮蔽物もないし、敵が防御魔法を展開してる様子もない・・・これなら・・・)

「レイジング・ハート!! プラスター3 - !!」

『イエス マイ マスター』

彼女のピンク色の魔力が天を衝く勢いで溢れ上がり、レギオン達の視線を釘付けにした。レギオンはその巨大な魔力量に本能的危険を感じ彼女目掛けて突進して来たが、既に時遅く・・・必殺の一撃は今!!・・・放たれようとしていた。

「デイベイ……………」

“ガジャン” “ガジャン” “ガジャン”

彼女が魔法の詠唱を始め、カートリッジが随時ロードされていく。肥大化していく魔力が限界に達し、はちきれんとしたその時!!

「バスター……………!!!!!!」

詠唱が完了し超巨大な魔力砲が、轟音と共に暴走機関車の如くあらゆる障害を巻き込みながら突き進んでいった。レギオン達はその攻撃に成す術もなく、一瞬の内に消滅させられた。

「なのはっ！！また、無茶して！！」

「いきなり半数以上が消滅かよ・・・すげえなあ、おい！」

「いきなりブラスター3やんで、流石なのはちゃん。“全力全開”やね〜」

「相変わらず。凄いですね。なのはさんは」

「・・・今度からは悪戯も控えめにしとこう、ありや死ぬわ・・・」

各々がなのはに対しての感想を口にしてしていると、彼女は急速に高度を落とし、月村邸の庭の中央辺りに着地した。それを追いかけるようにレギオンの群れが彼女に突進してきていた。

「はやてっ！！今だ！！」

「おっしゃ！！行くよ。リン！！」

「はいです！！」

冬弥の合図ではやてが屋敷全体を外界と遮断すると、それまで待機していた四人が一斉にレギオンに襲い掛かった。はやては敵の分散状況を調べつつ、遮断範囲を絞めながら味方が優位に立てる状況を作り上げていった。そして、全ての敵を一つの空間に纏めた瞬間。

「みんな、今や！！」

はやてからの合図を受け、四人は魔方陣を展開し、呪文の詠唱に入った。・・・そして!!

「プラズマ・スマツシャーーーーー!!」

「ファントムブレイザー!!」

「ゴスペル!!」

「シルフィード・ファング!!」

フェイト、ティアナ、レオン、冬弥が雄叫びと共に放った特大の魔法が、太陽に勝る程の輝きを放ち、夜空の闇を駆け抜ける巨大な閃光となって、はやての捕えていたレギオン達を貫いた!!

『ーーーーッ!!!!』

レギオン達は断末魔の叫びすら残す事なく、一瞬で灰燼と化した。。。

「シャーリー。被害対策班にすぐ連絡を入れてくれ。色々と迷惑かけちゃったからな」

「了解です。冬弥さん。すぐ連絡します」

戦闘は冬弥達の圧勝で終わった。この後、シャーリーが広域探査を行い敵の再出現の可能性が無いと告げると、ようやく冬弥達は臨戦態勢をといた。

「皆さん、もう大丈夫です。敵は完全にいなくなりました」

アリス達と共に非難していたシャーリーが付近の安全を告げると、周りからようやく安堵の息が漏れた。

「なのは達、大丈夫かしら」

「そうだね。すごい爆発音とかしてたし」

アリスとすずかは親友達の無事を確認する為にシャーリーに色々と尋ねていた。

「「「「「」」」」」」

「なのはさんが・・・心配ですか？」

微動だにせず外の様子を見ていた士郎、桃子、美由希の三人にリンデイが優しく声をかけた。

「そうですね。特にこういう戦闘は初めて目にするので、心配していませんと言えは嘘になります」

士郎が振り向きながらリンデイに対し返答をした。彼女は士郎の言葉に若干違和感を感じたが、それを追求する事はしなかった。

「でも・・・冬弥君がいますから、安心していきます」

「そうですね。彼がなのはさんを守ります。いえ……なのはさん
だけではなく私達も」

リンディと桃子が微笑みながら話していると外を見ていた美由希が
振り返り……。

「お父さん、お母さん。なのは達戻ってきたみたいだよ」

美由希の言う通り既に玄関の前では、アリサとすすかがなのは達の
無事を喜び合っていた。土郎達も娘の無事を喜びながら玄関へと向
かった。

「なのは。お帰りなさい」

「ただいま。お父さん、お母さん、お姉ちゃん」

なのはは満面の笑みで家族の元へ向かった。それを後ろで見ている
冬弥も顔を綻ばせていた。

「冬弥。……結局おまえは“そっち”で生きていく事を選んだか
……」

男は一人空中から月村邸を眺めていた。

「まあ、おまえが選んだ道だ。最早俺は何も言わん。だが……。

また会えて嬉しいぜ“マイ ブラザー”」

男はそう言つと一人闇の中へと消えていった。

地球〜戦闘 神聖なる一撃〜（後書き）

第十六話『地球〜戦闘 神聖なる一撃〜』は如何でしたでしょうか？

全力全開だからプラスター3これ基本です。

え？全力全開なら『スターライトブレイカー』ですって？それ出し
たら作戦意味無いですよWWW。

さて、最後に新しいキャラがチラッと出てきましたが、彼は何者な
んでしょうか？何やら冬弥と因縁のありそうな方でしたが、これか
らどう関わってくるのかな？

さて次回はまた、捜査活動です。余り進展のない話かも知れませ
んが、皆さんお付き合いください。

ではまた次回でお会いしましょう。

地球く天使の歌姫く（前書き）

久しぶりの投稿です。

今回は後書きで色々と書きますので、前書きは短めにしておきます。

では、第十七話をどうぞ!!

地球へ天使の歌姫へ

あれから私達は、ロストロキア古代遺物の捜査を続けたけど、該当する物はなく、ただ虚しく時間だけが過ぎていった。レギオンもあれ以来姿を見せず、もう、ここでの調査を終えようとしたその時に・・・あの事件は起こった・・・。

「おい、なのは！ロングアーチからの報告でサーチャーに反応があったらしいぞ」

「本当っ！？それで、どこに？」

「英国だ。ただ、近辺をかなり動いている事から誰かが所持、もしくは自律行動型の古代遺物ロストロキアかもしれなっ事だがな・・・」

「英国？もしかして、グレாம்提督が！」

ギル・グレாம்。元時空管理局顧問官で、現在はイギリスで隠居生活をしている。なのは達とは浅からぬ縁を持ち、はやてにとっては唯一の親戚といえる立場にある人物である。

「それは無いだろう。今のあの御老体にそれだけの力は無い」

「そうなんだ。良かった・・・」

なのは胸を撫で下ろすと、冬弥に話の続きを促した。

「それじゃ、私達は英国まで行かなきゃならないの？」

「それも無いんじゃないか？報告では、古代遺物を所持してる奴の
ロストロギア
目安はつけているそうだ……。名前は……。っと、これだな」

冬弥が空中パネルに映し出した人物の写真と名前を見て、なのはは
驚愕した。

「フィアッセ……さん？」

海鳴市の某ホテルのゲストルームに、フィアッセ・クリステラは宿泊していた。毎年恒例のクリスマス・ソングスクールのチャリティ
ーコンサートツアー、その最初の開催国である日本に彼女は来日していたのだ。しかし、今日の彼女はツアーに関する仕事も、ある人物の訪問を心待ちにしている為に手がつかない状況であった。

“コンコン”

「失礼します。お客様がお見えになりました」

ボディガードが訪問してきた人物の身体チェックを行い、フィアッセの前にその客人が姿を現した。

「フィアッセさん、お久しぶりです」

「なのはっ!!、逢いたかったよ!!」

なのはが部屋に入って来るなり、彼女は駆け足で抱きついてきた。

「あゝ本当久しぶり!!もう何年逢ってなかったのかな?大きくなつたね!」

「十何年ぶりですね!私も楽しみにしてました!!」

二人はお互い微笑みあつたままその場で話出したが、そこに彼女の知らない客が顔を出した。

「楽しい会話に水をさして申し訳ないんだが、そろそろ俺の事を紹介してくれないか・・・なのは」

「なのは・・・こちらの方は?」

「え〜つと・・・何て言えばいいかな・・・冬弥君」

なのはが説明に困っていると、フィアッセが徐おもむきに口を開き・・・

「もしかして、なのはの旦那さん?」

「!!!!!!」

なのはは顔を真っ赤にし、有無も言わさぬ勢いで反論した。

「ちっ違います。違います。彼は幼馴染で仕事仲間で上司で今回はたまたま私と仕事内容が重なっただけで、全く全然微塵もこれっぽ

「うちもそんな事はないです！！！！」

なのはは気が動転してしまい、支離滅裂な言葉を発していた。それを横で見っていたフィアッセは一人微笑み、冬弥は頭を抱えながら溜息をついた。

「・・・落ち着いたか？」

「はい。お騒がせしました」

なのははしょんぼりと頂垂れたまま二人に謝罪をした。結局あの後、フィアッセに事の説明をしたのは冬弥で、なのはは終始暴走していただけだった。ちなみにフィアッセは時々高町家と電話連絡をしていたので、その時になのはの事も少なからず聞いていた。その事が功を奏し、余計な話をせず本題に入る事が出来たのである。

「つまり、最近宝石の類や出所の分からない様な物は購入もしていないし、拾ったりもしていないんですね」

「ええ。私は一切無いです」

今回、冬弥となのはがフィアッセを訪問した理由は、彼女が古代遺物ギョウを所持している可能性が高いと判断した為だ。実際彼女が訪れた場所には古代遺物ロストロギアの反応が強く現れる傾向が見受けられ、今日も突如として日本でその反応が確認された。・・・だが！

（古代遺物の反応を全く感じない。だが、彼女が嘘をつく理由もない。どうなってるんだ）

冬弥自身このような経験は今までに無く。サーチャーの誤作動ではないのかと思っていたが、後顧の憂いは断っておくに越した事は無い・・・と判断し、フィアッセにある提案を申し込んだ。

「フィアッセさん。今回のツアー、俺達もあなた方の周辺警護をしたいのですが、よろしいですか？」

「それは・・・また、どうして？」

「古代遺物ロストロギアというものは、俺達でもまだ全てを把握していません。今回のような事は過去に例がないので、万が一を考え俺達も御側にいたほうが賢明だと判断した次第です」

「・・・」

「もちろん。其方アナタにご迷惑をお掛けする様な事はしません。此方こちらとしても、余り地球ココでは目立ちたくないのです」

「・・・」

「分かりました。私からもお願いします。魔法とかそういうのは、この世界のボディガードでは対応が無理でしょうから」

「御協力に感謝します。それでは、俺達は色々やる事もありますので、これで失礼します」

冬弥が椅子から立ち上がり、帰ろうとした素振りを見せても、なの

はは微動だにしなかった。

「……?」

「おいっ、なのは!! もう帰るぞ」

「……」

「起きろ、起きろ、起きろ、起きろ、起きろおー!!」

冬弥が何回もなのはの顔に往復ビンタをし、最後に渾身の一撃を叩き込むと、ようやく彼女は我に返った

「いった〜い!! いきなり何するの!？」

「おまえがボケ〜つとしてっからだろう。とにかくさっさと帰るぞ!! やらなきゃならん事が腐る程出来たからな!」

「は〜い。御免なさいフィアツセさん、余りお話出来なくて」

「ううん。お仕事が忙しいんだから、しょうがないよ。また、今度時間のある時にゆっくり話そう」

二人はフィアツセに対しお辞儀をしてから、部屋を後にした。

ホテルを出てしばらくして、冬弥がなのはに尋ねてきた。

「なあ。あの人とおまえ達は、どういう関係なんだ」

「うん。一番上のお姉ちゃんって感じかな。ほらっ、家お父さんが事故で長い間入院してた時期があったでしょう？あの時に、お母さん一人でお店を切り盛りしながら、家の事をするのは大変だろうからって、お手伝いに来てくれたの」

「ほお、成る程な」

「昔からお父さんとフィアッセさんのお父さんって交流があったみたいで、お兄ちゃんとお姉ちゃんも子供の頃から凄く仲良しだったんだって」

「そのご縁で手伝いに来た・・・と。そういう事か？」

「そういう事です。後、ちょうど冬弥君が事故で亡くなったって知った直後だったから、私が少し・・・精神的にもね。だから、お母さんが気を使ってくれたと思うの」

そこまで話したのは少し憂鬱な表情になり、しばし沈黙していた。冬弥もそんな彼女の胸中を察して、あえて明るく今後の事について語りだした。

「じゃあ、世話になったんなら明日からしっからお前が彼女を守ってやれ」

「うん。そうするよ。ロストロギア古代遺物が在るか無いかは別にして、全力で守るよー！」

「おっしや！その意気で明日も頑張ってくれや」

「ちよっ！冬弥君やめてよ」

冬弥はなのはの頭を“くしゃくしゃ”と掻き乱し、最後に頭をポンと叩いた。その行為が彼女からしたら、子供扱いされたと思ったのだろうか？頬を膨らませ上目遣いで冬弥を見つめていた。

「悪かった、悪かった。侘びの印にあそこのラーメン奢ってやる」

冬弥は道路端にいる一つの屋台を指差していた。

「……冬弥君……自分がお腹空いただけだよな？」

「じゃ、いらねえんだな。俺は食って帰るから、おまえ一人で先に帰ってていいぞ」

「もう！また、そういう意地悪するんだから、私も食べるよー！」

冬弥の後をなのはが付いて行く。もし、自分達が魔法に出会わずに普通に再会していたとしたら、こんな風に過ごしていたのかもしれない……そう、冬弥は思っていた。

地球〜天使の歌姫〜（後書き）

第十七話『地球〜天使の歌姫〜』は如何でしたでしょうか？

今回は『とらハ3』に登場したファイアツセを出しましたが、このファイアツセは普通の人間という設定で書いています。只、土郎が大怪我を負った事故に彼女は関わり、その贖罪として、高町家にお手伝いに来た・・・という設定をしておりますので、原作ファンの方には申し訳ありません。

さて、ここで、今までお付き合いくださった方々に、作者から御詫びをせねばなりません。

これまで16話執筆してまいりましたが、作者の勉強不足の為に、今までのお話の中で間違った日本語や文法が多々ありました。

今回それらを正しく直し、中には加筆や新設定を加えたりもしました。只お話しの筋に変更は御座いませんので、これからの話を読んでいくのに問題はありますが、もし、お暇な時間がありましたら再び最初から読み直してみてください。

至らない作者の都合で皆様には大変ご迷惑をお掛けしますが、こんな作者でもよろしければ、今後もお付き合いください。

地球く宿命の始まりく（前書き）

戦闘民族高町家！！

その類稀なる能力は例え翠屋で働いている時でさえ、発揮できるのではないか！！？

そんな思いも過分に含まれた第十八話をどうぞ

地球く宿命の始まりく

「今年も始まりました、クリステラ・ソングスクールのチャリティコンサートを一目見ようと、ここ海鳴コンサートホールには、開演二時間前にも関わらず多くの方々を訪れています。この模様は実況生中継でお送りいたしますので、もう暫くお待ちください」

テレビからは、レポーターの元気な声が響いていた。翠屋の面々は、そのテレビ中継を見ながら和気藹々わきあいあいと仕事をしていた。

「今年も始まったね」

「そうね。お客さんも一杯だし、フィアッセも喜んでるでしょうね」

「確かに、毎年大盛況だしなあ。しかし、そうなってくると・・・
彼女も大忙しだろう」

「フィアッセもすっかり時の人になっちゃって・・・、一緒に遊んでたあの頃が信じられないよ」

昔、恭也と共にフィアッセの自宅で遊んでいた記憶が、美由希の脳裏に走馬灯の様に浮かんだ。あの頃は、世間の柵しがらみや大人の思惑等は全然知らなかった。ただ、大好きな友達と楽しく遊んでいれば、それだけで幸せだった・・・。その幸せを壊した事件が、今の新たな幸せを作る切っ掛けになったのだから、人生とは本当に分からない物だ・・・と、彼女は心の中で思っていた。

「そつえば、フィアッセにお礼の電話いれるの忘れてたっ！」

「なのは達をコンサートに招待してくれた事が・・・？でも、今は彼女も忙しいんじゃないか？」

「そうね。お礼はまた今度にしましょう。今は余り、フィアッセの邪魔をしないほうがいいわ」

「という事だが。どうだっ！美由希！？」

「お父さん達がそう言うのだったら、私はそれで良いけど」

冬弥達は、フィアッセが古代遺物ロストロキアを所持している可能性がある！！という真実を、士郎達には告げていなかった。彼等は、昨日帰宅途中に再びフィアッセに連絡を入れ、上記のような作戦を実行させた。それは、高町家一同や他の方々に無用な心配を掛けさせたくないという配慮だったのだが・・・。

「まっ、これが本当に彼女からの招待かどうかは、分からないけどな」

「そうだね」

「まあ、あの子達とフィアッセが気を遣ってくれたんでしょうから。そういう事にしておきましょう」

この一家に下手な隠し事は意味を成さなかった。

「久しぶりに・・・楽しんでください。なのは・・・」

「 }!!!」

「・・・何で・・・こんな事に・・・」

ティアナは現状が全く把握できておらず、このような状況になってしまった経緯いきさつを一人考え込んでいたが、冬弥はそんな彼女に対して気の抜けた声で話しかけた。

「お〜い、いい加減現実を認める。いくら考えても、出てくる答えは一つだろが」

「————ツ!!!!だから混乱しているんじゃないですかあー———!!!もう訳が分かりません!!!!!!」

「ツ。うるっせえなあ、さっき説明したろ?それで納得しろ」

事の発端は、なのはがフィアッセにみんなの紹介をしている時だった。フェイトが自己紹介を始めると、フィアッセが彼女の声に何かを感じとつたらしく、試しに音響とマイクテストを兼ねてのフェイト単独ステージを提案したのだ!無論、フェイトも最初は断っていたが、なのはとはやての『フェイトちゃん、歌うまいよね』の一言がフィアッセの背中を押してしまい、そのまま周りに流される状況と相まって現在に至っている。ちなみにシャーリーは、そんなフェイトの勇姿を観客席から激写していた。余談ではあるが、昨夜の話し合いの後、すぐに冬弥がレオンにフィアッセの護衛を命じていたが、彼女はその事を知らなかった。

「でも、私達は古代遺物ロストロギアの確保に来たんですよ!!!それなのに、こ

んな悠長な事してて良いんですか!？」

ティアナの言っている事は至極当然な事なのだが、冬弥はそんな真面目な彼女に対して呆れ顔で返答した。

「ハァァ。ホンツト生真面目な性格だな、おまえは。少しは息抜きしたらどうだ」

「冬弥さん達が抜きすぎです!!」

「抜きすぎなんて・・・若い娘が言う事じゃねえぞ。欲求不満か？」

「.....ツ!!!!!!」

ティアナは顔を真っ赤にすると、いきなり魔導端末デバイスを握り冬弥めがけて銃口を向けたが、そこになのはとはやてが騒ぎを聞きつけてやってきた。

「ここら、そないな物騒な物、ここで振り回したらあかんよお〜ティア」

「冬弥君も、少しティアを苛め過ぎだよ!ちゃんと謝って」

ティアナは二人が来ると魔導端末デバイスを収納し、何食わぬ顔で対応した。

「べつ別に・・・、私は何もしていませんっ!!冬弥さんが一人でふざけていただけです!」

「ふふつ。ほんなら、そういう事にしとこか」

「八神二佐っ！！」

「はいはい、それ以上は堪忍な。せやけど、冬弥君の言う事も一理ある。今からそないな気の張りようやったら、公演中にぶっ倒れてまうよ。特にこのコンサートは三時間もあるんやから、気を抜ける時は抜いとき。ロストロギア古代遺物が関係してへんでも、警護を仰せつかったんなら、歌手のみなさんを全力で守らなあかんしな」

「分かりました。八神二佐が、そう仰るなら・・・」

はやてがティアナを説得すると、冬弥はなのにもう一人の人物の居場所を尋ねた。

「なのは。レオンは何処行った？」

「外周りを見てくるって、さっき出て行ったよ。コンサートの開始までには、戻ってくるとは言ってたけど・・・」

「そうか・・・開演は一時からだっとな」

「そっだよ」

「・・・俺もちよつと外を見てくる。会場内はおまえ達に任せるが、通話は常時Openにしておくから、何かあったら連絡をくれ」

「うん。了解！」

「後は・・・」

冬弥は簡単な指示をなのは達に伝えると、その場を後にした。その

後、フェイトの単独ステージはスクールの学生やコンサートのスタッフから大喝采を浴びながら終了した。フィアッセは本気でフェイトをスカウトしようとしていたが、そこはなのは達が全力で死守し、コンサートの開始までこのような賑やかな雰囲気は漂っていた……。そして、遂にコンサートが開始した。

「ご来場ありがとうございます。今年もまた、ここでこうして歌う事が出来ます。聞いて下さい……。私達の歌を」

会場からの大喝采と拍手がフィアッセに贈られ、彼女を中心に歌姫達が壇上に舞い降りた。彼女達の歌声は聞く者達に安らぎを与え、皆その美声に酔いしれていたが、なのは達は緊張の糸を緩める事はせず、古代遺物の反応を注意深く確認していた。そして……。コンサートが中盤に差し掛かっても異常事態が発生せず、このまま比較的穏やかに終了するだろうと、その場の全員が思い始めた瞬間！ なのはに入ってきた一本の電話が、今後の彼女達等の行く末を左右する物語の新たな開幕の合図となった。

ここで時系列は少し遡り、コンサート開始から一時間程経過した翠屋に戻る。

「今のところ・・・平穩無事みたいだね」

「そうね。何事もなくてよかったわ」

美由希と桃子の二人は、微笑みながらテレビ中継を見ていた。彼女達もフィアツセやなのは達の事が、ずっと気掛かりだったのだ。すると突然、士郎はそんな二人に休憩を促した。

「しかし、ここまで来ればもう大丈夫だろう。二人とも、今の内に昼食を済ませてきたらどうだ？お客さんも、今日は余り来ないからな」

「そうね。それじゃ、お言葉に甘えて先に頂きましょうか？」

「そうだね。お父さん、お先に」

「ああ」

二人は店の奥に下がり、一人店内に残っている士郎はコーヒーカップを拭き始めた。

“カララン”

店の扉が開き、一人の若い男性が入ってきた。白のロングコートを羽織っており、身長は冬弥達よりも若干高く、体付きは端正な顔立ちに似合わずにがっしりとしていた。そんな男が長い銀髪を翻しながら、カウンターの椅子に腰掛けた。

「マスター。コーヒーをブレンドで」

「かしこまりました」

士郎は慣れた手付きでコーヒーを淹れ、男の前に差し出した。

「お待たせしました」

男は差し出されたコーヒーを一口飲むと、感銘の声を上げた。

「マスター、大変なお手並みだ。こんな旨いコーヒーは、ここ暫く飲んだ事がない」

「ありがとうございます」

「だが・・・」

男は突然不敵な笑みを浮かべながら、眼鏡を中指で軽く押し上げると、士郎に向かい合う格好で語り始めた。

「あえて落第点を言わせてもらえば、それは“一人”になった事だ・・・」

「・・・」

「店の中に居ながら、俺の事に気付いていたのは評価するが・・・、少し無謀だな。せめて、お嬢さんも一緒に居た方が良かったんじゃないか？」

「・・・君は誰だ・・・？少なくとも、俺は知らないな」

男は顔を綻ばせながら、士郎の質問に答えた。

「当然だ。俺もあんたに興味はない。ただ“兄弟”に会いに来ただけなんだが、・・・少し・・・劇的な演出をしようと思っただけだ」

「!!!!!!」

次の瞬間!!突然士郎が床に倒れこみ、そこから大量の血が流れ出た。すると、今まで奥に居た美由希が鬼気迫る表情で店内に現れ、その後を追うように桃子が姿を現した。

「あつ!!あなたつ!!!!!!」

「ほお、別に殺気も何も出してないのに気付くとは、大したお嬢さんだ」

「・・・お父さんに、何をしたの・・・」

美由希は士郎の様子を伺いながらも、努めて平静を装っているが、彼女の内心は穏やかではなかった。目の前の男に対する怒りよりも、その圧倒的な重圧プレッシャーに気圧されていたのだ。対して男はコーヒを啜りながら、まるで彼女の内面を見透かしているかの様に話し出した。

「無理はよせ。あんた達が優れた戦士だという事は、見ていれば分かる。おそらく、局の並の魔導師でも太刀打ち出来ない程の・・・な。だが、俺には勝てん。それは、あんた達も分かるだろう?それに、本来なら死んでいた命が、今まで生き長らえてきただけなんだ。もう十分だろ?」

「.....ツ!!!!!!」

男は悪意もなく平然と言い切った。その一言が美由希を激昂させた

が、彼女は自分を律し、母である桃子を助ける事に集中しようとした。その時……

「美……由・希。や……め・ろ」

士郎がうわ言のように言葉を発し、美由希の行動を制止した。桃子も美由希も士郎が辛うじてではあるが、生きている事を喜んだ。

「あなたっ！！無事なのね！！」

「お父さんっ！！しっかりして！！」

美由希は士郎の下へ駆け寄り、彼の傷の応急処置をしようと試みた。その光景を呆然と眺めていた男は、突然大声で笑い出した。

「はははははははははっ……！！こいつは素晴らしいな！！この技は、魔力耐性を持つ魔導師には全く役にたたんが、逆に耐性の無い人間には観面てきめんに効いてなあ。一瞬で心臓を喰らうんだが……、あれを避けたのか……。ははははははははっ……！！これは面白くなりそうだ！！」

桃子は目の前の男の異常さに呆然としていたが、美由希は一人気丈に振る舞い、男に尋ねた。

「あなたは……なのは達の敵ね……」

「ああ、そうだ。だが、あのお嬢さん達には用はない」

男はそう言って立ち上がると、左手の指でパチンと音を鳴らし、店内の空間の一部を歪ませるとそこに向かって歩き出した。

「今日はこの辺りでお邪魔するでしょう。余り長居すると、営業妨害になるからな。では・・・失礼」

男はそのまま空間の歪みに飲み込まれながら、下らない冗談を残して、美由希達の前から姿を消した。桃子と美由希はすぐに救急車を手配し、士郎を病院に搬送する手筈を整えると、なのは達に連絡を入れた。

地球〜宿命の始まり〜（後書き）

第十八話『地球〜宿命の始まり〜』は如何でしたでしょうか？

前書きであんな事書いてんのに、『美由希達闘わないのかよっ！』とツツコム方達もいると思いますが、そこは堪忍して下さい。

さて、地球編というか第一部もいよいよ大詰めです。『てかつ、第一部なんて、何処にも書いてねえじゃん！』と更なるツツコミをされてる方もいるかと思いますが、ごめんなさい。あつたんです。

次回である程度までの事はネタ開放しようかと考えています。途中から出番のなくなつたあの娘こが今後ストーリーに関係してくる事も、ちよつと開放しますので楽しみにして待っていてください。

ちなみにフェイトのステージ中の歌はみなさんの好きな物を脳内変換で聞いてください。

ではまた次回でお会いしましょう

地球へ新たなる旅路 前編へ（前書き）

今回はとんでもなく長くなりましたので、前編 後編に分けました。

前回の後書きで申しましたように、このお話で第一部完となります。

後書きは後半の方で書きますので、では、どうぞっ！！

地球へ新たなる旅路 前編へ

“ピーピーピー” “ピーピーピー”

「あれっ!?!」

なのは自分の腰に付けている通信端末が、点滅している事に気付いた。これは、土郎達に渡した自分達への直接連絡用端末なので、彼女は家族に何かあったのかと不安に思い、急いでモニターを開いた。

「なのは」

「お姉ちゃん、お母さん、どうしたの!?!」

そこに映っていたのは、桃子と美由希の二人だけだった。二人は真剣な表情でなのはを見据え、彼女の予想だにしていなかった事を話し始めた。

「お父さんが・・・大怪我を負ったの・・・」

「えっ・・・」

「魔導師にやられたの・・・何か・・・胸を撃たれたみたいなの・・・そんな魔法で」

「う・・・そ・・・」

絶望的な表情のなのはと違い、美由希は凜とした態度でなのはに現

状を伝えた。

「なのはっ!!！」

「ッ!!！」

「そんなに心配しないで。お父さんは大丈夫。今病院で手術中だけど、この先生は凄く腕がいいから、きつと、お父さんを助けてくれる。だから、なのはは自分の事にだけ集中して」

「ッ!!！」

なのはは美由希の対応に言葉が無かった。姉は自分達を憎む事等せず、むしろ気遣ってくれているのだから……。ならばっ!!！自分がここで狼狽していても何も始まらない。今自分の成すべき事は、民間人を平然と殺してしまうような凶悪犯を、一刻も早く拿捕する事なのだ。ヴィヴィオの時のような思いは……。『もう、二度としない!!！』。

「お姉ちゃんっ!!！犯人の特徴は分かる？」

そこには次元世界の法と秩序を守る魔導師達の憧れの存在、『エース・オブ・エース』がいた。美由希も彼女の迷いも何もない表情に胸を撫で下ろした。と同時に、ここまで遅く成長した妹の姿が、とても誇らしく思えた。美由希なのははに店で見た男の特徴を伝え、最後に一言。

「『守るべき者を守る為』に、頑張ってくださいっ!!！」

「うんっ!!！お姉ちゃん」

そして、なのはが通信を切ろうとすると、モニターの映像に桃子が現れた。

「なのは……」

「お母さん……何？」

そこには普段の優しい母の姿は無く。一人の崇高な精神を持った年長者がいた。

「なのは。“憎しみ”で行動する事だけは、絶対にしたら駄目よ。例え……そこに冬弥君が関わっていたとしても……」

母の口調は遅く語気も強くないが、なのはの心にはその一言一言が鉛の様に重く響いていた。

「お母さんの言う事、分かる？」

「……」

なのはは静かに瞳を閉じ、かつての事を思いだしていた。まだ弱かった頃の自分、相手を憎む事ではか自分を守る事が出来なかった情けない存在……だけどっ!!今は違う!!

「大丈夫だよ、お母さん。私は……いつまでも“あの頃”のままじゃないから」

娘の迷い無い一言を聞いた母は、いつもの優しい笑顔に戻り一言伝えた。

「いつてらっしゃい」

「いつています」

娘も母の思いに応え、一言だけ発し通信を切った。なのはは急いでみんなに現状を説明しようと連絡を入れたが、冬弥とレオンがどうしても繋がらず、二人を除く五人のみで今後の行動を決めようとした瞬間。彼女の魔導端末デバイスに緊急シグナルが入った……。

「ここは良い世界だ……。魔法も無い、ロストロギア古代遺物も無い。さぞかし人間は、“己が万物の頂点だと”思いつているんだらうな？」

男は丘の上から海を眺めながら語っていた。

「そう思わないか……。冬弥？」

男が振り向いた先には、コンサートホールに居る筈の冬弥の姿があった！？彼は男の質問に平静な態度で答えた。

「人の故郷を馬鹿にして楽しいか？」

「おおっと、これは失礼。久しぶりの再会に……。俺も妙に舌が回つてな。悪気で言つたつもりはないんだ」

男の顔には失礼な発言に対する詫びの表情など一切なく、相手を小

馬鹿にしたような表情を浮かべていた。冬弥もそんな下らない話をする為に来たわけでは無いので、単刀直入に男に尋ねた。

「今回の件は、全てのおまえの差し金だろ。・・・カイクム」

「・・・理由は何か？まさか、理由も無しに疑う訳はないよな」

カイクムは微笑みながら冬弥に近づき、傍のベンチに腰掛けた。

「正直俺は、おまえの下らん茶番に付き合つ気はない」

冬弥がそこまできつぱりと答えると、カイクムは両手を広げた格好で溜息をついた。

「やれやれ、もっと劇的な再会を演出しようと思ったんだがな。まあいい、この再会は俺としても余り楽しくないからな」

カイクムは腰掛けていたベンチから立ち上がると、歩きながら冬弥に尋ねた。

「どこから、気付いた？」

「昨日ファイアツセ・クリステラを訪問した時だ。あの時、なのはが意識を持っていかれてたからな。あの位の芸当・・・おまえなら容易いだろう。次に古代遺物の反応だ。ロストロキアいくら何でも、ありやおかし過ぎだ。それで、おまえの事に気付いた」

「・・・」

「おまえが絡んで来るとしたら、直接俺では無く必ず周りを選ぶか

らな。だからあの後、すぐにレオンに彼女の護衛を頼んだ。あの時一番危険なのは彼女だったからな」

冬弥は淡々とこれまでの推理を説明した。それを黙って聞いていたカイルだったが、冬弥の話が終わると大声で笑い出した。

「ははははははっ！！素晴らしいな冬弥っ！！全くもってその通りだ。そこまで読んでいるとはな」

「あんな見え透いた罫。誰だっけ気付くだろ」

「そうだなあ。少し簡単すぎたか・・・だが」

カイルは今までとは打って変わって、真剣は表情になり冬弥を見据えた。

「高町なのはの家族だけは・・・守る事が出来なかったな」

「・・・」

「結局おまえはそうだ。口先だけで何も出来てはいない。今回も、あの一家と一緒に連れて行けば良かっただろうに、おまえはそれをしなかった。その時点でおまえの考えがあま・・・」

「いや、別に予定通りだが・・・」

カイルの言葉を冬弥の言葉が遮った。それは感情がこもっていない・・・何とも冷たい一言だった。

「何!?!」

「あの一家を連れて行けば、おまえの標的は会場その物になる。そうなれば、さらに多くの犠牲者が出ただろう。だから敢えて、あの人には困らなうて貰った。俺に一番縁のある人物を、おまえが見逃す訳はないからな」

「・・・」

「・・・偽善だな」

「何とでも言え。結果として、被害が最小限に抑えられているのは事実だ」

「どうだっ！！お嬢さん方っ！！おまえ達の仲間はこんな非情な男だぞ」

「・・・」

「そろそろ出てきたらどうだ？かくれんぼは終わりだ」

カイルが見透かすように辺りを見回していると、空間の一部が突然塵気楼の様に歪み、そこから戦闘態勢のなのは達が姿を現した。冬弥は彼女に自分からの緊急シグナルが鳴った時は、現状の任務を放棄し、その場所まで来るようにと事前に伝えていたのだ。

「あなたには市街地での危険魔法使用及び、殺人未遂の疑いが掛けられています。抵抗をしなければ弁明の余地を与えます」

「自らの父親を殺そうとした男と、それを利用した男を目の前にしても、表情一つ崩さないとはな。流星は局の“エース・オブ・エー

ス”だ。その正義感に感服する」

カイムはあえて自分が士郎に大怪我を負わせた事を暴露し、なのはを挑発しようとしたが、今の彼女にそんな事は何の意味も成さなかった。母から言われたあの言葉『憎しみで行動するな!!』、その先に何かあるのかを一番よく知っているのは、彼女自身なのだから・

「挑発は無駄です。私は彼からこの事を事前に聞いていましたし、仲間も承諾済みです」

なのははここで嘘をついた。こんな事は自分も知らなかったし、他のメンバーで知っていたのは恐らくレオンだけだろう。しかし、長年の親友達は、この場の雰囲気をよく熟知してくれていたもので、なのはの嘘に戸惑う事なく頷いた。この光景に一番驚いていたのは冬弥だった。皆自分を否定してくるだろうと思っていたのに、むしろ肯定しているのだから無理もない。カイムもその一言で面白みをなくしたのか、続けて挑発してくる事もなかった。

「諦めて投降しなさい」

「今やったら、まだ間に合うわ」

「罪が軽いうちに投稿するのが、あなたの為です」

フェイト・はやて・ティアナが口々にカイムに投降を促したが、彼はそんな彼女達の心を見透かすように答えた。

「なら、何故バインドの一つも掛けないんだ？」

「ッ!」

「そう。お嬢さん方は頭が良い。だからこそ、冬弥が俺を捕獲していない現状で全てを理解しているはずだ。・・・俺の強さは冬弥と同等だ・・・とな」

「くっくっく!!」「」

四人は奥歯を噛み締めながら、カイクに自分達の考えを看破された事を悔しんだ。彼の言う通り、冬弥と同等の力を持っているのだとしたら、自分達では敵うべくもないと・・・。

「そう、お嬢さん方が俺に勝てる見込みは万に一つもない。だが・・・一つはある。この意味が分かるか?」

「何を・・・言っているの?」

「下らん謎掛けは止めてや」

「私達には今・・・あなたを倒す術はない」

三人が現状を一番把握しているのだろう。カイクの敵に塩を送る行為が、彼女達には只の侮辱としか受け取れなかった。

「やれやれ、本当に何も知らないらしいな。ここまで来ると、少々哀れみさえ感じる。・・・OK大サービスだ。お嬢さん方の質問で、答えられる物には答えよう」

「くっくく・・・ッ!!!!!」「」

その発言に今まで黙って話を聞いていた冬弥が、口を開いた。

「随分気前がいいじゃねえか。おまえらしくもない」

「ここまで無知だと、流石に可哀想だろう？後・・・馬鹿な気は起こすなよ」

「起こさねえよ。俺とおまえが地球こちで闘ったら、被害がとんでも無いことになる。付け加えるなら、おまえの固有スキルの発動を防ぐには、こうやって下らん談笑をするのが一番だからな」

冬弥はこの時点で、海鳴市の全員を人質に捕られていた状況だったのだ。それを防ぐ為に、彼は自らカイムの元に赴いていた。しかし、これはなのは達にとっては手痛い誤算だった。頼みの綱である冬弥が、既に行動を封じられていては、自分達には完全に成す術がない・・・。仕方なく彼女達は、情報収集を最優先に考えカイムに質問を投げかけた。

「では、あなたの目的はなんですか？」

なのはが質問すると、カイムはげんなりした顔を冬弥に向けた。

「冬弥く。そんな事も教えずに、何をこのお嬢さん方にさせようとしたんだ？」

「俺はおまえと違って大サービス中じゃねえからな。答える義務はねえよ」

再び冬弥のきつぱりとした発言に、カイムは頭を横に振り、渋々なのはの質問に答えた。

「気は進まんが、まあ良いだろ。俺達の目的は・・・“月の涙”の確保だ」

「「「「「・・・ッ!!!!!!」」」」」

「流星にそこまでは知っているだろう？」

「知っています。では、あなたの目的は次元世界の崩壊なんですか！？」

なのはの質問にカイムは余りにも平然と答えた。

「当然だろう。この世界の狂ったシステムを破壊するには、それが一番だ」

「狂ったシステムって何や！管理局システムの事を言うてんの？」

「それが狂っていると言うのなら、あなたの考えが狂っている」

はやてとフェイトはカイムを睨みつけていたが、彼は彼女達に対して哀れみの表情を浮かべていた。

「何も知らないというのは、本当に可哀想な事だ。まあその事は、いずれその馬鹿が話すだろな。それとは別の質問でもあるか？」

「「「「「・・・」」」」」

「なら、俺の質問に答える。・・・レオンを何処へやった？」

「「「えっ!?!」」」

皆その質問に仰天した。レオンが姿を現さないのは、冬弥の指示だとばかり思っていたからだ。冬弥自身この場にレオンがいないのは誤算だった。たとえ自分の動きが封じられていても、レオンがいればなのは達と協力して、カイムを捕縛する事が出来ると考えていたのだから。

「ああ。あいつは今頃、俺の部下と遊んでる頃だろう」

カイムは人差し指を上空へ向け、不敵な笑みを浮かべていた。

「・・・何の小細工をした？」

冬弥が疑問に思つのも無理はない。実は彼はレオンにもしもの時の為に、高町家の護衛を指示していたのだ。その為レオンは、コンサート開演前に会場から姿を消したのだが・・・、それから数分と経たぬ内にレオンの魔力を感じなくなつたのである。

「何、ちょっと面白い古代遺物ロストロキアを手に入れたんでな、それを使ってみた。感謝しろ、これは俺からの心配りだ」

「だれがっ!?!」

冬弥は吐き捨てる様に言ったが、カイムはその事を全く気にする事もなく、翠屋から消えた時と同じ行動をとった。

「では、俺はこれで失礼する。冬弥今日は会えて楽しかったぞ。お嬢さん方も、いずれまた何処かで・・・」

。カイクをそんなセリフを残しながら、闇の中へと消えていった・・・

地球へ新たなる旅路 後編へ

カイルが去った後の丘に皆は呆然と立ちすくんでいたが、そこにレオンが舞い降りてきた。相当の激戦をしていたのだろうか、その体は傷だらけであった。彼は戻ってくるなり冬弥の下へ駆け寄り、指示された任務を遂行出来なかった事に謝罪した。

「ハアハア、悪い冬弥。頼まれた件何も出来なかった」

「いや、全部俺の責任だ。あいつが従者を連れてくる事を考えていなかった。それより、傷の手当てをしる。かなり酷いぞ。誰か簡単な治療は出来るか？」

「せやったら・・・、リイン！融合解除！！」『はいですう！』

辺りが閃光に包まれ、はやとリインが融合解除した。リインはすぐにレオンの下に駆け寄り、その傷ついた体に治療魔法をかけた。冬弥は沈黙しているのはに向き直り、口を開いた。

「言いたい事と聞きたい事が山ほどあるだろう。今なら、どちらでも答えてやる」

「・・・聞きたい事は山ほどあるけど、言いたい事は一つしかないよ」

なのはは冬弥の顔を見据えたまま・・・

「お疲れ様」

なのはのその一言は罵倒されるよりも深く、冬弥の心を抉った。自分はその彼女の家族を危険に晒し、あわよくばそれを囿としたのだから、憎しみの言葉の一つや二つあるだろうに……。この幼馴染にはほとと敵わない……。彼は改めてそう思った。

「おまえ達は、文句の一つもあるだろう？」

冬弥はフェイト達の方を向きながら尋ねた。

「なのはが納得しているのなら、私はこの事について何も言う気はないよ。それに……。結果的にはその判断は正しかったと思うし、冬弥が四郎さん達を守る為の努力を怠った訳じゃないって事も、レオンの行動を見れば、何となく想像できる」

「私もフェイトちゃんと同じや。こんなんで一々文句言うたってもじゃあない。償いをするんは、結果を出してからや。そやる」

「私はつ……。難しい事はよく分かりませんが、冬弥さんの作戦に納得出来ない部分もあります……。それでも、あなたを信じてみます」

「リインもですう」

冬弥はそんななのは達の姿勢を誇らしく思った。口先だけの感情論を言うのではなく、客観的に見た意見を統合して、結果の是非を問うその姿勢に。そして、それは彼女達が、これまで闘ってきた人生の結果なのだろうと思った。そんな彼女達に対して、精神が成熟していないと勝手に思い込んだのは間違いだったと認識したが、それを口にする事も表情に出す事もなく……。ただ一言……。

「・・・そうか・・・」

その後・・・

レオンは傷の本格的な治療をする為に、一人本局に帰っていった。コンサートはあの後滞りなく終了し、事件が解決したのでこれ以上フィアツセ達の警護をする必要もなくなった事を、なのはが彼女に伝えた。フィアツセはなのはとの別れをかなり惜しんでいたが、最後は笑顔で別れの言葉を言っていた。士郎も如何にか一命を取りとめ、皆その事を大いに喜んでいたが、今回の件に対して冬弥は正直に自分の作戦を桃子達に伝えた。しかし、先のはと同様、桃子達も冬弥を攻めず、皆の無事を喜んでいたが、終始彼は己の非力さを悔やむ事しか出来なかった。そして今、転送ポートの置いてあるコテージにて、彼等はその身を休ませていた。

「さて、ここまで来たら正直に話してもらおうか？」

軽い休憩を終わらし、彼等はコテージの中にあるダイニングテーブルを囲って、今後の事についての話し合いを行おうとしていた。だがその前に、色々と聞きたい事を冬弥から説明して貰うのが先決だと皆で判断した結果、彼は今尋問席についた被告人のような状況になっていた。

「……ツ……あゝあ、分かった、全部話そう。……まずカ
イムの事についてだが、あいつの本名はカイム・レッドフィールド。
魔導師ランクは俺と同じEXで、元局員だ。辞めた理由は、あいつ
が自分で言っていた通りな」

なのははそこで、聞きなれた名前を耳にしたので、冬弥の話に口を
挟んだ。

「冬弥君。レッドフィールドってまさかっ!？」

「おまえの予想通り、クレア・レッドフィールドの実兄だ」

「……」

「話を戻すぞ。奴は基本単独で行動しているが、数人の手下もいる。
そっちは俺も会った事がないんだが、あいつ等の中心戦力が……
実はレギオンだ」

「レギオンって……あないな知能の欠片もあらへん奴等をどうや
って従えるん？」

はやての疑問を皆も同じように感じたのか、顔を見合わせ小言で喋
っていた。

「それは……俺も知らんっ!！」

「ちよっ、知らんってなんやの!！」

「知らんもんは知らんっ!……ただ、レギオンを生み出す方法

は知っているがな」

その一言に喧々諤々けんけんがくがくとしていた部屋が、一瞬で静まり返った。皆冬弥に向き直り、その顔を真剣に見据えていた。フエイトも固唾を呑んで次の言葉を待っていたが、気持ち先走り思わず声が漏れてしまった。

「それで、その方法って」

「月の欠片」と呼ばれる古代遺物ロストロギアを、魔導師に取り込ませるだけだ」

「それって・・・一体なんなの？」

「月の涙が発動した後、破壊された世界は高重力下にある。そこに莫大な魔力が取り込まれ、天文学的確立で生成されるのが“月の欠片”だ」

「それを取り込んだ者が・・・レギオンになる」

「ご名答。ようは超絶的な魔力を“制御”出来なければ自我を失い、肉体を大きく変貌させ、いずれはあの化け物みたいな姿になる訳だ。俺達が月村邸で出会ったレギオン達は恐らく、自我を失ったばかりの魔導師達だったと思う。俺も直接見たのは初めてだったからな」

「でも、そやったら周りの人の記憶が消えるんは、どない説明するん？今の話からやと、そこまでの事は出来へんのとちゃう？」

「そこに関わってるのが、あのバカって事だ。相手の記憶をいじる様な古代遺物ロストロギアでも使ってるじゃねえか？」

そこまで冬弥の話を聞いていたシャーリーが、何かに気付いたように質問した。

「あの、でも冬弥さん。さつき月の欠片は天文学的確立で生成されるって言ってましたけど、それだったら、あそこまで多くはならないんじゃないですか？」

「そうですね。精々数体もいれば御の字じゃないですか？」

「おまえ等はミッドでのレギオン襲撃事件の時に、現場に居なかったからわからないとは思うが、奴等は自己増殖が出来てな。しかもそれは戦闘中でも可能だ。下手な攻撃で傷つけても、それで分裂して個体数を増やすんだよ」

「・・・ほんなら、あの時はそれで・・・」

はやての脳裏にあの日の事が蘇った。いくら攻撃しても数が減らず、むしろ増えていく怪物の姿が・・・。

「そういう事だ。だから下手な魔導師には、奴等の相手をさせるべきじゃない。俺がおまえ等をスカウトした理由もそこにある」

「そうだったんだ」

「何か・・・ようやく本当の意味で納得できたような」

なのはとフェイトがそんな他愛ない事を話していると、冬弥から恐るべき事実が明かされた！！

「ちなみに、おまえ等三人も“月の欠片”を取り込んでるからな」

「はあっ!!!」

「「えっ!!!」」

これには流石の三人も驚愕した。自分達の体の中に、そんな危険な
古代遺物ロストロギアがあるなんて信じられなかったのだ。

「でも、私達はあんな怪物になってないよっ!!!」

「せやせや、まだまだ全然普通やでえ」

「自我を失う事も・・・多分・・・無かったと思うし」

三人はパニック状態になり、言葉もあやふやになっていた。しかし、
当の問題発言者は別に動じる事なく涼しい顔で話を続けた。

「あのなあ・・・さつき俺が言った事憶えてるか? “制御” 出来な
かったらって言ったろ」

「「「・・・」」」

「だから、おまえ等は制御出来てんだよ。ちなみにレオンもそうだ
からな」

何事もないような顔で淡々と話を続けた冬弥だったが、それを聞いて
いた三人は両手を机の上に置き、がっくりと頂垂れた。

「「「・・・騙された・・・」」」

「人聞きの悪い事いつてんじゃねえよ。俺はちゃ〜んと説明してた
る」

「でも、今は確かなのはさん達からしたら、騙されたと思って
も仕方ないですよ」

「シャーリーさんの言う通りです。今は冬弥さんが悪いです」

シャーリーとティアナが、冬弥に非があるとしてなのは達の援護射
撃を開始した。冬弥はそんな女性陣からの攻撃に、一人ぶつぶつと
文句を言っていた。

「うわあ〜男一人ってこういう時つれえ〜。いいよ〜いいよ〜男女
差別上等〜」

「ごめん、ごめん。ほらっ、シャーリーとティアも、もうその辺で
いいよ」

「だつてさ、ティア」

「残念です。少し面白かったから」

「S女がつー!!」

「…………ツ!…………!!」

コンサート会場の時のように再びティアナが激昂したので、それを
はやてが抑えた。

「はいはい、あないな事はもうせんでええよ。それより冬弥君、何で私等に月の欠片が取り込まれとる事を知ってるんや？」

「そうだよ。私もそうだけど、なのはやはやても本局の健康診断で体を調べられた時に、そんな物は今まで一度も検出されなかつたし」

「あれは宿主のリンカーコアと完全に融合するからな。健康診断なんかで分かる訳ねえよ」

「じゃあ、どうやって？」

「共鳴つてな。月の欠片を取り込んだ者同士、その存在を感知できるんだよ。だから、おまえ等も月村邸で遭遇した時、一目であれがレギオンだつて確信したろ？」

「・・・そういえば・・・」

「確かに・・・私はあれがレギオンだつて確信してたわ」

「私も・・・エリアサーチより早く気付いてた・・・」

「そうですよ！私はあれは人間としか思えなかつたのに、フィイトさんはレギオンだつて言つてましたよね！」

四人はあの時の光景を思い出し、確かにそう言われるとそんな事があつたな・・・と、今さらながら確認した。そうになると、ここでののはに一つの疑問が浮かんだ。

「じゃあ、冬弥君も月の欠片を取り込んでるの？」

「せやせや、冬弥君かて、レギオンの存在を感知したりもしてるしな」

「……ッ!!」

なのはの質問に冬弥はしかめ面になり、しばらく腕組しながら熟考した。そして……

「俺に関してのみ、ノーコメントだっ!!」

「え〜何で〜。さっき全部話すって言ったじゃない!!」

「今更男らしくあらへんよ。正直に答えや!!」

「男子に二言はないって言うよ。冬弥」

「そうですね。ここまで話したんだから、良いじゃないですか?」

「下手に秘密を隠すと、また疑われますよ」

「そうですね。そうですねっ!!」

女性陣の総攻撃が冬弥に集中したが、それでも彼は凜とした態度を崩さず。

「やかましいっ!!言えんもんは言えんっ!!はいつ話ここで終了!!全員転送ポート行くぞ!!」

「あっ逃げた!!」

「せつこいな〜ここまで言うといて。みんな後追うでっ!!〜こうな
ったら意地でも聞いたるんや!!」

「おーーーーーっ!!!!」

その後脱兎の如く逃げた冬弥を、女性陣全員が全力で追い掛け捕縛
したが、それでも彼は一言も口を割らなかつた。しかしこの時、彼
女達がこの話を聞いていたら、歴史はまた大きく変わっていたのか
もしれない。

地球へ新たなる旅路 後編（後書き）

『新たなる旅路』は如何でしたでしょうか？

それなりにネタを明かしましたが、みなさんお気づきでしたでしょうか？色々伏線らしき物を散りばめたつもりだったんですが？もし、気付いて頂けていたのならそれは作者としては嬉しさ半分、悔しさ半分です。

さて、次回からは第二部という事で、別の世界でのお話しを書きたいと思っておりますが、現状では何処まで書けるか分かりません。

それでは、また次回でお会いしましょう

番外編 オリキャラプロフィール（前書き）

お久しぶりです。

今後の事で色々と考えていますので、本編の再会はまだもう少し後になります。

ですので！！オリキャラのプロフィールを作りました。

今後登場予定の名前も書いたので、そちらもご覧下さい。

追伸；CVが設定されていますが、これはあくまで作者がイメージしている声ですので、読者の皆様に強要する気は御座いません。

デバイスの出力方式とプログラムシステムは、全て公式の設定から採用していますのでご了承下さい。

番外編 オリキャラプロフィール

*オリジナルキャラクター プロフィール

管理局サイド

名前 / 風間 冬弥 (CV 森川智之)

性別 / 男

年齢 / 21歳

利き腕 / 右利き

身長 / 185cm

体重 / 82kg

出身 / 第97管理外世界 現地惑星名称地球 極東地区 日本 海
鳴市

所属 / 時空管理局本局 評議会直属 遺失物管理部 機動零課 ブ
リユーナク大隊

役職・階級 / 機動零課 隊長・一等空佐

魔法術式・魔導師ランク / 近代ベルカ式 ?????・EXランク

流派 / 建速宗家 須佐尊皇流 (但し本人は真の継承者ではないと言
たけはやそうけ すさそんおうりゅう)

っている)

時空管理局の遺失物管理部において、存在しない零課の隊長を務め、その戦闘能力は歴代史上最強と言われている。幼少時は海鳴市に住んでおり、なのはの良き幼馴染であった(彼はこの時点で尊皇流の修行を始めていたので、恭也や美由希に度々練習試合を申し込んでいた)。しかし、彼が6歳の時に遭遇した事故により家族は死亡。自身も管理局に実験体として囚われ、全ての記録から存在が抹消された。そんな過去を持っているにも関わらず、陽気な性格で時折優しい一面も見せる(スケベな一面もある)。指揮官としては事前に策を用意し、一番被害が出にくい作戦を立案する等、以外と知的である。しかしその反面、なのはや士郎を囿とする等、非情に冷酷で合理的な思考も併せ持っている。そんな彼が管理局に居続ける理由は、『ある人物』を守る為だといわれているが、その人物が誰なのか?そして、彼が抱えている秘密とは何なのか?いずれそれは、物語の中で明らかになるであろう。

デバイスデータ

名称/エア (CV James Earl Jones ダース・ベイダーの声)

形状/大剣・大太刀

デバイスタイプ/アルティメットデバイス(インテリジェントとアームドの融合型)

出力方式/ユーザークロスリンク(術者の魔力を常にデバイスに循環させ安定化をはかる方式)

プログラム・魔法・カートリッジシステム／祈願型・近代ベルカ式・
ツインカートリッジ

形態／待機モード・バスターソードモード（基本形態）・エクスト
リームブラストモード

開発者／風間 冬弥

使用者／同上

冬弥が自身で作り上げた究極の魔導^{デバイス}端末であり、彼以外の使用は不
可能とされている。非常に巨大な魔道^{デバイス}端末で、刀身だけで冬弥の身
長を超える大きさである。最大の特徴は、術者の魔力を10倍も底
上げるツインカートリッジシステムを搭載している事である。通
常の3倍以上の魔力を圧縮して詰め込んだ特性カートリッジを同時
にロードし、内部で冬弥の桁外れの魔力と融合させ爆発的な生成を
可能としている。この時、魔力の融合は刀身部分で行われる。その
為普段は無色透明な刀身が、システム起動時はライトグリーン色に
輝いている（一説ではエアは古代遺物^{ロストロキア}を使って開発されたのでは無
いかと言われている）。プログラムシステムは、なのはのレイジン
グ・ハートと同じ祈願型で、基本的な防御・攻撃魔法は願うだけで
発動する。出力方式はユーザークロスリンク方式を採用、待機モー
ド時は彼の腕にプレスレットの形についている。カートリッジは刀
身の差込口に押し込む事で装填される

エアの線画【バスターソードモード】

名前 / レオン・スウィンフォード (CV 神奈延年)

性別 / 男

年齢 / 21歳

利き腕 / 右利き

身長 / 187cm

体重 / 83kg

出身 / 第1世界 ミッドチルダ 南部森林地帯 アルトセイム郊外

所属 / 時空管理局本局 評議会直属 遺失物管理部 機動零課
ブ
リユーナク大隊

役職・階級 / 機動零課 副隊長・二等空佐

魔法術式・魔導師ランク / 近代ベルカ式・SSSランク

現在管理局において唯一冬弥と肩を並べる事が出来る存在。本編中では明らかにされていらないが、その身体能力は全くの魔力運用なしで、Aランク魔導師10人を相手にしても余裕で勝てるほど（冬弥も同様）。実家は古代ベルカの王族を守護していた、生粋の騎士の

家系である（彼の超絶的な戦闘能力は、幼少時からの訓練の賜物）。但し彼の一族は大戦が終わった後、俗世との交流を断つ為にベルカの地を離れ、アルトセイムの森林地帯にその居を構えた。しかし彼は変化の無い生活に飽きてしまい、半ば強引に家を飛び出す形で管理局に入った。性格は非情に陽気で、余り物事を深く考えるのは苦手。但し洞察力や観察力は秀でているので、周りのちよつとした変化にもすぐ反応する。

デバイスデータ

名前/アトラトル (CV Reuben Langdon デビルメイクライ4のダンテの声)

形状/剛槍(レイジング・ハートのエクシードモードの形状。あれの先端が後ろにも付いている感じ)

デバイスタイプ/アームデバイス

出力方式/ダイレクトブースト型(術者の魔力出力をデバイス魔導端末側で強化・加速する事をメインとした方式)

プログラム・魔法・カートリッジシステム/祈願型・近代ベルカ式・
通常型

形態/待機モード・スパイクモード・トゥローモード・?????

開発者/時空管理局本局 技術開発部 零課担当班

使用者 / レオン・スウィンフォード

レオン用に開発されたAI搭載の人格型アームドデバイス。冬弥のエアと違い何も特別なシステムは搭載していないが、彼の槍術に耐える為に本体は剛健に設計されている。基本形態は刀身が閉じている状態で、スパイクモードになると刀身が4つに分かれて魔力刃を形成する。トゥローモードは主に投擲をする際の形態であり、刀身が閉じた状態になり、空気抵抗の軽減の為刀身が延長する。待機モード中は細長いクリスタルの形になる。プログラムシステムはエアと同じ祈願型、出力方式はダイレクトブースト方式を採用している。

名前 / クレア・レッドフィールド (CV 川澄綾子)

性別 / 女

年齢 / 20歳

利き腕 / 右利き

身長 / 164cm

体重 / 50kg

出身 / 第1世界 ミッドチルダ西部 エルセア

所属 / 時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊

役職・階級／秘書官・三等空尉

魔法術式・魔導師ランク／ミッドチルダ式・Aランク

インテリジェントスキル
先天資質技能／??????

本局武装隊の教導隊に所属している女性魔導師。前所属はミッドチルダ首都航空隊第11部隊であったが、突然の教導隊への転属命令が下された。魔導師としての能力は高く、先のJS事件の際も首都航空隊の一員として、ゆりかご撃墜に携わっていた。性格は非情に生真面目で融通が利かない堅物タイプ。しかし、心を許した人間には、そこまで堅い態度はとらない。今後の事件が彼女の運命をどう変えていくのか、それを知る者はいない。

デバイスデータ

名前／ライトブレイブ（CV Alyson Court バイオ
ハザードのクレアの声）

形状／サーベル（某SF映画の光の剣）

デバイスタイプ／インテリジェントデバイス

出力方式／ダイレクトブースト型

プログラム・魔法・カートリッジシステム／祈願型・ミッドチルダ
式・通常型

形態／待機モード・通常モード

開発者 / 時空管理局本局 技術開発部

使用者 / クレア・レッドフィールド

インヒューレントスキル
先天資質技能保有者であるクリア専用魔導端末^{デバイス}で、その性能は一魔導師が持つには少々高すぎるのでないかと言われている。彼女の魔力をそのままダイレクトに魔力刃に変換し、破壊力よりも切れ味を優先した魔導端末^{デバイス}である。多重シールドを軽く切り裂き、高濃度圧縮された魔力刃は、AMFを展開する敵にも有効である。特別な形態^モ変化は無く、待機モードはプレート状の板になり彼女が身に付けている。

今後登場する人物

名前 / ダグラス・クエイド (CV 玄田哲章)
年齢 / 64歳

役職・階級 / 時空管理局 次元航行部隊 司令長官・元帥

名前 / マーリン・シルベスター (CV 永井一郎)
年齢 / 83歳

役職・階級 / 時空管理局 最高評議会 議長

対立サイド

名前 / カイム・レッドフィールド (CV 井上和彦)

性別 / 男

年齢 / 21歳

利き腕 / 右利き

身長 / 189cm

体重 / 86kg

出身 / 第1世界 ミッドチルダ西部 エルセア

所属 / なし

役職・階級 / なし

魔法術式・魔導師ランク / ??????・EXランク (但し局を抜けた時点で失効)

インテリジェントスキル
先天資質技能 / ??????

冬弥達の前に突如として現れた謎の人物。冬弥に会いに来ただけと言っているが、その真意は定かではない。人を見下す傾向があり、度々なのは達を馬鹿にしていた。そんな彼の目的は『月の涙』を手に入れ、次元世界を崩壊させる事。彼曰く狂ったシステムを破壊する為との事だが、管理局システムの事を言っている訳ではないらしい。彼と冬弥の因縁が明らかになった時、全ての謎は紐解かれるの

だろうか？

デバイスデータ

現時点では不明

今後登場する人物

名前・性別 / カイキアス・女 (CV 小林沙苗)

名前・性別 / アペリオテス・男 (CV 諏訪部順一)

名前・性別 / スキロン・男 (CV 近藤隆)

名前・性別 / リプス・女 (CV 藤村歩)

父と子（前書き）

先に謝っておきます。

今回の話にはなのは達女性陣が一切登場しません。むしろ、おっさんによる人生の悟りの様な話ですが、それでも宜しければご覧下さい

（一応美少女アニメの二次小説なおっさん達で話が成立しているのかな・・・）

はっ！！でっでは、第二十話をどうぞ

父と子

「報告は以上です」

冬弥は暗闇の中、直属の上司である評議会に先だつての件について報告をしていた。

「カームは全ての準備を整えたと云う事か？」

「恐らくはそうでしょう。あの話ぶりから察するに、『月の涙』の所在地も大方の目処がたつていると思われれます」

冬弥に対して質問を投げかけたのは、『次元航行部隊 司令長官 ダグラス・クエイド元帥』であった。若い頃は執務官艦長をしており、かつて局に所属していたギル・グレアムの後任として『執務官長』の職もした事がある人物だ。そして元帥の名を一躍世に轟かせたのは、十四年前にエルセアで起こった、無差別連続殺人事件を解決した時である。その実績と経験を買われ、現在は司令長官職と評議員を兼任している。

「ですが風間一佐。カームが月の涙の所在地を把握しているという事は、あなたもその場所を分かっているのではないですか？」

「申し訳ありません、自分の方はまだ存在を感知出来ておりません。カームが何らかの妨害をしているか・・・あるいは」

「『アネモイ達』が妨害している可能性がある・・・という事ですね？」

「」 賢察の通りです。ミゼット提督」

現在評議会は三提督とクエイド元帥、そして議長のマーリン・シルベスターの五人で執り行っている。但し、三提督は評議員と自身の役職の両方も兼任しているの、正に老骨に鞭をうって働いている状況であった。しかし、三提督は前評議会が犯した過ちの清算をする為に、今の仕事に全力で取り組んでいた。

「次の策を考えねばならんな」

「レオーネの言う通りじゃな。いつまでも後手に回る訳にもいかん」

「ですが現状の戦力では、これ以上の捜査拡大は望めないでしょう。次元航行部隊を回すと考えても、彼がいなければ返り討ちにあう危険があります。最悪の場合、全滅と云う事も・・・」

「」

ダグラス元帥の意見は正しかった。カイムの実力は冬弥と同等なのだから、並の魔導師はおるかオーバースランク魔導師でさえ返り討ちにあう事は容易に予想できた。また、それ故に評議会は、常にカイムに対する策について頭を抱えているのだ。

「議長は・・・どうお考えですか？」

元帥は議長であるマーリンに顔を向け、彼の意見を求めた。齢八十を超えたその顔はシワだらけで長い髪と顎鬚は白く変色しているが、その威風堂々とした佇まいは、映画に出てくる賢者のようである。

「・・・風間一佐。お主は今の任務を引き続き行いなさい。今後の

事が決定しだい、追って連絡しよう」

「分かりました。自分は現在の任務を引き続き行います。ですが、一つだけご確認しておきたい事があります」

冬弥はマーリンの言う事に異を唱える事はしなかった。この偉大な賢者の思考を読みきれぬ者等、今この場には存在しないからだ。だが、それとは別に彼には気になっている事があった。

「クレア・レッドフィールドが自分の指揮下に入るというのは、どういう事でしょうか？」

冬弥が地球から戻ってくると、新たに臨時隊員が来ると云う情報が飛び込んできた。何とそれは、カイムの実の妹であるクレアだった。彼女が魔導師として優秀なのは知っているが、精神面ではまだ半人前といえるだろう。そんな彼女が実の兄であるカイムと対峙して、普段の力を出し切る事は難しいのではないか・・・と、彼は考えていた。

「彼女が必要だから呼び寄せた。彼女の能力は、お主等の任務には有効だからな」

「議長がお呼びになられたんですか！？ですが・・・今回の任務は彼女には・・・」

「つらい事が起こるかも知れんな・・・じゃが、事態はそうも言っておれんところまで来ておる。我々は何としても、あの者の暴挙を止めねばならん！！・・・それは・・・分かるな？」

マーリンの表情は穏やかだが、何かの決意を秘めているようにも見

えた。

「・・・分かりました。自分が責任を持って、お預かりします」

「うん・・・。他には誰か意見があるかの？」

マーリンは他の議員の顔を見回し、意見が出ない事を確認すると議会の解散を宣言した。

「では、本日の議会はここまでだ。皆ごくろつじやった」

「」「」「はっ！」「」「」

マーリンの立体映像が消えると部屋の照明がつき、冬弥に一人の人物が近づいてきた。

「冬弥！！」

「クエイド長官、何か御用ですか？」

「うん。実はな、『オラトリオ』が完成したそうだ」

「.....ッ！！遂に完成しましたか！」

「ああ、只あれは最重要秘匿兵器だからな。使用には評議会の許可が必要となる」

「分かっています。あれが発動したら一時的とは云え、世界規模で魔法行使が出来なくなりそうですから」

「そういう事だ。それとあれは俺の艦に搭載する事が決定した」

「エクステスへあれを？・・・確かに発動時のエネルギー消費量を考えれば、それが妥当かもしれませんね」

エクステス。それは次元航行部隊の旗艦を務めている超万能戦艦である。元々はクラウディアを超大型拡大発展させた次元航行船だったのだが、今後ゆりかごの様な超大型戦艦との戦闘を単艦でも行えるように改造したのがエクステスだ。当初は徹底的な武装面での強化とそれに伴う大幅なエネルギー増大を補う為に、新型機関の取り付けを最優先にした改造が施された。しかし、それでは艦全体のバランスが崩れてしまい、結果として完全な新造艦として建艦される事となった。

「ああ、俺もそう思う。あれは彼女の封印に使っている本物とは、設計自体が違うからな。システムも複雑で術式を構築する際も、エクステスに搭載している『ダグザ』程の演算能力がなければ不可能だろう」

二人が一頻りひとしき話した後、ダグラスは冬弥にある事を尋ねてきた。

「それはそうと、彼女の方に何か問題は起きたか？」

「いえ、あいつ自身にも魔導デバイス端末の方にも、未だ問題は出ていません」

「そうか。それは何よりだ」

「はい」

直後、冬弥の顔に暗い影が落ちたが、それをダグラスは見逃さなかった。

「おまえが気に病む事もあるまい。あの道を選んだのは、彼女自身なのだ。慰みにもならんだろうが。あんな事・・・誰が予想出来ようか」

「分かっています。あれは偶然が重なっただけなんです」

とは言いつつも、冬弥の内心は揺れていた。普段は何の迷いも無い鋼の意思を持っている彼だが、彼女の事になると少し融通が利かない一面が出てくる。ダグラスもその事を知っているの、ある策を講じた。

「・・・自分ばかり責めていても、何の解決にもならんぞ。冬弥」

「・・・」

「それにもし、彼女の力が暴走でもしたら、次元断層さえ起こりかねない事態となる。その時に彼女を止める事が出来るのは、おまえだけなのだから。自分の意思はしっかりと持て」

「・・・」

ダグラスの発言に対し、冬弥は少し苛ついていた。それを表に出さないようにしていたが、つい皮肉めいた発言をしてしまった。

「・・・俺はその為の監視役ですか？」

「ふっ。やはりおまえは彼女の事になると、冷静さを失うな」

「？」

「よく考える。今おまえが考えている通りだとすれば、それはつまり評議会公認の元に彼女の護衛を出来ると云う事だ。おまえには願ってもない状況だと思いがな？」

ダグラスは微笑みながら、視線を冬弥に向けた。彼はダグラスの心遣いに対し、先程の発言に罪悪感を憶えた。

「すみません。子供染みた真似をしました」

「かまわん。嗷けしかけたのは此方だ。おまえは物分りが良すぎるからな。たまにはそうやって嫌味の一つでも言わんと、体が持たんぞ」

「はい。分かりました」

「・・・それにな冬弥。おまえが彼女の事を一番に考えるのは、決して間違いではない」

「・・・長官・・・？」

ダグラスは冬弥に背を向けながら語り続けた。

「一番守りたい者を守る。これこそが皆が戦う理由の根幹として存在していると、俺は思っている。・・・恋人や家族、国家や信念、

皆それぞれ守るべき者は違うが、内に秘めている思いは同じだろう。だが、我々は余りにも無力だった。そうした全ての者達の願いを叶えてやるどころか、己が大義の為、多くの命を奪ってきた……」

「……」

「罪深き事ではあるが、我々にはそれしか出来なかった。だからと云って、そんな事が許される道理もない。いずれ我々には、然るべき処置が下されなければならぬ。それまでは、罪を背負い続けながら戦わねばならぬ。その重みを感じ、同じ罪を繰り返さぬ為に……」

「……」

「それこそが我々老いぼれの仕事なのだ。『全ての罪を背負い、この戦いの歴史』を終わらせる……！」

「……それが……長官の戦う理由ですか？」

「そうだ。……だが、冬弥。おまえが俺達に付き合う必要はない」

ダグラスは突然冬弥に向き直った。

「おまえには成すべき事があるだろう。その為に……この道を選んだのだからな。……違うか？」

ダグラスからの問いに冬弥は軽い笑みを浮かべた。長官からのこの一言は素直に嬉しかったが、そんな事は昔から決めていた。そう……あの頃から、その為だけに戦い続けてきたのだから。

「これも、一種の嚇けしかけですか。長官？」

「はははっいや、これは失礼した。そんなつもりは無かったんだがな。．．．只、おまえは彼女の事を一番に考えておれば良い．．．と言うつもりだったんだが、釈迦に説法だったか？」

「いえ、肝に銘じておきます。．．．ですが．．．」

そこまでの話を終えて、冬弥はある事に気付いた。

「そうなつてくると、カイムは何故あれ程強いのでしょうか？」

カイムに守るべき者等無く、あるのはただ全てを破壊すると云う思いだけだ。それが一種の戦う理由だといえは分からなくもないが、彼の根幹の強さは別に在る．．．と冬弥は感じていた。

「カイムの強さか。それは恐らく全てを捨てた者の強さ．．．といったところか？」

「全てを捨てた強さ．．．ですか？」

「そうだ。カイムの目的が達成されれば全ての世界が消え、そこには奴もいない。つまり、あいつは自分の命でさえ、守るに値しないと考えているのだ」

「．．．」

「例えば欲望に生きた者は自らの命や権力等を失う事を恐れるが、カイムにはそれすれも無い。つまり奴は、何かを失う恐さを知らないのだ。故に強い．．．と俺は思う」

「・・・失う者が無い強さと、守るべき者を守る強さ・・・と云う事ですか？」

「そういう事だ。正に対極者同士の戦いだな」

「対極・・・ですか・・・」

自分とカームは同じ存在だと思っていた冬弥にとって、この事実は意外だった。お互いに揺るがぬ信念がある事は分かっていたが、その信念が全くの逆だったのだから。

「・・・」

「冬弥。どうかしたか？」

「ッ！いえ、すみません。・・・少し考え事をしていました」

「そうか。余り思い詰めるなよ。先程の話は、あくまでも俺の意見だ。重要なのは、おまえが納得できる答えを見つける事だ」

「・・・分かりました」

「さて、長話が過ぎたな。すまんが、俺は今から艦隊運用部との会議があるので、これで失礼するぞ」

「ああ、すみません。足止めをさせてしまって・・・」

「何、かまわんさ。たまには、おまえと話をせねばならんと思っていたからな」

「有難う御座いました。お陰様で少しスッキリしました」

「うん。では、後の事は頼むぞ」

「はっ」

ダグラスはそのまま会議室を後にした。冬弥もなのは達に今後の説明をする為に、彼女達の元へと歩を進めた。

父と子（後書き）

えゝ第二十話『父と子』は如何でしたでしょうか？

おっさんと云うよりはむしろ、ご老人方の話ですね。人生経験豊富な老人会の会議とでも思ってくださいれば、それで良いです。

さて、次回からは再び女性陣を交えての話になります。その後はヴィイオを交えての話を作ろうと考えていますので、お楽しみ

ではでは、今回はこの辺りで、さようなら

新たなる仲間（前書き）

かなりお久しぶりです。

多くの方が連載終了したのかと思われるほど、期間が空いてしまいました。この事については本当に申し訳ありません。

では久々の第二十三話をどうぞ

新たなる仲間

「結構時間くつちまったなあ」

冬弥は先程のダグラスとの会話が予想以上に長かったため、なのは達が待つている部屋にやや早足で向かっていた。

「悪い。遅くなった」

冬弥がドアを開けると、なのは達が一齐に顔を向けた。

「冬弥君遅いよぉ」

「ああ、悪かった。ちょっとある人と話してたんでな。それで遅くなった」

「そうなんだ。じゃあ仕方ないね」

なのはも最近は冬弥の仕事を理解してきたので、余り深く追求する事はしなかった。

「それはそうと、久しぶりだな。レッドフィールド」

冬弥の挨拶に対して、クレアは椅子から立ち上がり敬礼をした。

「クレア・レッドフィールド二等空尉。本日ももちまして機動零課に配属となりました」

「おう。宜しく頼む」

「はいっ！！」

「……っ」と

冬弥は椅子に腰掛けると足を組み、資料を見る振りをしながらなのはに念話で語りかけた。

（カイクの事は……もう話したのか？）

（うん。後から知るよりは、その方が良くなって思ったから）

（……そうか……。動揺しなかったか？）

（やっぱり、かなりショックだったみたい）

（……だろうな）

冬弥はクレアの方をちらりと見た。

（でも、今はもう落ち着いてるよ。見た目と同じで、心も強い子だね。……だから……。変に気を使わない方が良くもしいれない）

（そうかもな。その方が良いだろう）

（うん）

二人はそこで念話を終了した。すると冬弥はまるで何事も無かったかの様に、クレアに質問を投げかけた。

「さて、今後の事について説明といきたいんだが……。おまえは俺達の事をどこまで聞いた？」

「なのはさん達から、これまでの経緯は全てお伺いしました」

「なら、これ以上の説明は不要だな。早速本題に入るぞ」

冬弥は評議会で決まった今後の方針をなのは達に説明した。それが終わると皆が持参した資料に目を通しながら、具体的な捜査活動についての会議を行った。会議が終盤に差し掛かった頃、彼はクレアのある異変に気が付いた。

「レッドフィールド。何か気になる事でもあるのか？」

「……………ッ！いえっ！何でもありません」

「そんな面して、何でも無い訳ねえだろ。気になる事があるんだったら言え」

冬弥が気にするのも無理はない。彼女は神妙な面持ちである資料をずっと見ていたのだ。

「……………では無礼を承知でお聞きしますが、このレギオンの誕生の仕方は……………少しおかしくありませんか？」

「……………ッ！」「……………」

皆その質問に少し驚いたが、すぐに平静な態度に戻った。

「おかしいって……………どんな所が？」

「その・・・辻褄があつてないと思いませんか？報告によれば、皆さんは大量の人型レギオンと交戦したとあります。ですが、人間だった時と全く変わらないレギオンが、自己増殖や分裂などを行えるのでしょうか？・・・そもそも分裂したレギオンには、『月の欠片』が存在するのでしょうか？」

「『月の欠片』が増殖や分裂に伴い、割れたり増えたりすれば疑問はありません。ですが、そのような事が起こるのでしょうか？・・・可能性は0では無いにしても、実際にそんな事が起こっているのなら管理局も『月の欠片』の一つや二つは所持している筈です」

「『月の欠片』が増殖や分裂に伴い、割れたり増えたりすれば疑問はありません。ですが、そのような事が起こるのでしょうか？・・・可能性は0では無いにしても、実際にそんな事が起こっているのなら管理局も『月の欠片』の一つや二つは所持している筈です」

「また、それ程大量に『月の欠片』が存在しているのであれば、この次元世界はレギオンだらけの世界になっていると考えます。・・・なのはさん達の様に耐性のある魔導師は、そうそういないでしょうから・・・」

「『月の欠片』が増殖や分裂に伴い、割れたり増えたりすれば疑問はありません。ですが、そのような事が起こるのでしょうか？・・・可能性は0では無いにしても、実際にそんな事が起こっているのなら管理局も『月の欠片』の一つや二つは所持している筈です」

クレアに悪気はないのだが、その一言はなのは達に対するある種の妬みに近い感情があつたのかも知れない。三人ともそんな無自覚な嫌味を聞くのは慣れていたし、自分達の恵まれた境遇が事実である事にも変わりないので、その事に反論する事もせず黙ってクレアの話聞き続けた。

「・・・ですが現実はそうではない。そうなりますと、あれ程の数

まで増殖しているレギオン一体一体に『月の欠片』があると云うのは……少し考え難いと思います」

「……つまりてめえは、レギオンの誕生に『月の欠片』は関係してねえ……と、そう言いたいのか？」

「はいっ！天文学的確立で誕生する古代遺物ロストロギアが一度に大量の魔導師に取り込まれる等、それこそ天文学的確立であり得ないと思いません。それに……完全に怪物となった個体毎の戦闘力も、さして違いが有る様には思えません。『月の欠片』を取り込んでいる個体と、そうでない個体がいるのなら、戦闘力にもそれが反映される筈です」

「……………」

「このように考察すると、この資料には色々と矛盾点があるのではないかと思えます」

「……………」

皆クレアの話聞き終わると、レギオンに関する報告書をもう一度読み返していた。以外な事に、そこにはレオンの姿も混じっていた。

「……成る程なあ。確かにそれは一理あるわあ。私等も全然気いつかへんかったけど、改めて読み返してみると、何や疑問に思えてくるなあ」

「確かに盲点でした。……こうして読み返してみれば、疑問に思う箇所がいくつもありますね」

「冬弥君からの情報やから、余り疑問を持ってなかったのがあかん

かったなあ。私もまだまだや」

「でも、……この情報もちゃんとした確証があるんですよね？ 確証が無かったら、データ保存する意味ないですから」

「そうだね、シャーリーの言う通りだ。ねえ冬弥、レオン、この事は誰からの報告で得た情報なの？」

フエイトが二人に疑問を投げかけたが、レオンは一人顔をしかめていた。

「……悪いが、この事について俺は何も知らねえんだよ。知ってるのは……おまえだけだろ……？」

レオンが冬弥に視線を向けると、皆も同じ行動をとった。

「……つつてもなあ。これはカイルが直接俺たちの目の前でやった事だから、辻褄が合わないも何もないんだよ」

「……………ツ!!!!!!」「……………」

「彼が……冬弥達の目の前で、直接レギオンを生み出したの？」

「ああ。だから俺も……これ以上は何も知らん」

「……冬弥君が何も知らないのなら、どうしようもないね」

「……面倒くせえけど、一から調べ直してみるか？ つつても、余り有効な情報とかねえけどな」

「まあ、出来る範囲でやればいい。損にはならねえだろうからな？」

「俺等の休みが減る」

「ぼやくなレオン。つー訳でこの件については、今後調査している。レッドフィールドも、それでいいか？」

「はいっ、了解しました!!」

「なら具体的な分担作業を決めていくか。まずは……」

その後の会議は目立った問題もなく、最後まで順調に進んでいった。

「今日はこちらまでにしとこう。後は各自好きにしてくれ。ああ、それと言いつつ忘れてたが、休暇中は滅多な事以外呼び出しはしないからな。しっかりと休んでくれ」

その一言で皆の緊張の糸がほぐれ、賑やかな談笑が始まった。女性陣は明日からの連休を満喫する為に、色々と予定を立てていた。冬弥とレオンはそんな女性陣を尻目に、まだ仕事を続けていたが、そこになのはが駆け足で近付いて来た。

「冬弥君、ちょっとだけ……時間貰えないかな？」

「あん、どうした？」

冬弥は作業の手を止め、なのはに顔を向けた。

「あのね。冬弥君、明日の夜・・・時間あるかな？」

「明日の夜か？・・・まあ作れない事もないが・・・、用件はなんだ？」

「明日ね、家に来ない？」

「ハア、おまえ家につ！？」

「うん。色々お世話になったから、そのお礼をしようと思って」

「・・・」

なのはは笑顔で答えているが、冬弥はその申し出を素直に受け入れる事が出来なかった。折角の親子の時間に自分は邪魔なのではないか、また同居人であるフェイトもこの事を聞いていないのではないかと色々思う所があるからだ。

「けどよ。お前確かフェイトと一緒に住んでなかったか？」

「うん、そうだよ」

「そうだよって・・・お前な・・・」

「でも、フェイトちゃんは明日の朝から保護してる子達の所にお泊りに行くんだって。だから明日は、私とヴィヴィオの二人しかいないの」

「・・・例のホームキーパーもいないのか？」

「そつだよ。私が明日と明後日は家に帰るから、アイナさんにお休みをあげたからね」

「・・・だつたら尚の事遠慮する。ヴィヴィオとも久しぶりに会つんだらう？親子水入らずで楽しめよ」

するとなのはは苦笑いを浮かべながら話しだした。

「にやはは・・・それがね。ヴィヴィオも冬弥君に会いたがつてるの。楽しいお話また聞かせてほしいって」

冬弥が初めてヴィヴィオと会ったのは、地球にいた時だった。なのはが毎日の様に愛娘と連絡を取り合っている時に、挨拶程度にヴィヴィオと会話をしたのが最初だった。その時話した内容に余程興味を持ったのか、以来なのはとヴィヴィオの会話に、彼は半強制的に参加させられていた。ちなみに冬弥がヴィヴィオに話した内容は、フェイトですら知らない幼い頃のはの話だ。

「お前のガキの頃の失敗談をまた聞かせてほしいって事か？・・・お前って・・・案外親の威厳ねえんだな」

「・・・ツッ！ちよつちよつと冬弥君っ！そんな事ヴィヴィオに話したの!？」

「おまえの愛娘からのリクエストだったからな。詳細に話した」

「・・・ツッ!!!!!」

なのは正直相当まいつていた。どうやら自身の子供の頃の失敗談を娘に暴露されたのが、かなり恥ずかしいらしい。それも詳細と云うオマケ付きなのだから、さらに性質が悪い。

「ううゝ折角今までのお礼をしようと思ってたのに。冬弥君がそんな酷い事をしていたのなら、こっちにも考えがあるよ」

「いや、そこまで酷い事してないから」

「問答無用です！冬弥君は明日絶対わたしの家に来る事。そこで今度は冬弥君の失敗談をヴィヴィオに話す事。・・・以上です！！」

「・・・」

「・・・」

なのはは背筋をピンと伸ばし、一指し指をビシツと冬弥に突き付けた。しかしその体は、次第にプルプルと小刻みに震えだした。

「・・・自分で言つといて恥ずかしがってんじゃねえよ」

「・・・お願いだからそれ以上何も言わないで・・・」

「・・・」

なのはの恥ずかしさは既に限界を超えていた。だが今更後にはひけないので、意地でもその格好を崩すまいとしている。そんななのはの行動に呆れて何も言えない冬弥に、今まで二人を傍観していたレオンが口を挟んだ。

「相変わらずだめえ等は面倒くせえなあ。行くなら行くっ！行かねえなら行かねえ！！それで良いじゃねえかよ」

「~~~~~ッ」

「・・・お前のその単純思考が、時々羨ましくなる」

「てめえが深く考え過ぎなんだよ。・・・で、どうすんだ？」

レオンからの問いかけに冬弥は沈黙していた。その間なのはは、ひたすら羞恥心と闘っていた。

「・・・分かった分かった。何とか時間作って行ってやる。そこでヴィヴィオに俺の失敗談も聞かせてやるから、もう無理するな。見てるこつちが居た堪れなくなってくる」

するとなのははその格好をすぐに止め、満面の笑顔をつくっていた。

「うん！！それじゃ明日の夜は、一杯ご馳走用意しとくねっ！！」

「おう。そうしといてくれ」

「じゃあ、仕事が終わったら連絡してヴィヴィオと一緒に迎えに行くから」

「おいつ、別にそこまで・・・」

「じゃあ、また明日ね」

なのははそう言うとフェイト達の方に戻って行った。冬弥は一人今

夜は徹夜確定と心の中で思った。レオンはそんな冬弥を見て一人微笑んでいた。

新たなる仲間（後書き）

第二十三話『新たなる仲間』は如何でしたでしょうか？

ようやくクレアの登場です。ここまで来るのに時間かかりましたが、ようやくメインキャラとして参加させる事が出来ました。後は頑張って彼女の魅力を書いていきますので応援宜しくお願いします。

さて、次回は高町家でヴィヴィオと冬弥の絡みを書きます。一体どんな話になるんでしょうか？

では、次回でまたお会いしましょう

救済（前書き）

お久しぶりです。前回から一ヶ月以上の月日が経ってしまい、本当に申し訳ございません。

こうなつてくると政治家の言い訳みたいで嫌なんですけど、作者自身の都合により連載速度が大幅ダウンしております。

それでもこの作品を読んでくれる方々には感謝以外何も出来ません。よりクオリティの高い作品を作る為にこれからも頑張っていきますので、どうか宜しく願います。

では、第二十四話をどうぞ

救済

「冬弥君こっち、こっち」

次元港のとある一角に『高町なのは』とその娘『高町ヴィヴィオ』はいた。なのはは笑顔で手を振りながら自分のいる場所を冬弥に示していたが、それは端から見れば夫を迎えに来た妻と娘のように見える事だろう。

「・・・」

今までの冬弥ならこんな出迎えには気恥ずかしさを感じていたが、これも一種の慣れであろうか。『多分、あいつならやるだろうなあ』と予想した通りの行動を彼女がしていたのだから、別に恥ずかしくも何ともない。むしろ一々こんな事で恥ずかしがっていても馬鹿らしいと思いはじめていた最近の彼は、なのは達の元へ気にせず向かって行った。

(・・・あれ、そおいや)

その瞬間、彼はその場にピタリと止まり今日の行動を思い返していた。実は彼にしては珍しく、今日は待ち合わせの時間よりも三十分前に到着していたのだ。仕事が少なかったのも大きな理由だが、レオンが雑務の半分を手伝ってくれた事が一番の理由だろう。その事に関しては素直に感謝の言葉を伝えたが、その後のレオンの発言・

『子作りは程々にしとけよ』

に対しては言葉の代わりに少し強めの遅延式設置魔法を置いて部屋を後にしていた。話が少し脱線したが、とにかく今日の彼はいつもよりも早く待ち合わせ場所に着いたという事は事実だ。なのだが、既に目の前にはなのはとヴィヴィオの二人がいる。その現状に彼は少々呆れ顔で彼女に質問した。

「・・・おまえ等・・・何時いつから待ってたんだよ？今日は結構早めに来てる筈だぞ？」

「え？うん、十分前位だったかな？」

「・・・まあ、それ位ならいいんだけどな。おまえの事だから一時間位待ってるのかと思ってよ」

「にはははっ。流石にそんなには待てないよ。ヴィヴィオもいるし」となのはは手を握っているヴィヴィオに向かって優しく微笑みながら

「ほら、ヴィヴィオ。お客さんにご挨拶」

「うん！！・・・えっとお・・・はじめまして、高町ヴィヴィオです。こんにちは」

ヴィヴィオは冬弥に一步近づくと、きちんとお辞儀をして挨拶をした。

「おう。こんにちは。ちゃんと挨拶出来て偉いな」

「えへへえ」

「・・・と、褒めてやりたいところなんだが、今の挨拶だと満点はやれないなあ」

「ふえっ!?!」

「今、ヴィヴィオの言った挨拶にはちょっとおかしい所があったな。それがわかるか?」

「ふえっ!?!?ふええええっ!?!」

ヴィヴィオは自分の挨拶の何が悪かったのか理解できず、顔をあっちこっちあっちこっちに動かすだけだった。二人はそんなヴィヴィオの姿に微笑みながら・・・

(そっくりでしょ。口癖)

(・・・ああ)

と話しているようなアイキャッチをしていた。そんな二人とは対象的に、ヴィヴィオは未だに答えがわからないといった感じで悩んでいた。最初は少し戸惑っているヴィヴィオを見ていて面白かったのだが、流石に可哀想になってきたので冬弥はヴィヴィオの目線までしゃがみこむと優しく声をかけた。

「なあヴィヴィオ。俺とヴィヴィオは、今日初めて会ったか?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あっ!?!」

「そう。画面越しとはいえ何度かあってるよな？」

「うんうん」

「それで『初めまして』って、ちょっとおかしいよな？」

「・・・はい。ごめんなさい」

ヴィヴィオはその場で頭垂れてしまったが、冬弥はそんなヴィヴィオに優しく声をかけた。

「別に謝る事じゃないぞ。ヴィヴィオはちゃんと挨拶が出来たんだからな。偉かったぞ」

「えへへえ〜」

冬弥がヴィヴィオの頭を優しく撫でると、それまで落ち込んでいた表情が忽ち^{たちま}はにかむ様な笑顔に変わっていった。

「でも、今度からは気をつけような」

「はいっ！」

「ん〜おほん」

なのはがわざとらしい咳払いをすると、二人は彼女に視線を向けた。

「二人共。こんなところで話すより、家に帰ってゆっくりお話しした方がいいんじゃないのかな？」

「それもそうだな」

「うん さんせいっ！」

「それじゃ、お家へGo」

「はっい」

「あいよ」

するとヴィヴィオが突然出口に向かって走りだした。それに気付いたたなのはヴィヴィオを呼び止めようとしたが、その声よりも先にヴィヴィオの体は床から数十cm上空に浮かんでいた。何と冬弥がヴィヴィオを脇からすくい上げる様に抱きかかえていたのだ。

「ヴィヴィオおっ。いきなり走り出すのは危ないって事をママから教わらなかったかあ」

「うっえ〜ん〜ん。。。えへへえ〜」

「・・・素直に謝れない悪ガキには、お仕置きが必要だな。ほれっ
」！」

冬弥はヴィヴィオを抱えたまま回れ右をし、なのはの前にちよこんと降ろした。心なしかヴィヴィオの表情は少し緊張して見える。そんなヴィヴィオの前になのははゆっくりとしゃがみ込んだ。

「ヴィヴィオ。ママいつも言ってたよね？人がいっぱいいる場所では、ママの傍から離れちゃダメだよって。いきなり走り出すのも、危ないからしちゃうダメだよって。どうして、ママとのお約束守れな

「かったの？」

「……」

なのははいつもと同じ様なゆっくりとした口調で、そして今までで一番優しい声でヴィヴィオに尋ねた。そんなママからの問いかけに、ヴィヴィオは黙って下を向いているだけだった。

「早くお家に帰って、冬弥さんとお話ししたかったの？」

「……うん」

「そっかぁ。そうだよな。冬弥さんが来るの楽しみにしてたもんね」

「……うん」

「でもね。それでヴィヴィオが怪我でもしちゃったりしたら、ママは勿論。冬弥さんやフェイトママもみんな心配するからね。ヴィヴィオが楽しみにしてた冬弥さんとお話しも出来なくなっちゃうんだよ。そんなのは……嫌だよな？」

「……うん」

「だから、今度からはママとの約束。ちゃんと守ってね」

「はい……。ごめんなさい……」

「うん」

ヴィヴィオの『ごめんなさい』の一言を聞いたなのはは微笑みなが

ら娘の頭を優しく撫でた。

「んしょ。冬弥君ごめんね。お騒がせしちゃって」

「気にすんな。それより、マジでそろそろ移動しよう。突っ立つてるのも疲れるからな」

「そうだね。そうしようか。ほらっヴィヴィオ」

「
」

二人は意気投合すると、ようやくその場から移動を開始した。ヴィヴィオはなのはに手を引かれながら冬弥の前を歩いていた。二人が楽しそうに会話をしながら歩いている姿は、見ていてとても微笑ましい光景だ。思わずヴィヴィオの空いている右手を握って、三人横一列に並んで歩いてみたいと思う衝動にかられもした。

(ばからしいっ)

冬弥は自分に対して罵声をかけた。何故、自分はそんな事を一瞬でも考えてしまったのか。この親子に対して自分がそんな、父親紛いの真似をしていい資格等ないのだ。二年前のJS事件の時、自分はこの親子を己が目的を優先する為に見捨てたのだから。

(・・・あの日から、何の迷いもなく走り続けて来たのに。何で今さら)

二年前のある日、冬弥は前評議会から自分達を裏切ろうとしているジェイル・スカリエッティを抹殺せよとの命を受けていたが、彼はその命令を無視したのだ。理由は一つ自分の計画の邪魔になるであ

るう前評議会が、この世から消え去るまで後数日という事を彼は“知っていたのだから”。結果として前評議会は全員死亡、ジェイル・スカリエツティも逮捕され、聖王のゆりかごも破壊、ヴィヴィオと六課全員も無事生還となった。こうなる事を“知っていた”とはいえ、彼のとつた行動は余りにも冷徹で利己的である。

(まさか!?俺にもそんな願望がまだ残ってたって事か?・・・それこそ本当にばからしいっ)

自嘲的な笑みを浮かべようとするが、その表情が変わる事はなかった。その事で冬弥は確信した。先程の思いは一瞬の気の迷い等ではなく、自分が心から望んだ思いだという事に。

(・・・結局のところ・・・俺も普通の人間か・・・)

と次の瞬間。なのはとヴィヴィオが歩みを止めて、こちらを振り向いていた。

「二人共どうかしたか?」

冬弥は何事もないような感じで尋ねたが、なのはは明らかに彼を心配していた。最初は羨望せんぼうの眼差しを受けていたのに、突然彼から異質な雰囲気を感じたのだ。なのははまた、冬弥が何かを思い悩んでいるのだと気付いていた。しかし、そんな彼にかけてあげる言葉が見つからず、ただ彼の優しさに甘えている自分に齒痒さを感じていた。そんな時・・・

「・・・冬弥さんとママ。しょんぼりしてる・・・」

ヴィヴィオの一言になのはは我に返り、娘を心配させまいと体裁を

とりつくろった。

「ごめんね。ヴィヴィオ。心配しなくても大丈夫だよ」

「ああ。多分、仕事の疲れが溜まってたんだろ。悪いな」

冬弥はその時自分ではいつもと変わらない笑顔をしていたと思っていたが、なのははその笑顔に違和感があった。するとヴィヴィオはなのはを連れて冬弥の元にトコトコと近づき、背伸びをしながら片手を上に伸ばし始めた。その行動にわけが分からない冬弥となのはは、とりあえずヴィヴィオの目線までしゃがみ込んだ。

「ヴィヴィオ。おまえ何がしたいんだ？」

「どうしたの、ヴィヴィオ？」

と冬弥となのはが尋ねた瞬間。ヴィヴィオの小さい手が二人の頭を撫でた。

「冬弥さんとママ、良い子」

「・・・」

冬弥は何も分からなかった。ただ自分の頭を撫でている小さな手が優しく、暖かくて、それ以上にこの気持ちやどう表現すればいいのか分からなかった。なのははまた娘に助けられた事に言葉を失っていた。何も考える必要は無かったのだ。自分はただ、この子と同じ様に彼を支えてあげればいだけなのだ。だから、今はただこの一言だけ・・・

「冬弥君。・・・もう帰る」

「・・・あ・・・ああ、そうだな。・・・そうしよう」

そう言うと冬弥はヴィヴィオを片手で抱きかかえながら、空いている左手でなのはの右手を優しく握ってきた。突然の冬弥の行動になのは最初戸惑っていたが、やがてその行動に酔いしれていったのかなのはも冬弥の右手をそ・・・と握り返していた。三人はそのまま談笑をしながら、家までの帰路をゆっくりと歩いていった。

救済（後書き）

第二十四話『救済』は如何でしたでしょうか？

いきなり急展開過ぎたかもしれません。しかも場所が次元港と来たもんだから色々な人が一杯いますよ。ええ色々な人が・・・

でも、一応ここでヴィヴィオと冬弥の絡みを組み込んでおきたいな、過去作品との絡みを入れておきたいな・・・と思つてやつちやいました。

しかし、ヴィヴィオ良い子ですね。本当に良い子ですよ。こんな良い子が欲しいですね。いやほんと・・・

さて今回はこの三人は登場しませんが、逆にみんな大好きフェイトさんとはやて。そこにレオンが絡んでくる、まったりとしたお話しを書こうと思っています。

それでは、また次回でお会いしましょう

先行公開『エア』 全能力開放バージョン（前書き）

前回エアの線画を投稿しましたが、今回はエアの変形した線画を投稿します。

色付け等もしていこうと思っておりますが、中々出来ないのが現状です。形状だけでもみなさんにお見せしておきたいと思って投稿しています。

比較として通常バージョンのエアも投稿するので、何処が変わっているのかも確認してみてください。

大きさの比較もしたかったのですが、何故か尺が同じになってしまい比較させる事が出来ませんでした。

では、エアの真の姿をご覧ください

先行公開『エア』全能力開放バージョン

> i 1 1 2 0 9 — 1 5 2 1 <

バスターソードモード

> i 1 1 2 0 8 — 1 5 2 1 <

エクストリームブラストモード

上が通常形態、下が全能力を開放した形態。基本的なコンセプトは変わらず、冬弥が全能力を開放する為に彼の戦闘スタイルに最も適した形状をとっている。最大の変化は刀身が細くなり日本刀の様な形状をとっている事である。これにより刀身部分と柄部分が伸び、全体的に少し長くなっている。現在詳細なデータはレオンですら知らず、その姿を見てもいない。ただ、通常形態の時さえ圧倒的な破壊計数を示しているエアが、全能力を開放すればそれは次元航行部隊全艦の戦闘力に匹敵するとの考えすらある。また、それ程の力の存在を危惧する声も評議会ではあがっている。どちらにしてもエアが真の姿を現した時、全ての秘密が解き放たれるであろう。

先行公開『エア』 全能力開放バージョン（後書き）

エアの真の姿は如何でしたでしょうか？

この形態が物語りに登場するのはもう少し後になりますが、そこまで行くのにはどれ位かかるかは作者にも分かりませ。その点に關しましては御詫びするしかございません。

さて、この絵は一応ずっと投稿しておこうと思います。物語が終了すればどうするかは分かりませんが、連載中は常時投稿しておきます。

それでは次回でまたお会いしましょう。

風間 冬弥 バリアジャケット装備時（前書き）

どうもです。今回も本編ではなく、イラストと新しいデバイスについての説明のみです。

いい加減さくさく本編を書いていかなきゃいけないなと思いつつも、こうやって逃避行したりしてます。

今回は人物画も書いて私がイメージしている冬弥を描いてみましたが、色々な変な所があるので、そこは温かい目でスルーしてください。特に冬弥の目は拡大しないと分からないです。

では、どうぞ

風間 冬弥 バリアジャケット装着時

> i 1 1 5 4 2 — 1 5 2 1 <

風間 冬弥 (バリアジャケット装着時)

デバイスデータ

名称 / エイジス (CV HIROKI YASUTOMO)

形状 / 盾

デバイスタイプ / インテリジェント

出力方式 / ダイレクト・ブースト型

プログラム・魔法・カートリッジシステム / 祈願型・近代ベルカ式・なし

形態 / 待機モード・通常モード

開発者 / 風間 冬弥

使用者 / 同上

このバリアジャケットは左腕に装着している魔導端末『エイジス』デバイスに収納されている。その為『エア』を起動させてもバリアジャケットは装備されない(冬弥の魔力量を考えれば必要性がないから)。

エイジスはエアと違い防御に特化したデバイスであるが、近接戦闘が可能な武器を備えている事から、ある程度の戦闘力も持っている。但しこの武器は閉所での使用目的で作られた物である為に、エア程の圧倒的攻撃力はもっていない（それでもバルデツシユのライオットブレード並の威力は持っている）。また、盾の由来通りこのデバイスには術者の魔力を増幅し、通常のシールドとは次元の違う強度を持つシールドを展開する事も可能である。そして最重要機能として能力開放したエアが周辺に与える被害を抑える結界を展開する事も出来る（通常の結界ではエアの力で簡単に破壊される）。勿論エイジス単体での起動も可能だが、エアのエクストリーム・ブラストモード起動に連鎖起動するようプログラムされているので、冬弥も余りエイジスを単体では起動させない。待機中は彼の左腕にプレスレットとして付いている。

風間 冬弥 バリアジャケット装備時（後書き）

如何でしたでしょうか？

とりあえず、エアと冬弥の対比はこれで分かってもらえたと思います。絵に関しては、これからも練習を続けてもっと上手くなるよう頑張っていきたいと思っています。

では、本日はこれで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1094/>

魔法戦士リリカルなのは Wind ~ A requiem to gods ~

2011年8月29日19時32分発行